

626

626-5



1200501539377

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

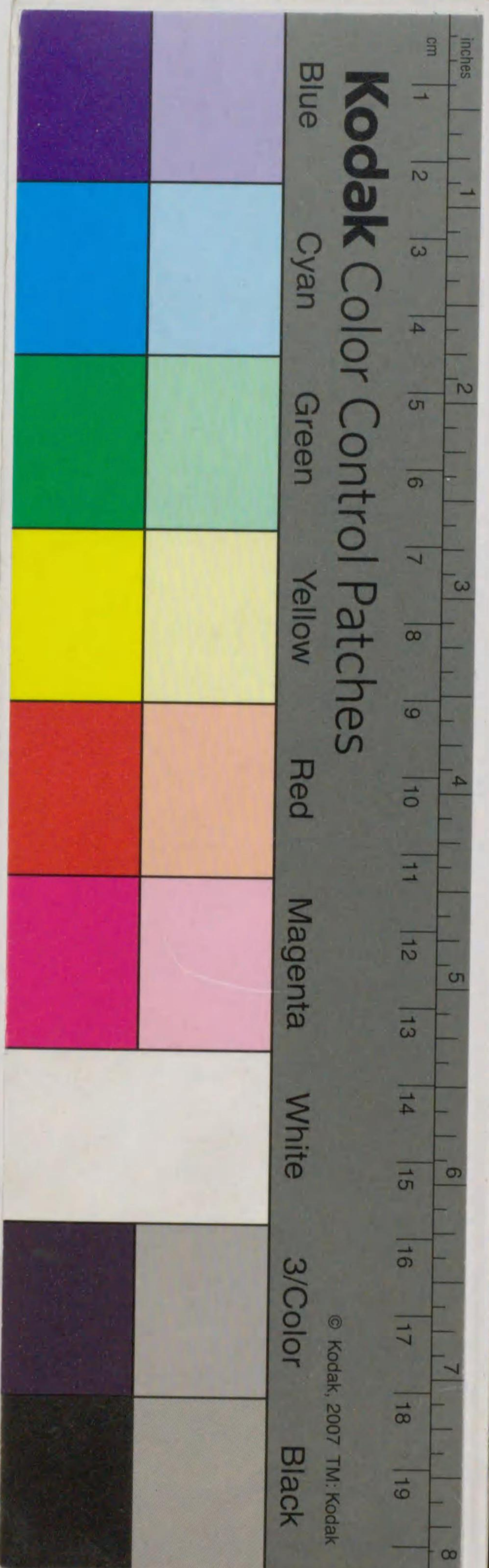
Magenta

White

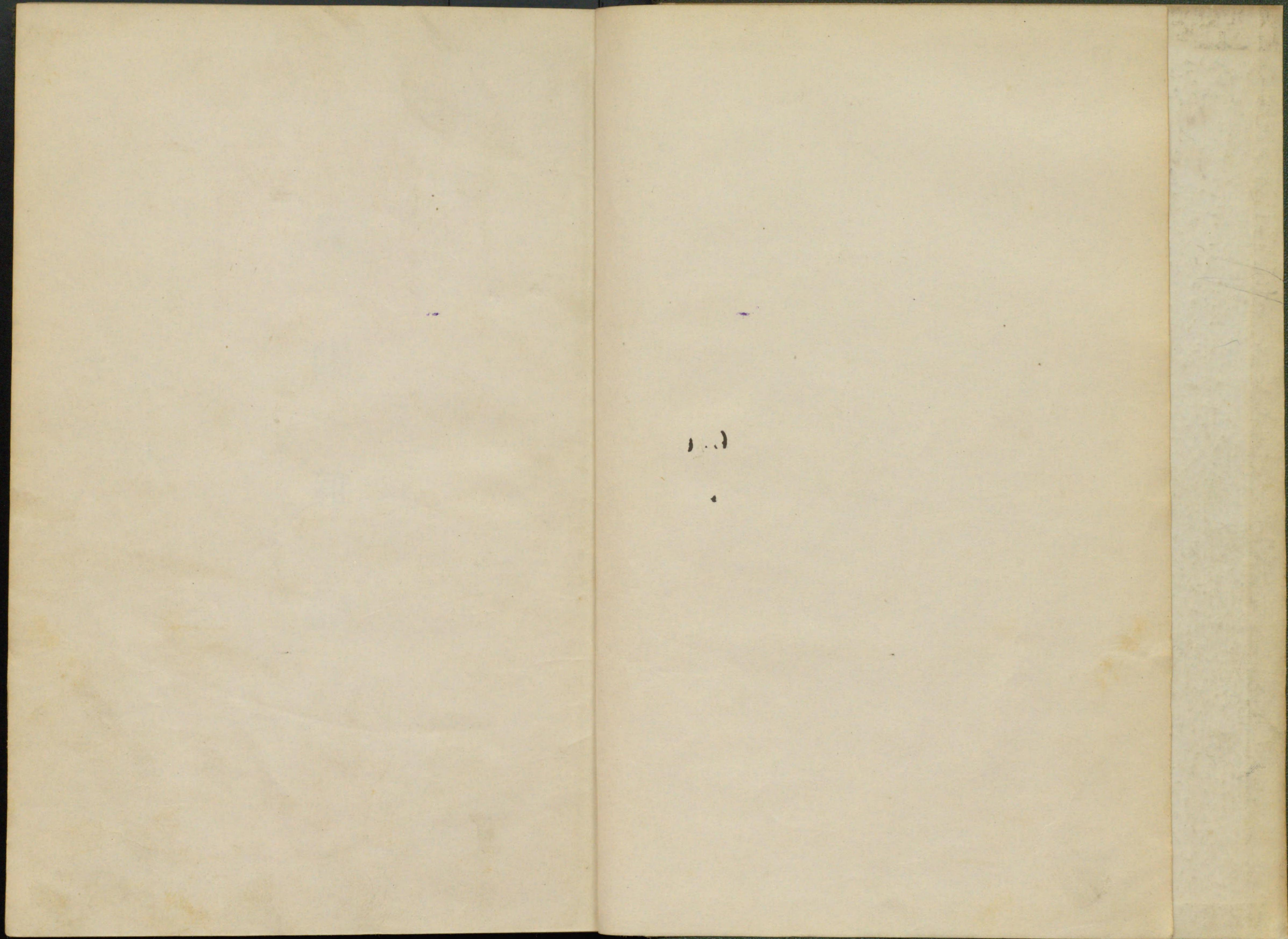
3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



403





陽

雜

記



626-5

解 題

尾陽雜記は尾張の國に関する風土、神社、佛閣、古城、系譜、記録、詩歌等を収録したもので、尾張歴史の研究に幾多の資料を提供する好参考書である。著者は世に水野守俊であると傳へられて居るけれども、さうではないといふ意見もある。名古屋市奥田町奥村定氏所藏本に、松平君山と思はれる筆蹟で、河村七郎宛の小さな紙が貼りつけてあつて、其の文中に「尾陽雜記は、崇巖院様高須侯 義行 勝野親郷右衛門に被仰付編述せられしも半途にして止み雜駁なる書なり云々」とある。

凡 例

一、本書は名古屋市立図書館所蔵名古屋市史料に據りて之を寫し、更に全館所蔵鹿山文庫の寫本に就て校正した。尚ほ群書類從、東鑑等に原據あるものは是等をも校正の参考とした。

一、原寫本は名古屋市興田町興村定氏所藏本十冊を謄寫し、全市南園町岩田鐵次郎氏所藏本により、誤りを正し、足りざるを補ひ、補遺として二冊を追加したものである。

本書は之をそのまゝ寫し取つたものであるが、第六卷所載の今昔物語中の數篇及び古今著聞集の一篇は、原本によりてそれぞれ訂正し、更めて補遺に載せなかつた。

一、原寫本欄外所載の字句は紙數を節約するため、本文の側に「」を附して記入した。文字明瞭であつても意義不明なものは傍線——を附し、讀み難き文字は△とし、虫が食つたり、すり取れたりして文字がなくなつて居る所は□を以て表はした。

一、假名は、讀み易からしむるため、本書にはすべて常躰に書き改めた。

一、原本の畧字は大抵正字に改め、平假名片假名混用せるものは平假名に書き改めた。

一、原本にある傍書異本の分にして意味通ずるものは之を採用し、又確に誤字なりと思はるゝものは之を書き改め、又疑はしきものは「リ、リ、カ」と小文字にて右側に記入して置いた。

一、原本には句讀點なく漢文躰のものに送り假名がなりののであるが、本書は讀むに便するため句讀點と送り假名を附けた。

一、原本には目次がないけれど、便宜上主なる事項を摘出して目次を作成した。

目次

卷一

尾張國名の由來——神名帳——尾州土産——尾張といふことの一説——葉栗郡光
明寺——博士大江匡衡——三高安資——野三成綱——鎌田正清——海東左近將監
——足助重範——篠島——松田定行——藤木田——三浦介時継父子——熱田大宮
司任廣——脇屋義助——土岐頼康、頼遠、頼益、持益、成頼、政房——志波系圖——伊勢物
語大淀——齋所成清の嫡子——渡——田淨房——承久乱——織田氏——尾張國論
熱田神社——素盞鳴尊——日本武尊——僧道行——白鳥社——楊貴妃——藤原師
長——源太夫神——八雲立の歌——頼朝奉幣——僧任憲——たんぶ山——八劔宮
天王——源太夫——紀太夫——白鳥山——高座結御子——加藤清正参詣——東門
南門——熱田神事——菅願寺——長明紀行——源光行紀行——玉葉集——新拾遺
集——大宮司——信長熱田参詣——裁談橋——沙石——一和僧都——恒業——宝
物——姉川合戦——眞柄十郎左衛門——蛇毒神天王——笠覆寺——笠寺城（戸部
城）

卷二

長久手合戦——小牧山——鱒清水——外山村——宇多津砦——御床机石——丹羽系譜——樂田城——小牧城——小幡城——小口城——比良城——長久手。杏樹城——荒子城——蒔田系譜——坂部城——一色系譜——黒田城——小田井城——葎屋須賀城——淺井系譜——岩倉城——守山城——品野城——古渡——末森城——上野城——鱒江城——鱒江合戦城攻

卷三

大野(宮山城)——瑞龍院——佐治系譜——名和城——大高——鷺津——丸根——緒河——入見明神——乾坤院——水野系譜——左近——雅繼——胤雅——下野又次郎——仁木義長乱——山田重忠——小河経村——太郎作——忠政——信近——守隆——信元——光康——土井利勝——久松系譜——水野忠重——勝成——勝重お萬(葎陽院)——傳通院——中山系譜——瀬戸——貞享三年名古屋町名改。

卷四

荒子観音——西蓮寺——聖徳寺——大須観音——七寺——大佛——惣見寺——白

卷五

林寺——大杯寺——高岳院——性光院——若宮八幡——十本松——大御堂——一女子村——くらかりの杜——神の杜——頼光寺——沢観音——清須山王——六角堂——駿河塚——蜂須賀——蜂須賀系譜——正眼寺——万徳寺——豊場秋迦——間嶋薬師——国府宮——難頁——龍泉寺——長母寺——無任——万歳——長母寺文書——山田系譜——森系譜——関系譜——吉田系譜——加藤系譜——小出系譜——岡田系譜——山口系譜——永祿九和歌會——頭護地藏——鳴海城——丹下城——山崎城——水野信元——佐久間父子——湯あひ地藏——桶狭間合戦——五寺——夜寒の里——松風の里——衣の浦——鳴海——阿波堤社——萱津原——光明寺天神——甚目寺——小山田紀内の傳説——信長手にかけ給ふ合戦——加藤清正傳。

熟田七社并末社神祇尊命記——詩と歌——宇治尾張守——井戸田八幡——付——亀井清水——亀井道場——高田城——積根——本多助定——羽黒——横井掃部助——小田井城——津田又六——松原嶋——清須城——杉原木下系譜——遠藤系譜——東常縁——三木系譜——常縁より宗祇への消息——姉小路系圖——河野一柳——栢葉系譜——足利義満直書——越智系譜——津島天王——巨旦王——蘇民將來——御蘆——四家七名号——年頭の門松——五月五日のまき——祇園——堀田系譜——

勝幡城——織田系譜——眞清田神社——一宮城——地藏寺——福壽院——有合葉
師——犬山城——瑞泉寺十境——清須城——名古屋城——土方雄久——相応寺——
正法寺棟札——建中寺——櫻天神——萬松寺——政秀寺——味方原合戰

卷六

旧事 本紀 日本武尊——熱田大宮祭——今昔 尾張國女伏美濃狐語第十七——尾張國女取
返細疊語第十八——尾張守五節祈語第四——大御堂寺本堂葺棟札文——元亨 釈実
敏——秋成深——秋賢懐——定慧——秋良忍——新羅道行——秋奉実——酒見神
社——東鑑——地藏靈驗記——古今 小熊——住海寺文書——大御堂寺文書——善
導寺文書——鎌倉 四覺寺文書——宗長記——東國道の記——尾陽八景五山——眞
清田大神——眞清田大神社重葺文——大縣神社——熱田社祈晴奉幣使之祝詞——
津嶋牛頭天王——惣社大神上梁文——長母寺——妙興寺——定光寺——甚目寺——
龍泉寺——笠覆寺——眞福寺——瑞泉寺——萬德寺——正眼寺——雲興寺——
密藏院——祐福寺——曼陀羅寺——性海寺——岩屋寺——善通寺——乾坤院——
総心寺——大御堂寺——四福寺——萬松寺——小松寺——安養寺——平田寺——
長福寺——蓮華寺——大吉寺——長光寺——正覺寺——聖德寺——寂光院——
奥成寺——妙勝寺——政秀寺——総見寺——白林寺——大林寺——相応寺——

建中寺——性高院——高岳院——大光院——天王坊——正法寺——長久寺——藥
師寺——法華寺——興善寺——光明寺——願證寺——久昌寺——光明寺——四増
寺——御園神明——清須山王——土田正八幡——上富神明——海禪院——菅願寺——
本遠寺——東龍寺——宝持寺——如法院——常樂寺——養林寺——大森寺——
長泉坊——石山寺——法藏寺——守細寺——戸部天王

卷七

豊場城——溝口系譜——味鏡山天永寺——森山(守山)——藤木田——瀬戸——
山田——長久手——谷掛——戸部——笠寺——星崎——名護屋——熱田——小川
知多郡——三國傳記の内——篠木庄——蜜藏院——成清子逸世往生事——井戸田
蚊野——源平盛衰記——二村山——埋田川——横根郷——大府——宝龜山延命寺——
城——源龍衛門狀——小川城——松平記——中興源記——小幡景憲軍書——志談味
法幢院——齋藤助十郎狀のうっし——野州狀——信長狀——秀元狀——利政狀——
義元狀——信正狀。
津嶋——堀田——英比庄、生路明神——成岩——木田城——矢梨觀音——大草城——
宮山城——瀬古觀音——龍泉寺觀音——龍泉寺縁起——承久記尾張河——桶狭間

今川義元討死場囃——熱田御事——盛衰記——承久記——伊勢物語大定——土岐
康行——細目——廣目——堀田覺阿碑銘——洋生院東弑房

卷八

狩野工藤宇佐美久津見伊東系圖——松平大給系圖——名古屋城——名古屋山三郎
——黒田城——妙仙寺——名古屋町の名——野田蜜藏院——寄進物之幸——永代
寄進狀——令寄附俵子之幸——永代賣渡申人之幸——蜜藏院什物——尾州東照宮
御祭禮行列——先駈町御奉行——押兼御先手頭——沢観音——寄進狀——尾州城
下之諸寺——朝鮮國來聘年代——琉球王使参府年代——直會祭
熱田大宮司——井戸田八幡——辨財天——大高——桶狭間にて討死の人々——與
田城——小川(緒川)——東池田——宗長法師自記——志談味の水野——盛衰記
——墨俣川——室山合戦——伊勢貞藤——尾張守護武衛——太平記義朝頼朝——
織田信孝生害の地——知多郡所々の観音——水野系圖——定補下司職事——補都
司職事——水野平太致秋申軍忠事——口——宣宗——かな証文一通。

卷九

智多——西浦川屋——岩滑城——中山系譜——野間大御堂寺——東登——本堂勸

進帳のうつし——奉活鑄鐘撞——岩屋観音——師崎——城——篠島——慢多羅
寺——祐福寺——尾州出生武士。
大須——佛通禪師——小松寺——前田玄以——寛永十九御葬礼——科野城——大
林寺、滝川忠往碑銘——小町塚——妙興寺——關山日光大照禪師行狀——妙興報恩
禪寺記——富田村——定光寺——水野城——河名城——内海馬場城——馬場観音
——岩田系圖——成岩城——河和城——戸田水野系圖——富貴城——宮山城——
海音寺——大草城——大野朝日系圖——琵琶嶋土器の里——生死川讚談橋

卷十

台徳院様御判寫——消息寫——善導寺へ清水左京亮寄進下地之事——為傳通院寄
進狀——乾坤院寺領之幸——旧事記——本朝編年録——徐福——日本武尊——尾
張連舌襲——道場法師——小子部鉏鈞——阿保廣成——佐味親王——菅原清公——
廣野河口堀開の争——尾張國海陸道程記——名古屋城——犬山城——織田勝長——
中川勘右衛門——池田信輝——土方雄久——織田寛廣——織田達勝——織田良頼
織田信長——織田信雄——小早川秀秋——福島正則——松平忠吉——覺阿碑銘——
淨生院東弑房——東鑑——大屋中三安資——原大夫高春——玉井四郎助重——平
康頼——僧正任憲——野間庄——祐範——熱田社奉幣——鎌田正清の女——太神

宮御領六ヶ所の地頭罷めらる事——梶原景高の妻——和田合戦——承久の乱——
信繩法師地頭職に補任の事——秀元狀——齋藤道三。
養月齋銘并序——蓬州常照菴藥樹詩之序——寄長之長嶋山天祥翁詩序——於尾張
國熱田神社供養大般若願文——請被拜美濃守關狀——道場法師傳——尾張連濱主
瑞雲山淨土禪寺佛宇化緣疏并叙——京都三十三間堂矢數目錄。

補遺卷一

尾張神名帳——前田系譜——久松及一色系譜——淺井系譜——知多郡及愛知郡の
因——水野系譜——久松系譜——中山系譜——鳴海阿波堤——遠藤系譜——延命寺。

補遺卷二

溝口系圖——鳴海星崎古城圖——小川古城圖——大高及鷲津丸根古城圖——津島
八景外四頂——岩崎城趾圖——蜜藏院見取圖——尾張新名物土産——城下神社并
佛閣——知多郡英比庄小川乾坤院末当圖介——中山系譜——小牧山附近圖——岩
崎城趾圖——二宮圖——大山附小口圖——科野附近圖——当国山——平松金次郎

萬德寺——熱田太神宮御託宣之記——尾州札所觀音——名古屋城下廿三番札所——
新谷藥師——空寺觀音——成岩及河和古城跡圖——布土城圖——古城趾圖——
戸田系譜——富貴、大草、宮山古城跡圖——畫鷹贊并詩三十餘首——性悟都寺肖
像贊并序——藥師寺化緣疏并序——織田常祐畫像贊——常觀寺記——尾州領石高。

永代賣渡申人
 合壹人 名は與九郎年は廿六也
 右此者我等普代相傳の者たりといへ
 とも依有要用米拾四俵に永代
 蜜藏院へ賣渡申處實正也若
 男子いくたり出來候共其方之普代
 の物たるへく候如此上は於子々孫々永代
 違亂有間敷候仍永代之狀如件
 永祿十三年三月十日
 勝忠(書判)
 新八(書判)

上の寫眞は、蜜藏院所藏の人身賣渡書付であつて、尾陽雜記卷八に載せてあるもの、原文である。左に全文を活字で記して置く。
 永代賣渡申人之事
 合壹人者 名は與九郎年は廿六也
 右此者我等普代相傳の者たりといへ
 とも依有要用米拾四俵に永代
 蜜藏院へ賣渡申處實正也若
 男子いくたり出來候共其方之普代
 の物たるへく候如此上は於子々孫々永代
 違亂有間敷候仍永代之狀如件
 永祿十三年三月十日
 勝忠(書判)
 新八(書判)

蜜藏院

永代賣渡申人之事
 合壹人者 名は與九郎年は廿六也
 右此者我等普代相傳の者たりといへ
 とも依有要用米拾四俵に永代
 蜜藏院へ賣渡申處實正也若
 男子いくたり出來候共其方之普代
 の物たるへく候如此上は於子々孫々永代
 違亂有間敷候仍永代之狀如件
 永祿十三年三月十日
 勝忠(書判)
 新八(書判)
 蜜藏院

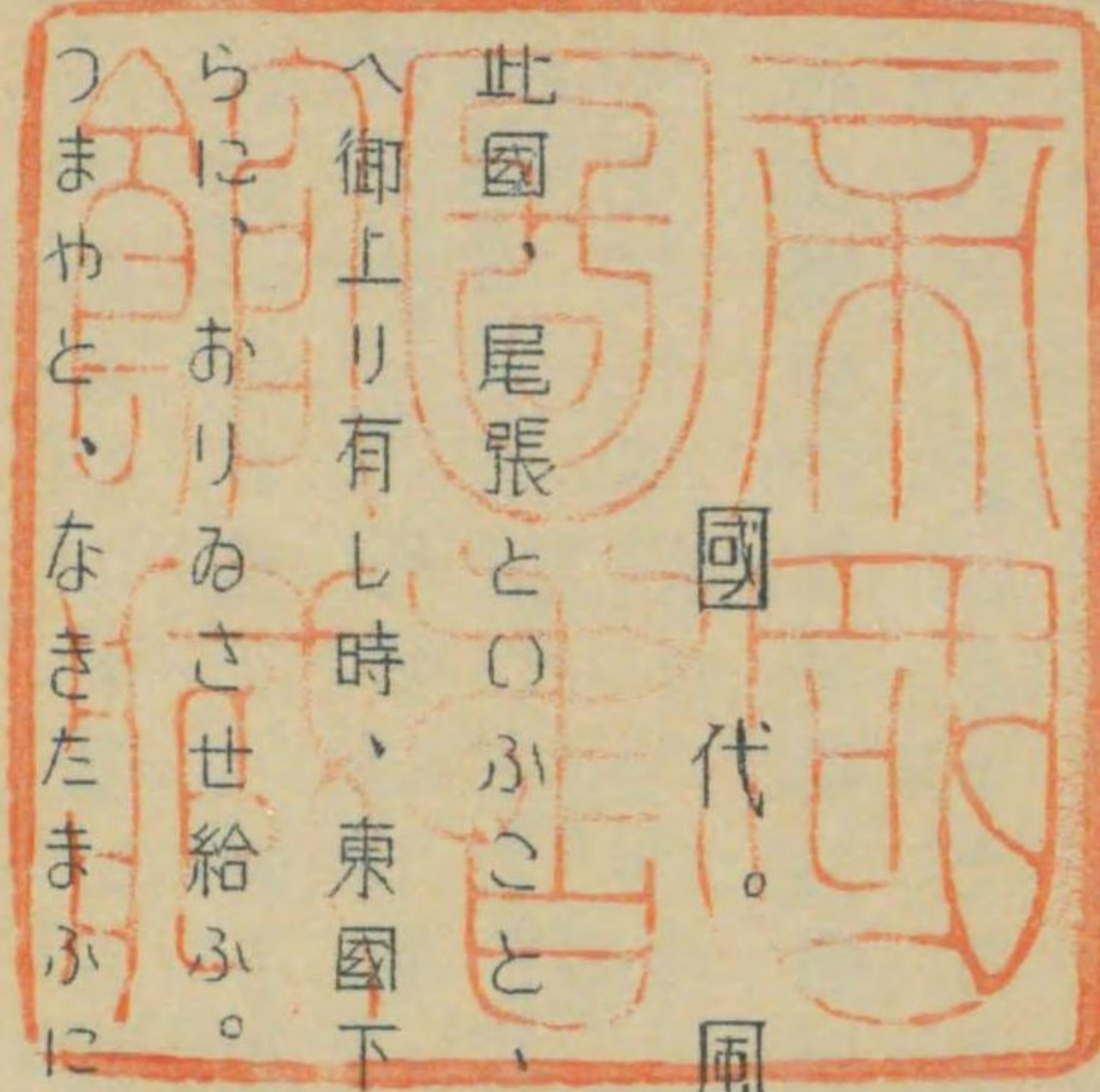


蜜藏院

新八(書判)

尾陽雜記 卷之一

國代。風土。



此國、尾張といふこと、日本武尊、東夷をしたかへて後、信濃國神の御坂をとをりて、都へ御上り有し時、東國下向にめし上らせられし源太夫の娘橘姫の事を思召、山路のかたはらに、おりぬさせ給ふ。かの姫のすみ給ひし、東海のかたを見、蹲居、わかつまや、わかつまやと、なきたまふによりて、其御言葉につけ、上州信濃の堺の山を、わかつまと号す。あかつま共いふなり。蹲居たまひし所は、うすいの峠と号す。しかふして、彼の姫の源太夫の宿所にたちいらせ給ひつつ、其所より白鳥となつて、西をさして、飛さり給ひぬ。其鶺鴒ゆき落つきたりし山を、鷺坂山と号す。かの尊崩御已前に、太神宮より給ひし村雲の劔を、さきたてて、太神宮へ、かへし給ひしか、みことの崩御の事を、此劔を、て、伊勢國より飛來て、尾張の海辺なる楠木にかゝりて、なけき焼るゆへに、楠木共に焼けり。其木たをれて田に入しかは、田水わきて、熱湯のことし。これによりて其所を熱田と号す。又其劔を件の楠にのりて納め奉る。熱田太神これなり。彼劔は、素盞鳥尊の時、出雲の大

蛇の尾より取りたりし劔なり。すなはち、かの蛇の尾の劔也。故にかの所を尾張と号す。但し張といふ字を書て、わりとよむ事は蛇の尾にありし時、此蛇の尾に有し劔、蛇のはり出しとき、彼肉張て、いつるゆへに張の字を書也。而して、此國は、美濃の國南の端、海のあいたに入、海水おつるに随つて、のほりて國となる也。依て後には、張入る御國共云。張の字を用ひて、尾張と書たる義なり。

又此國は、伊勢の安濃の津より、尾張の國のちまたの峠まで、おきわたる其道、一日半計、遠浅となる時、みきは、遙に出る所也。又俗の説に曰、此國美濃近江北國路の山より、南の海中に尾張出る故に此名有也と云々。中にも知多郡は、海中差出て、東西に海有。西はいせの國也。知多郡の長さ行程十四五里に余る歟。

神名帳訂正分
稱遠第一卷
参考

尾張州下管八郡。南北三日、地厚く、土肥、種生十倍す、里、多勝、日本國大上國也。海部府、今今割号。中島、羽栗、丹羽、春日部、今春日井、山田、愛智、知多、當賀島、答志、其、東海道の内第四。

和名類聚。尾張國。國府中島の郡に有、行程上七日、下四日云々。管八。田六千八百廿七段、三百十步、正公各二十万束、本稻四十七万七千束、雜稻七万二千束。

海部阿、中島、奈加、葉栗、波久、丹羽、渡、春日、加須、山田、夜方、愛知、阿伊、知多。
中島郡。美和、神戶、拜師、小塞、木、三宅、菫部、阿加、石作、以之豆、白野、川崎。
海部郡。新屋、中嶋、津積、志摩、伊福、島田、海部、白置、三刀、物忌、三宅、八田。

葉栗郡。葉栗、河沼、大毛、村國、若栗。

丹羽郡。五彩曼、稻木、以奈木、上春、丹羽、穂積、大栗、下沼、上沼、前刀、小弓、小野、小日。

春日郡。池田、柏井、安食、今昔字、山村、高苑、餘戸、

山田郡。兩村、主惠、船木、石作、志誤、山口、加世、餘戸、驛家、神戶。

愛智郡。中村、千電、原生古、日部、大毛、物部、厚田、作良、成海、奈留美、驛家、神戶。

智多郡。番賀、贊代、富貝、但馬、英比。
一神名帳延喜式。尾張一百廿一座、大八坐、小一百十三坐。中島大神おほむめ、眞黒田まくろた、大國靈おほくにたま、丹羽大縣、熱田。

○海部郡八坐小。漆部神社うるしへ、諸鐵もろくば、國王くにたま、藤島、宇太志うたし、由の伎ゆのき、伊久波いくは、憶感をかん。

○中島郡廿坐、大三小廿七。坂手さかて、見努みぬ、裳味もくひ、大神おほむめ名神大、神社。知除波夜ち、はゆ、高田、波篠伎はたかた、大神おほむめ名神大、神社。針熊はりくま、波篠伎はたかた、野見のみ、淺井あさい、大口おほくち、賣夫ひめか、眞黒田名神大、川曲かはね、酒見さかみ、淺井あさい、久多、堤治ち、石作いしつくり、千野ちの、塩江しほ江、布智、宗形もなきた、尾張大國靈、大御靈、鞆江ともえ。

○葉栗郡、十座小。突部あななく、阿遲加あちが、黒田、若栗、國土部日、尾州葉栗郡若栗郡は、中須那之社、大野、石作、宇夫須那、川嶋、伊富利部、大毛。

に秀丹云々。

一本朝編年録尾張阿育郡。

一編年録に尾張國主小子部鉦鉤。

一一條院御時、大江の正衡といふはかせ、長保の末に、當國之守にて下けるに、大般若を書て、熱田の宮にて、供養を遂、願文に、わかねかひすてにみちぬ、任限又みちたりと云々。
一池禪尼と申は、尾張守母堂也。尾張守は忠盛子云々。

池前大納言領國尾張守家入孫平兵衛宗清尾張より上洛云々。

一尾張住人、原の大夫高春度平忠、又上總介廣常甥也東鑑。

一尾張住人、大屋の中三高安資、すのまた川にて、平家と合戦して、悉く亡。こゝを去て熱田の社に籠ると云々東鑑。頼朝之代、安資和田義盛智となつて、有功。頼朝如元、管領所帶させ給。

一東鑑に曰、尾張守護野三判部丞成綱、將軍家六月廿九日着萱津時、同七月一日熱田社御奉幣、大宮司範経を以て劔馬を上たまふ云々。

一鎌田正清功士たるによつて、將軍家あはれみ思召、遺孤をたつねたまふに男子なし。女子簀本庄は春日井郡にありまひりければ、尾張國志濃幾、再波田名部兩庄を給ふと云々源平戦に継信麻光政鎌田範経の矢にあたりて死と云々。

一或本に、山田郡を除、号海部、又分海東海西。

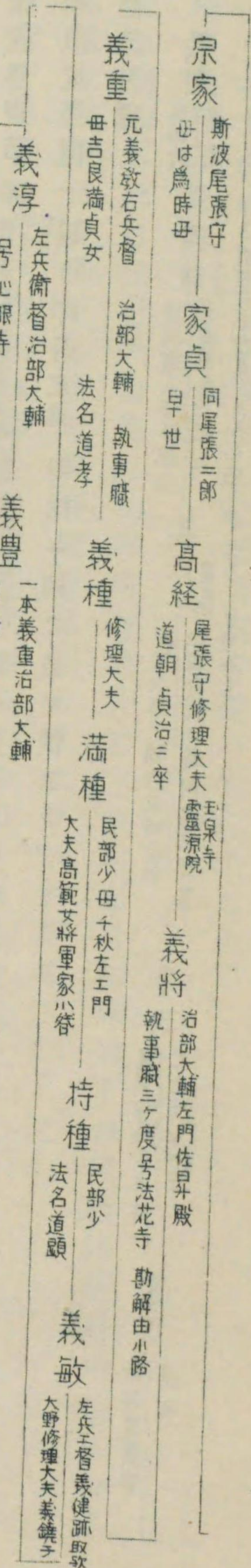
一太平記に六波羅より山門を攻るの時、佐々木三郎判官時信、海東左近將監等、美濃尾張の勢をさしそへて、唐崎松の辺までおし寄る。かくて海東三尺四寸の太刀をぬいて、真先に進、敵陣にかけ入、三人切ふせし處に、岡本房の播磨堅者快奥、長太刀にて甲の内をつきしかは、海東馬よりおつ。快奥やかて首を取、海東か嫡子幸若丸十五六計なるか、快奥に切てかゝるを、田のくろより射ける矢にあたりて、矢場に伏て死すと云々。

一同笠置軍に、美濃尾張の勢の中、荒尾九郎同弥五郎兩人を、官軍三川足助次郎重範射倒之と云々。

一新葉集に、尾張をすくるとて、都なる人のもとへ申遣しける、海山をみるそらもなしわか心さなから君にそへてこしかは。文貞云。

同延元三年秋後村上院、かさねて陸奥の國へ下らせまし、けるに、いくほとなく、御舟伊勢の國篠島といふ所へ着たるよし聞しかは、勅使として参りたりけるに、このたひ大風不斜して、御供なりけるふねとも、おほくうむしけるを、おなし風のまされに、御舟はかりは、ことゆへなく此國へしもつかせ給事、乍然太神宮の御はからひたるよし、神つかさともよろこひ申ければ、やかてこのよし羨し侍りける。次に、前大僧正頼意、神風や御舟よすらしおきつ波たのみをかけしひせの濱迎に。

篠島しのしま。今は尾張なれり、此嶋に、伊勢の末社ニテ所共、造營のとき共になると云々。
伊勢長島元尾張也しのしまと舊地也



義良は左兵衛佐、從四位下、治部大輔、下之尾州主也。後改義寛。

- 一 團成、乙若丸、伯母淨田跡、尾張愛智郡同則、武名等元應二年八月三日被下安堵知行畢。源義朝末子也 後義和九年正月 亦四日洲俣川にて被討。
- 一 全成 阿野去歲今若丸とて山成尼也 有勇力、又受智郡 全成而男を隆元といへり 母伊勢守司慶受智郡相傳
- 一 伊勢物 伊勢守 伊勢の國なりける女を、まだはえあはで、となりの國へ、いくとて、いみしう、うらみけれは、女

大よとのまつはつらくもあらなくにうらみてのみもかへるなみかな。

となりのおくには、尾張のくにをいふなり大波は伊勢なり。同物かたりに、むかし男ありけり、京にありわひて、あつまにいきけるに、伊勢尾張のあはひの海頭をゆくに、なみのいとしろくたつをみて、今おまかにいせの桑名より、尾張のなるみまで 後のいと、しくすきゆくかたのこひしきにうらやましくもかへる浪かな

- 一 拾遺物名。おはり米 尾張は米のよき國にこそ侍れ たいはりのものか。
- 一 千載集に敦頼入道因法し、尾張のくに、しる由有て、しはし侍けると云々
- 一 堪忍記に、或人商賣の利潤にまよひて、瀬戸の酒甕をかふて、よろこひ、おとるとて、此つほをふみわりし事有之也。

一 長明発心集に曰、尾張國中志摩の郡に、齋所権之介成清といふ者あり。ゆたかに子あまた有。中に嫡子、狩すなとりを争とす。一とせ、東大寺の大佛供養の年も、二三ばかりにて、父母とまらす、つよく道心おこりしかとも、父母ゆるさねは本國に歸り、がさねて、のほりて、大佛の上人に見へて、しかく、のよしを申せは、頓て急ほうしをと、がしらをおろしてけり。其後高野の新別所に有りて、念佛して居たる所に、父母尋登りて、天野といふ所に呼出し、對面したりける。程たちて後、かねて死期をもしり、正しくおはりにけるとかや。是を念佛奇妙集とて、近き頃のさらしにもかけり。

一 尾張河、九瀬大炊の渡、鶉沼の渡、板橋の渡、氣瀬の渡、大豆津の渡 一本大豆津 渡らぐれり、食の渡、神嶋の渡、墨俣の河

一本洲股、市河前の渡。

一沙石集に尾張國に圓洋房といふ僧、貪なるをなけきて、弟子小法師等をよせて、十二月晦日の夜、桃の枝をわれももち、弟子にも小法しにも持せ、呪を誦、家のうちより、次第に物を追ふやうに打て、今は貧窮殿出ておはせしといひて、門の外へ追出門をかたく開けり。其後、よろづことかけすして過しと云々

一承久乱に、尾筋大炊渡柏屋四郎左衛門堅む。武家方瀬ふみ武田五郎之内武藤新五。氣瀬渡は関左衛門堅。大豆途渡は安藝宗内左衛門堅、武家の先陣足利小太郎兵衛、阿曾沼小次郎近綱。食の渡は、山田左衛門堅。裨島渡、矢野二郎左衛門、長瀬判官代堅之。墨俣河、山田二郎重忠、河内判官秀澄堅。市河前渡、加藤伊勢前司光定堅。

一杭瀬川美濃の境、昔大友の皇子と清見原王、不破の關にて、御合戦の節、御勝利の後、於杭瀬川洗、天疵、此苦を治めたまふ。故に名苦醫瀬川、風土記にかけり。

一敏信、織田敏定男、号石馬介、法名常世、仕斯波武衛。尾州上四郡の守護。信安、敏信男、号伊勢守、法名常永、仕斯波武衛。上四郡守、岩倉城主。

一敏宗、敏定二男、左馬介、仕武衛。尾州奥田城主、定宗敏宗男、母京極常觀女、号飯尾近江守。飯尾の養子と成て、公方に仕へ、相伴の人数に和る。尾州奥田城主、永祿三庚申五月日、映今川義元勢對於尾州鷲津城、法名常空。

信宗、定宗男、援助後飯尾隱岐守、又出羽守、母は細川修理大夫勝元女、住農州蓮寺、江州八幡、長原屋須、中山、草津、領之、信長信雄後仕秀吉、号八幡山侍従。

一敏成、信宗男、援助、天正十五年六月二日、於本能寺討死。

一信治、織田備後守信秀子、号九郎、尾筋野夫城主、江州坂本にて討死。此弟半左衛門秀成、尾筋長島にて討死。

一長益、信治弟、源五郎、入道有樂、尾州大野城を築居。尚長、長益五男、大和守。

一長種、尚長男、修理。

一妙興寺に有之。

一妙興寺雜掌申、尾張國散在田畠事、御寄進狀案、領目録、如斯被管人等并荒尾以下輩押妨云々、大不可然、所詮退彼輩、不日沙汰、付雜掌、若令緩急者、可有殊沙汰之狀、依仰執達如件。

明德二年八月七日

右京大夫在判

土岐伊豫守殿、尾州之守護兼貞欽

一尾州守護土岐大膳大夫頼康内代本頼、執追荒尾民部権少輔、後太平記にもと、宗顯法師、法名證覺子、息同美濃守泰隆

一尾張國惣社修理、断田事廳宣如此、早任被下之旨、彼断田令領知可被致修理沙汰者也、仍執達如件。建武四年二月廿八日

久田弥四郎殿

目代左兵衛尉在判

一尾張國謠

源大夫外百番。あわての森板行。園田板行。草薙板行。長田。内海。野間。黒池龍神。熱田八劍。

義淳比常松織田伊勢守 應永

敏定三郎 明應二年判奥成寺。

敏信常世 尾州上四郡

信安常永 伊勢守上四郡岩倉城

應永常竹 家臣出雲守 織田

達廣長祿 義敏比 敏廣 文明 廣遠 紀伊守清次五郎 延徳

義見比 寛廣下四郡 明應 達勝 大和守 清須城 大永

義繞 判文六年四月七日 寛村 明應五年八月二十三日 是は敏定子と見へたり

達勝 織田大和守 龍井四福寺 永正十五年十月判有藤原と有

寛廣 野田宮藏院。判有

斯波正三位源義重

みなのかみねよりおつる紅葉ともつもりてなみをまたやそむらん。

神社並佛閣

熱田神社。在尾張國年魚市郡 祭ところの神一座、今六座とす。

熱田神天村雲劍也。神代之卷。そさのをの尊蛇に勅して曰汝はこれ可畏の神なり。あへて饗へさらんや。ハハラの酒をもつて、口ことにいれたまふ。その蛇酒をのみてぬかる。みこと劍をぬいて切たまふ。尾を切るときにいたりて、劍のやは少かくる。さいて見るに、劍その尾のうち有。是を草なきの劍と号す。これ今尾張國吾湯市の村に有。即熱田の祝部のつかさとする所の神也。

神名帳頭書に、景行帝の十四男小碓尊、後やまとたけと名づく。この神の垂跡なり。

大宮 日本。東。南。西。北。中央。天照大神なり。

尾張風土記に曰、熱田の社は、昔日本武尊東西を巡歴して、かへります時、尾張の連等の遠く祖宮すいかの命を娶りて、その家にとまります。夜須向廁、身に墮給ふ劍を以て、桑の木にかけて、これを遺し給ふ。殿に入て、すなはち驚て、さらに往てこれをとる。劍光ありて、神の如にして、と

日本紀曰、景行天皇廿八年冬十月、日本尊征東夷、發路之枉、道拜伊勢神宮。仍倭姫命にもうして曰、いま天皇の命をかうふりて、東征まさに諸叛の者を誅せんとす、故辞之。於是倭姫命草薙劍を取、日本武尊に授曰、慎之、眞急也。是嶺やまとたけのみこと、初て至駿河、其処の賊從陽之欺曰、

是野之麋鹿甚おほし、氣如朝霧、足如茂林、臨而應狩、やまとたけの尊信、其言野中入而覓獸。賊皇子をころすの情あり、放火其野を燒。皇子知被欺、則以所佩劍、自抽之、攘皇子之傍草。因是得免、故其劍号曰草薙也。

神社考云、天智天皇七年、新羅の僧道行、靈劍を聞て、欲之、則神祠に入、持誦百日、ひとかに、劍を取て、僧伽梨につゝみ、たつさえて、筑紫にいたつて、東邦におもむく。たちまちに、海風しきりにおこり、波いかり、水簸て、去ことを得ず。道行、劍を取ることを三回皆不得云々。

白鳥社さぬきの國にも有之。日本紀のするところ、やまとたけのみこと、東征より歸にして、而伊勢國能褒野にいたり、薨したまふ。時に年三十。仍て能褒野に葬。その神白鳥に化して、去て指後國而飛。群臣開棺見之、むなし、明衣を留。白鳥倭の琴彈の原に停。仍造陵、そのところを白鳥と曰。更飛、河内國に至、旧市の邑に留。亦造陵、故三陵曰白鳥陵。

或本に、熱田は、人皇十二代、景行天皇第二の皇子、日本武尊命の御兄、成務天皇に、子おはしまさぬによりて、十四代の仲哀天皇は、此尊の御子にて、其後よ、の天子みな此御末なり。尊勅命にて、東征の後、江州千の松原にして、失給ひしに、白鳥と成給ひ、始は紀伊に落留り給ひしか、神慮いか、おはしけん、とひめくらせ給ひて、此所に跡たれ給へり。白鳥にて、飛ひかけらせたまひしとき、は、白旗二なかれと見へしとかや。今はたやといふ所有は、此旗落と、まりし所ならん、普願寺の縁記には、はた綾とかけり。

宝劍二天武御宇、朱鳥元年六月、尾張熱田社に籠らると云々。

一つは、天のは、切の劍。元は十握の劍と云。大蛇を切て後、は、切の劍と号。をろちの尾の名を、はほといふ故也。後大和石上布留社に納。

一は、天のむらくもの劍。大蛇の尾にありし時、つねに村雲のか、りし故なり。

太平記にむかし、さのをのみこと、出雲の國におはしけるに、賊の川上におろち有。尾かしらとも、八つ有り、年々人をむゆへ、今は山神の夫婦てなつち、あしなつち、はかりのこれり。一人の娘を稲田姫といふ。今夜八またのおろちに、のまれん事をうれへ、是を中に置て、かなしむ。尊あはれみ給ひ、我にえさせは、大蛇をうちてとらせんと、たまひ、稲田姫に装束をさせ、かつらにゆづのつま櫛をさし、四方に火を燃て、もたいに酒を入て八方にをく。夜半に、おろち來り、姫をのまんとするに、四方に火をたきまはすゆへ、よるへきやうなく、時うつれば、姫のかたち、甕の酒にうつるを見て、八つの甕の中に、かしらをひて、酒をのみけり。のみゑひて、前後知らず、しけるを尊劍を、抜て大蛇をすた、に切給ふ。尾にいたつて、つるきのか、るところあり。さきのけて見給ふに、中に一の劍有。これ最上の劍なりとて、天照太神に奉る。あまのむら雲の劍となつく。十二代景行天皇四十年の夏、東夷をむく。帝の二の皇子、日本武尊、ほろほさんために、同年の冬十月に道に出て、先太神宮に参り給ふ。崇神の御宇に、かへしをかる、天の村くもの劍を出し給ふ。尊是を帶し、東國にくたり給ふ処に出雲にて、さのをの尊に害せられし、八またのおろち天くたり、今やまとたけの尊、そのかみうははれし劍を帶し、東國におもむき給ふを、せきとめて、うはひかへさんとする毒蛇となり、不破の関の大路を伏ふさきたり。日本武

の尊事ともせず、おとり越へてそとおかれける。尾張の國にくたりて松子の嶋といふ所に、源太夫といふもの、家にとまり給へり。大夫に娘有、岩戸姫といふ。尊これをめして幸し給ふ。かくてあるへきならねは、東國におもむき、駿河の國富士のすそ野に至り給ふ。その國の凶徒この野に鹿有、狩しあそび給へと、はかり出して、凶徒野に火をつけ、尊を焼ころさんとす。其時帯たまへる村雲の劔をぬき、草をなき給ふに、其刈たる草に、火をつけて、又おひやかむたりけるに、尊は火石水石とて、二つの石をもち給へるか、まつ水石をなけかけたりければ、則石より水出て消まけり。又火石をなけたまへば、石中より火出て、凶徒多くやけ死けり。その野を天のやけろめ野といふ。劔をば草なきの劔とぞ号。かくて二石をふしのすそ野より、尾張の松子嶋へこそ、なけられけれ。彼所の紀大夫といふもの、つくれる田の北の耳に、火石は落、南の耳に水石はおつ。二石と、まる夜、紀大夫のつくれる田、一夜の内に杜となりて、多木生茂り、火石の落たる北の方はいかなる洪水にも水出ることなく、水石の落たる南の方には、なにたる旱魃にも、水たゆる事なし、今、石水石社也。

尊これより興へ入、國々の凶徒を平らけ、所々の悪神をしつめ、同五十三年尾張へかへり、又いは戸姫に幸し給ふ。かくてのち都へのほり給ふとて、草薙の劔をば桑の枝にかけてのほり給ふに、八岐のおうち伊吹大明神は、又あらはれて大路をふさけり。尊猶もこと、もせず、はしりこへ給ふに、足のさき、ちと、おろちに、さはりけるか、ほとほり上て、五躰しのひかたし。なやみなから、近江までこへ給ふ。千の松原といふ所に、なやみふし給ふ。松子嶋の姫、尋のほり給へば、あ

はつまよとよろこひたまふゆへ、東國をば吾妻とぞ名つけたる。かくて、みことつゝ、ぬにうせ給ひ、白鳥と成て南へ飛給へば、姫は尾張へなく、帰り給ひにけり。白鳥紀伊の國名草の郡に、しはしと、まりけるか、又東國に飛かへり、尾張の國松子嶋にせ、飛行ける。白鳥にて飛たまひしとき、長さ一丈の幅二なかれと見へし也。落ける所を、白鳥塚と名付たり、今の白鳥山、俗シヨトリと云。 幡の、おちたる所を、幡屋といひて、今に有、草薙の劔をば桑の枝に懸置給ひしを、岩戸姫これをと、紀大夫か田一夜に森に成し社の杉によせかけて、おかれけるか、夜なく、劔より光立、かの光杉にもえ付けて焼たをれにけり。田に杉のやけたをれければ、田もあつかりけるといふ心に、熱田とは名付たり。尊白鳥にて飛落たまひて神とされる、今熱田大明神是也。岩戸姫も神とあらはれ、源大夫も神となり、紀大夫も神とそいはれける。八劔宮といふこと、かの草薙の劔をば、熱田に宮殿を作りて置れけるか、夜なく、劔に光立。新羅の沙門道行といふ高僧、知法行徳の人にて、日本に立、つるきの光を見て、帝にかたりければ、かの劔を取、われにあたへよと、仰有けり。されは、とらんとて、日本に渡り、尾張の熱田に詣、七日おこなふて、ぬすみとり、五條のけさに包て、けるほとに、劔袈裟をつき破りて、本の宝殿にかへる。二七日おこなふて、七條のけさに、つゝ、みにけしに、劔又七糸をもつきぬけて、宝殿にかへり入。道行立かへり、三七日行て、此度は、九糸に包て出ける。あいた袈裟をも、やふらす、つくしのはかた、近にけかへるを、熱田明神、やすからす、おほしめし、住吉大明神を、うつ手に下し、道行をけころして、草薙の劔をうはひとる。帝、生不動と云將軍に、七の劔をもたせて、日本へせ渡しける。生不動、すでに尾張の國までせめ来る。熱田

の神宮、にくきやつかなとて、竊殺し給ひけり。所持の七の劔を百取て、草薙はくはへて、宝殿にいはれたり。八劔大明神是也。

一説に、源大夫の神は、稻田の宿禰といひしと云々。

一説、八劔^{ヤツ}本地俱梨伽羅不動明王の変作となん。亦素盞鳥の尊、稻田姫のかしらにゆすのつま櫛をさし、八雲立出雲八重垣つまこめに八重垣つくるその八重垣をとよみたまふ。三十一字と定まりしは、是より始也云々。

又稻田姫は相殿とて麗の御前と申す。

天照太神、御皇孫の尊を此日の本にくたして、国の主となしたまふとき、かの宝劔を添て下し給ふ、かくて人王の世と成垂仁天皇の御宇、やまと姫の尊、天照太神の御霊をいた、き、かの劔を持伊勢渡會郡五十鈴川の上に崇まつり給ふ。景行の御時、東しつかならず。日本武御心たけふ力すくれければ、大將にてつかはし給ふ。尊内宮に参て、村雲の劔を申請て、尾張道下り給ひ、稲種の宿禰水家に、とまり、その娘に宮簀姫と申に、契り凸つれて下り給ふ。夷治りて後、尊は舟に乘めくり行ふに、上野の浦にて波あしく、つみに尊舟よりあかり、夫より上野の國碓氷の峠にのほり給ふ。東の方に向、みやす姫を戀て、吾妻ノとなき給ひしより、東をおしなへて、あつまとは申なり。みことうせ給ひ、白鳥と成て、先河内の國にと、まり給ふ故河内の國白鳥の明神あらはれ、いは、れ給ふ。紀伊又尾張に行きたり給ふ。海道の際に源大夫宮有。是は宮簀姫の父稻種のすく祢を祝たるなり。今の俗、文珠堂といふ、本地文珠なればなり。

一むかし、唐に玄宗皇帝と申帝、四百余州をおさめ、日本をもとりんと、くはたてたまふ處に、明神揚貴妃となりて、帝の心をとつかし、世をみたして、日本を打給ふばかりことをやめさせ給ひぬ。其後揚貴妃馬鹿か原にて殺され給ひしを、方士^{通幽}楊道幽といふ仙人をつかはして、貴妃の鬼いつくに有と、尋られしに、蓬萊山におはすなりとて、尋來りしも、此熱田の社也。此故に此處をよもきか嶋ともいへり。蓬萊山とて、葉山のかたち有なり、龜に似たり。高からずして、上には、松むら／＼と生ける。龜のかしらは、南にむきてた、大なる塚のことし。

一太政大臣師長は保元に父悪左府の縁坐によりて、土佐國へ流され、はたといふ處にて、九かへりの春秋を過し、長寛二年甲申八月に、歸洛本位にふくし、次の年正二位、仁安元丙戌十月、前中納言より、権大納言にあかり、昇進と、こほらす、太政大臣道極の管絃の道にも達せし人なりしか、治承三乙亥年の頃、清盛のために、東國尾張の國へ流さる。鳴海瀉塩路遙に遠見して、常は浦風にうそふき、比巴を彈し、和歌を詠、白日をおくれり。或時當國第三の宮熱田明神に参詣あり。其後法衆のため比巴を彈、朗詠し給ふところ、もとより無智のさかひなれば、情をしれる物なし。邑老村女、漢人野叟等、かうへをたれ耳をそはたつといへとも、さらに清濁を分て、呂律をしる事なし。されとも胡巴琴を彈しかは、魚鱗跳ほとはしり、くこう歌を登せしかは、梁塵うこさうこく、物の妙をきはむる時に、自然にかんを催すことほりなれば、諸人身の毛よたつて、満坐奇異の思ひをなす。漸と深更に及て、諸查調の内には、花芬馥の氣を含み、流泉の曲の間には、月明の光を滴、願くは今生世俗文字のこう狂言き、よの誤をもつてといふ、朗詠をして、秘曲をひき給ひ。

しかは神明感應に絶すして、宝殿大に震動す。平家の悪行なかりせは、今此瑞相を、いかに拜へきと、大臣感涙なかせられしも、此宮にての事となり。

○新千載冬○覺束ないかに成海の果ならん行へもしらぬ旅の悲しき

新大納言師長

又明神白き狸にのり、あらはれ給ひしといふ説あり、或書に妙音院入道仁平御賀に、比巴を彈、孝博き、て中將殿、やう／＼ひわに成にたれと云々。われは鬼神をもひきへしつへくおもふに、孝博申狀頗無念のよし、おもはれけるに、尾張に左遷の後、孝博が詞を思百と云々。

一山王廿一社傳記曰、山王中、七社の内、第五早尾之神躰(曰吉社神道秘笈之記云)尾州熱田宮之内、源太夫之神是也

矣。垂跡は桓武延暦七年、中堂建立之時、毎日御影向、大師見送りに人を添給ところに、此林に入給。故に社壇を建、本地不動、元一間の方丈也。建暦二年改造、立檜皮三間在、昔板の拜殿。小社は私宮。山長。若宮。吉備津。夷三郎殿三郎は神功皇后の御子。或は又武内大臣男。

一古今序に

女とすみ給はむとて、いつもの國に、宮つくりし給ふ時に、其所に八色の雲の立を見て、よみ給へる也。八雲立の歌の古まなり。

是は、素盞鳥の尊の注なり、すさのをの尊をのとかける、日本紀に、すさのをを、兄といふこと見へされと、曰神は御姉にて、おはします女躰なれ共、系圖には末につるならむと云説あるに也。女と住給はんとては、稻田姫と住給はんととなり。出雲の國みやつくりし給ふ時に、其所より八色雲のたつを、尊はいけにへの、おろちをしをかへて、其大蛇をやきたる煙の立を、八色の

雲といふ。出雲の國とは八色の雲の立たりしによつての名也。尊大蛇をしたかへんとて、ひめを湯津のつま櫛にとりなして、尊のかしらにさす。つまくしのすかた、つめに似たり。是は、海松のねにてつくる鬢極なり。大蛇出て、舟にかしらをさし入て、酒をのみ酔ふてふせる。八つのつまくしは八の籠となりて、大蛇をくらふ。尊十つかの劍にて、蛇をつたく／＼にきり給ふに、尾より雲立つ。尾をやふりて、見て得給ふ劍を帶する時、其尾に、常に雲氣あるゆゑに、あまの村雲の劍といふ。尊とりて後に、白神に中をなをりて、此劍を奉り給ふ。曰神これ、むかし失へる劍也との給ふ。其後人皇十二代景行の御時、東夷を征せしむ。皇子すしかの國うきしまが原にいたる。夷原の草に火をはなちてふせく、皇子こしの劍をぬきて一輝し給へは、四方一里の草かりなかれて、其火自滅す。是より名を改て草薙の劍といふ。其後みこと化して白鳥となりて飛去る。劍は尾州熱田神祠に納ると也。草薙劍は、日本武の尊の時の名なるを、日本紀に、すさのをの、大蛇の尾よりえたる劍を草薙の劍といふ。かやうのちがひめおほし。

私に曰、今も駿河國海道より近き所、草薙の宮とてあり。大なる櫛有とぞ。

されは、すさのおの、十つかの劍を、代々の宝劍なり。平家入水の時とも、西海に沈云々。

一曰神は、すさのおの御姉にて、おはします。女体なれば、系圖には末につるならひありと云々。かの大蛇の上より、雲氣たえず、八色の雲也。青黄赤白黒紅紫緑也。此八色密敬等にいたる迄も相應すると有。時に紅紫緑三色を緋すへし、又八色の雲は八尋と云説、定家卿も不用。

ふるくは、七色八色千重百重など、數のことくにあらすた、ほめたる詞に用。八重垣は、宮作りして、垣をしたる也。八重垣にあらす。是も八色の雲のことし。つまこめは、姫と此宮に住給ふ也。すさのを出雲に配せらる、時に、尊海上に、うきてなかる、嶋あり。是は大地につかぬ嶋なれば、日神の國にあらす。我すみかとせんとて、手にてなて給ふ。なてられて此島と、まる。されは手摩嶋タマシマといふ、尊此島に、姫と宮つくりして住給ふ。時に三十一字の歌を始めてよみ給ふ也八重垣の歌也。

秘書注此尊、日神の弟といふ事、常の説也。又神を兄ヨカミといふは、男を賞して、系図にも書故か。惣て素盞烏尊は兄なりと云々。

女と住給はんとて、稻田姫を契りて置給はんとての宮つくり也。やいろの雲、八織五形のと、のふること、人身の成就なり。此雲の立初めたるより、出雲の國と云也。亦前にも立たる端雲ハタの、又此神の明も立たる歟と云々。

八重たつ天ハチいつもやへかき地つまこめよ、八重垣つくる陰、其八重垣を、陽上の八重垣二をすみて、下の八重垣一を、にこる也。

天は、すみ、地は、にこる也。秘事なり。

一 熱田大明神、かまくら霧、八幡に觀請けり。

頼朝は、たあゆに生れ給ふ故なるへき哉。

一方角抄に熱田宮南向也。鳥井三方にあり北にはなし。

南より西へ海あり、あつたの淵といふ也。やまとたけの尊の劍を此宮に納致。八劍の宮あり、草薙の劍と云也。此所を、蓬か嶋とも申也。依て蓬萊山とて社頭より西鳥井の外につき山有、形は龜に似たり高からずして、上には松むら／＼と有て、た、大なる塚のことし。東の方に岩戸を立たり、社頭より南に熱田の宿有。北より入て宿の南へ出しは、鳴海瀉也。私に曰く今の葉出なすへし。萱津より熱田道四里也。鳥井三方にありて、北の方、今、城下への鳥井など、いひあへり。いかにや。所は尾頭といふ邑に近し。鳥居今は巧て倒てあり。

一 日本事跡考曰、尾張國熱田社、景行天皇の子日本武尊、自東征歸、此に至、靈劍留、故に崇之。旧説に曰、秦の徐福、爰に來りて、藥を求故に世に熱田を号曰蓬萊。

一 東鑑廿七日熱田社に奉幣、依爲外戚祖神、ことに崇敬、賴朝上洛之時、建久四年、即、牧府の年なり。

十二月一日、頼朝、惟義をもつて、尾張熱田社に、献神馬、黒栗毛。

一 又別録を、被遺、大宮司範経、是殊可有御祈禱事也。十日乙卯、鶴ヶ岡の末社熱田社祭也。やふさめ十騎、競馬三番、相撲十番也。

一幕下甥、僧任憲、あつたの社、領内御幣田を相傳する處に、勝実と号する僧のため、に、さまたけらる。勝実、奏聞をふる間、任憲、解状をつとめ、又奏す故、祐範任憲父之功、亡骨の在所也。祐範と申侍は、頼朝か母堂の舍弟とて候き、母堂逝去のとき、七々の佛事は、祐範さたし候て、澄憲法印、導師として、勸修し候き。又平治乱の後、義朝配死せし時、も祐範人を付送候云々。

一方角抄に、社頭より西鳥井の外につき山有、形似龜云々。

今の白鳥山にや。又奴卑のたんふ山といふ。岡山にや。これはその高陵のならひに墳所あり奈比山といふ。それをあやまりて、此山をもたんふ山といふなるへし。

或人曰、此山を根山と云。若のあと、見へて、廻りに堀のかたち、近頃道水高り、まこも生しけり。今は埋れて畑となり、其高さ五六間ばかりして、松樹繁く、鶉のねくらとなり、糞は根ざ、につもりて、夏の日の霜をみす。かの側に一つの岡あり、熱田の人死して、茶毘所なれば、これをたひ山といひしを、あやまつて、根山をも、たんが山と云。入口に地藏堂有之。

熱田より北にあたれば、此根山の并なる岡山を、北山といふ。タヒ山也。向南寺といへるは、昔寺有けるにこそ。一説根山は、城なりとも、又日本武尊の陵なりとも申す。

壩州堺の近辺に、大陵有千じやう山と云。帝日本の夫を召て築ふと、中に谷あり。是は尾張の夫不來故かくのことしとなん。今にそれ尾張谷とせいふ共。

一方士、唐よりたつね来りて、玉妃太真殿とありし額を見て、貴妃のありか、蓬萊山にこそとて、参りけりとなん。

一八劔宮は、生不動か、七ツの劔に、草薙劔を合、宝殿に、こめらる、所なり八劔大明神也。一天王。素盞鳥の尊也。出雲にて、稲田姫に、かたらひ、大蛇を平らけ、天の村雲の劔を得給ふ。明神の皇劔なりし故に、此所に勧請しけるにこそ。祭六月五日也。

日割日わりともいへりともしもひさき。延宝九酉七月廿日、暴風に、古社顛倒。人王十一代、垂仁天皇の御宇に、日輪

九つ出る。神の告によつて、南につらなる八つの日は、鳥なりけるを、弓の名人八人に仰て、みさせ給ふ。垂仁十八年二月十日辰の刻、床にのほり、武藏野にして射落す。日向に落るにより、その國を日向とかけり。さて其鳥を二月晦日に、帝へ奉る所に、いつれも、二寸四分の玉、一ツつ、そなはり給。中に一寸六分の佛まします。其一つは、尾張の國熱田に、こめ給ふと云々。下畧。私るか後に籠るなるへし。

十二代景行の御子、日本武成は、十一代の垂仁の御時納る事不審也。これらや、日割にかなひ侍らんかと、愚意を以て、こゝに書のする事にて侍る也。

一源大夫。文珠堂と云。日本武東へ下り給ふ頃、此所源大夫の家に泊り給ふ。太夫に姫あり、岩戸姫となつく。尊此姫をめして、幸し給ふ。其後尊うせ給ひて、姫も神とあらはれ、源大夫も神となれりとぞ。

源太夫は、本地文珠の変作なる故、文珠堂となつく云々。一説に、源大夫を、たけい稲種宿禰と申、岩戸姫を、宮簀姫といへり。又一説手なつちを祝ふと云々。

社の西の脇に、小社二つ有り。一つは、惠比須の宮、一つは大黒をいふと申大黒は少不審也。

一紀太夫。幡陵より、西の門へ、行道、誓願寺向方の社を云也。足なつちは、紀太夫也云々。奴卑の説に、北太夫と申て、女神北の方なりと云り。

一白鳥山。幡屋の西、そのあたり、なへて、白鳥といへり。尊白鳥となりて、飛ひ給ひしか、落と、ま

楊貴妃馬嵬か原にて弑せらる給ひし時も、魄白鳥とあらはれ、飛給ひしと云々。
白鳥山宝持寺。大宮司代々菩提所墳墓の地と云々。

寛永十年頃、当寺住慶香和尚の母、犬と生せし事有。此犬寛永十五年に死、火葬して、甲は水しと也。

一 誓願寺の際に、芝生あり。こゝをまんところと云。政所には非ず、祭所なるへし。祭を揃なり。

一 青衾神社、神名帳にも有。今本遠寺といへる日蓮宗の寺の入口、右の方に有。

一 乙塚神社。とつかといへり。熱田の末社と云々。

一 火石。一水石。社の左りの後のひくみに、冷水あり、是といふとも申、其側には天とあり。

一 高座結御子 たかくらむすびみ子又高倉の社と今の俗云り。

此御神は、仲哀天皇と申奉る説有。仲哀は人皇十四代の帝也、御諱を足仲彦と号奉る。日本武尊第二の皇子にて、渡らせ給ふ。去によつて、此處に勸請せる成へし、板十二代の成務天皇に、皇子おはせさりけるによつて、仲哀を太子とし給ひ、天下を治たまふ事九年にして、崩御あつて、河内國長野の陵に葬奉りぬ。越前の氣比の明神も是也と云々。

神明帳に、高坐結御子と侍り、宮もりに尋し、処に女神にて在と申き。日本武の御母なにてや、おはしけん 但母希共俗に申奉る如何。 元、吉祥天女を祝奉りし宮と申。奴賤のいひ、信しかたき致。

一 慶長頃、加藤主計頭清正、熱田大明神に参詣あり。大宮司並神主等と呼ひ出し、當國我生國たれは、大破の所あらは、造営あり度との事により、西の門修理有へきよし、申に依て、馬場左京といふ神主に、白銀廿貫渡し置、下願あり。左京奉行して、ほとなく、造営の功畢ぬ。今に、肥後建立の門

と申す。是鎮皇門也 門口玉城に向ふと一説なり。

一 東之門を春向門と号。春敵門と云説。

一 南之門を海上門といへり。額は弘法大師の筆也

今懸て有額は、ふりて、かたちも、さたかならず、これは額の台に、文字有。額へ神納なりと申す。一説に、元は、海蔵門といひしを、そのかみ、此門の際まで、あうき痕かけけるに、是を、しのきかゝて、藏といふ字に、かくるのよみ也。此故なるへしと、大師上の字を書改給ひけるとぞ。門を入て、勅使殿とて有也 右に天神、左に梅を、見入なり。

一 北に門なし。鳥井も北にはなしと、方角抄に在。されは、一の鳥井とて、尾頭といふあたりにたり。元、往還の通路なりしか、今は道かはりて、行客余所に見てすく。今、沢の観音堂見ゆる。

右の方松一むらのうちに、礎のこりり云々 一説此鳥居、宮の鳥居と申不審。

一 御所といふこと、往古より大宮司の屋敷あるゆへ、所の者御所といひならし來りて、今如斯致云々。此あたりに、なみたの池とて有し。今はうつもれはて、かたはかりなりと云々。

一 沓石。くつ石とて、二南の門の前、御供所のあたりに在と云々。

一 熱田社頭の左に井あり。今は、浅く埋れ、水なし。奴賤のいひけるは、弘法加持して掘給ひしと申す。

一 社の後石塔一ツ有。奴賤に尋しかば、楊貴妃の石塔と申、甚不審。

一 経なとこむる堂あり、世俗、後生車といふもの、かけてある也。

眞鍮にて張るか、その銘に、元和七年三月名古屋吳服町二丁目山田孫兵衛寄進のよし有也。
又子安の神木とてあり。

一 楠明神 有之、あつたの末社にはあらしと、所の奴殿の申き、しかれども、録を
楠にかけしとあるは、思ひ合て、このする也。
一大真殿。長明海道記は、大真院と有蓬萊宮の額と云々。

よもきかしまといふは、南の門を入、右に天神社あり。ならすの梅とて、有之なり。此あたり
を逢か島といふとぞ、蓬を見出せば幸ありとて、奴童参ことにたつぬるところなり。

熱田の神事は、さすか末世といへとも、ひなひなから、そのかた計残れるも殊勝なり。社頭の灯
常にかすかに神さひ渡りたる、松のおほ木とも、しけりあひ、宜祢か笛の音も、ものすごく、かしは
手た、く音、亦物さひしくとせ。

祭礼 作事 数々也。あらましをのせて、多くは、此を略す。

正月十一日翁の舞有。又田植祭と云。神宮寺にても、お八幡有之。是は踏歌をまねふと、所の
者申き。其外宜祢等、神歌をうたひ拍子を打、亦神前にて、翁宮福太夫舞之なり。

十五日、三番の的有。午の刻斗り、海上門の外御供殿の前のあたりに、大宮司 秋座を しめて、後
たいき下総馬場左京も出つ。神人出で、的の際にて、何やらん行て、桑の弓、桃の矢と号し、天地人
の三災を掃とて、上中下に放て、さて下総左京面人出で、一手つ、矢を放つ。是等は、毎年かくの
ことし。祝部中老は年々替るなり。次に祝部二人出で、一手つ、是を射。其次に、中老二人出
て、右のことくの的を射る。 試法、此の射は、あまし手前なり、 的のさしわたし、五六尺はかり、ひの木の小

板を組て、表に紙をはり、目あてに、墨をもつて、ぬるなり。二番に、又右の通り、下総左京祝部中老
射し、三番に、又かくのことくに、終るといなや、四方より夫民等、的をうはふ。はては、つふてを
なげつけ、及鬪諍。夫より城下方熱田方とたてわかり、二十五丁橋を、御所の方に越て、印地をき
り、をして、つぶてを打合也。

二月。

己午の日、御供所の前の刃に御膳を備て、さて、御供をは、鳥を呼て、くはするに、群集の人をも不恐、
来て二羽、此をくふ事毎年なり、依て俗、からす祭りと云なり。初午、阿波手杖正法寺の藪香の
物、其品三十二さ、けて、神供とすると云々。
又十一月も十二さ、けて備之云々。

三月。

四月。

八日花の頃、頭人として、年々神役を勤め、神主のうちより、次第、つとむ、頭といふは、此心致。
拜殿に、いろ／＼の造り物、造り花等を飾。

五日五日。

馬の頭とて、馬をかさりて、はしらす。前後頭人として、兩人これをつとむるに、七社をめぐるに到
極晩也。其前、面の門に神輿入たまふ。神人等多宝物の道具を持て、奉供。けふの神事競馬の
まねひにや。 面の門に神輿を入しめ給ふ、神人等多宝物の刀を持て供奉す。

六月五日。

天王祭御前。一説、日割社祭とも云。

七月七日。

御宝物出て虫干あり。又は利屋におほせて、ぬくはしむ、利屋大紋のひた、此にて、さふらい、忍ほしを着勤之。

同八日。

八劔宮の宝物も出る也、御宝物に別に書載之。

八月八日。

神輿西門より出給、座主出て供奉。

九月。

十月。

十一月。

初の寅卯の日言霜月西度からす祭と致俗申す是なり

御膳を備へ奉る也。からす祭といふ事、其日南の門の外に神を立、神々にも御膳を備ふ。供物を鳥来りて喰ふなり。

寒の中。輿参りとて、貴殿参る也。大年の夜、年籠りとて、多く社頭に、夜を明すとかや。
一勅使殿御供所阿弥陀堂の前也。二十五丁橋石のそりはしなり。神馬南の門の外に有。

一神宮寺は、本尊薬師并十二神持堂の内、西の方にあり、宮殿は大福殿と申。相馬小二郎將門之靈なりといへり。八月八日祭礼おこなはる。此日明神の神輿をうつし奉る。堂のうしろ、并文天堂の前、阿弥陀堂塔も、前に侍りしか、今はあはれて、霧は香をたき、月は灯をか、く。あはれなるさま、神先知る也。いづれも、秀頼の母堂淀殿再興にて、塔は愛染明王なり。慶長年中の再興云々。

抑將門は桓武六代の末陸奥鎮守前の將軍從五位下平の朝臣良將が次男なり。將門は依藤太秀郷が爲にうたる。首飛んで、武藏に落ぬ。是を祝て、神田明神と崇む。こゝに祀ふも、そのころのなりと云々。

一誓願寺。妙香山と号。前に十王堂あり。

本願曰秀尼善光上人は、吾湯市郡、今愛智郡、小林村、山田藤藏女也。藤藏は織田備後守信秀に仕へて、小林に住す。子孫後泉州岸和田在云々。日秀若かりし時、吉野右馬允某が妻となしり。然るに吉野越前にて討死す。干時妻十八歳愛執の別におししつみ翌年十九にして、信濃の国善光寺にて剃髪す。名を則善光上人と号す。或時熱田の神夢に告て、のたまはく。神宮の西、はたあやのほとりに、頼朝誕生の地あり、勝地をしめて、御堂をたて、同郡山崎の郷、熊野の神社に、神木の楠有をもつて、無量壽佛の像をきさみ、かの堂に、安置すへきよし。あらたなる折ふし、彼楠より光をはなつ。信秀へ達して、享祿二己丑、上人佛師を京よりまねきて、弥陀の尊像を作堂を建立して、安置す。頼朝誕生の所にほこらたて、当寺の鎮守にあふき、元龜元年五月五日

上人に任しらる。綸旨有之によつて其後代々上人に任す。天正九年巳年佛の告有て信長長谷川藤五郎を奉行として江州油火大明神のつきかねを当寺に寄附あり。其銘さたかに殘れり。天正十九年辛卯年秀吉母公熱田に参宮有て此寺に詣。寺の境内せはきよしを秀次へのたまふによつて教十間の地をよせらる。則寄附狀に今有。其年号天正卯月廿九日判形有。其後慶長五庚子二月廿四日寺中失火して其宝忍にほろひけり。竊に本尊はまめかれ給ふを淺井備前守長政息女秀頼御母と云。御堂再興ありけ此は鐘樓は前田利家の室建らルけり。佐々木京極女は松の丸と号す不審。堂の額に、当時建立淺井備前守息女内大臣秀頼公御母儀の爲二世安樂也。如斯なり。かくて日秀は慶長六年五月十日に遷化有けり。兼て其期をしり給ひきと云々。往生の砌り紫雲たなひき、さらに糸竹の声ありとかや。慶長年中八月十五日、伊奈備前守瑛地のとき先水野三右衛門尉水野貞守末同大和守類葉屋敷地山崎におゐて古寺の地ともに、東照宮御寄附也。同年左中將忠吉御薩摩守從三位東南の築地御建立。其頃にや、一家水野平右衛門を被召出是時紀州平右工門とは別也菅原寺の額は尊朝の御筆也。元和九年九月十八日、中野といふ所に百石地寺領として、義直御より御寄附被遊、御判形を下さる。此寺の上人二代目より代々水野より持也委細縁起にあり。

初。日秀。善光上人。慶長六年五月十日遷化。
二。照山。慶光上人。元和二年巳十月十日遷化。水野三右工門尉光尚文。

三。慶薰。修光上人。元和二年辰六月一日遷化。
水野弥石衛門尉光成女。

四。照日。善光上人。同 弥左衛門光重女。

五。照岸。善光上人。同 久左衛門光兼女。
水野一流。同 弥五左衛門光繼女。

水野藏人貞守流。大和守類葉也。

光尚 水野三右工門尉、照山父、住山崎、今二屋跡有 光成 弥右工門 光重 弥左工門 光兼 久左工門 光繼 弥五左工門

長明紀行 (群書類從に長明海道記の作者を源光行とす)

一 八日萱津を立て、なるみの浦に來りぬ。熱田の宮の御前を過ルは、示現利生の垂跡にひさまつきて、一心再拜の謹啓に、かしらをかたふく。しはらく、とりみにむかひて、阿字門を觀すルは、推現のみきり、ひそかに、寂光の色に口夫土木霜降て、屋上松風天に吹といへとも、靈驗日あらたにして、人中の心花、春のごとくにひらけしかのみならず、林の梢枝をたる、幡蓋社頭のうへにおほひ、金玉の檐端をうつ金色を神殿のおもてにみかく。かの和光同座は、采際をかざる期なきことをあはれむ。羊質未參の後悔に、向前のうらみあり。後參の未來に、向方のたのしみなし。



ねがはくは、今日の拜参をもちて、かならず、当來の良縁とせん。路次の便請なりといふことな
か此。この機感あひかなふ時なり。光をましふるは冥をみちひくちかひなり。明神さため
て、其名に應し給はば、長夜の明曉は、神にたのみ有物をや。

光とづるよるのあまの戸はやあけよあさひこひしきよもの空みん

此うらを、はるかに過れば朝には入海にて、魚にあらすばをよくへからす、昼は塩干瀉なれば馬
をはやめて行。西天は溟海漫々として、雲水蒼々たり。中上には、一葉の舟がすかにとんで、白
日の空にのほる。かの倭男の船中にてなどや老にけん。蓬來の嶋は見すとも、不死のくすり
は、とらうずとも、浪のうへの遊興は、一生の觀會なり。是延年の術にあらすや。

老せじとこ、ろをつねにやる人ぞ名をきくしまのくすりをもうれ

源光行紀行。（群書類從、東國紀行、前河内守親行トアリ）

尾張國熱田の宮にいたりぬ。神垣の辺り近ければ、やかて参ておのみ奉るに、木立としふりた
る森の木の間より、夕日かけたえくさし入て、あけの玉垣宮をかへたるに、木綿四手風に乱れ
たることから、ものにふれて、神さひたるなかに、もねぐらあらさぶ鷺むらの、かすもしらず、水未
に、きぬるさま、雪のつもれるやうに、みえて、とをく白きものから、くれゆくま、に、しづまりゆく
声々も、心すづくきこゆ。ある人のいはく、此宮はささのをの尊なり。初は出雲の國に、宮つく
りありけり。八雲たつといへる、大和ことはも、これよりそ、はしまれる。其後景行天皇の御代
に、このみきりに、跡をたれ給りといへり。又云、此宮の本体は草薙と申奉る神劍なり。景行の

御子、やまとたけのみことと申、おみすをたひらけて、歸給ふとき、熱田にと、まり給ふとも云。
正衡當國の守にて下り、大般若をかきて、此宮にて、供養の願文に、吾ねがひすてに、みちぬ、任限又
みちたり、古郷へかへらんとする期、またいくはくならずと、かきしを心ほそくて、

おもひ出もなくて、や人のかへらまし法のかたみをたむけ置すは

一いさよひのいき。阿佛紀行（安喜門院四條宮家再室。為相母也）

二十日尾張國おりとといふ、むまやを行、よきぬ道なれば、熱田の宮へ参りて、視とり出し書付て
奉る。歌いつ、本しゆ見へす、追而尋可考、

いのるそよ我おもふことなるみかたさし引しほの神のまにイモ

なるみかたわかのうら風へたてすはおなしこ、ろに神もうくらん

みつしほのさしてぞきつるなるみかた神やあはれと見るめたつねこ

雨風もかみのこ、ろにまかすらんわがゆくさきのさはりあらすな

しほひのほとなれば、さはりなく干瀉を行。折しも浜千鳥いとおほく、さきたちてゆくも

しるべかほなる心地して

濱千鳥なきてそさそふ世の中にあととめむとは思はさりしを

一玉葉集に

さくら花ちりなんのちのかたみにはまつにか、れる藤をたのまん

これは熱田大明神の御歌となん。

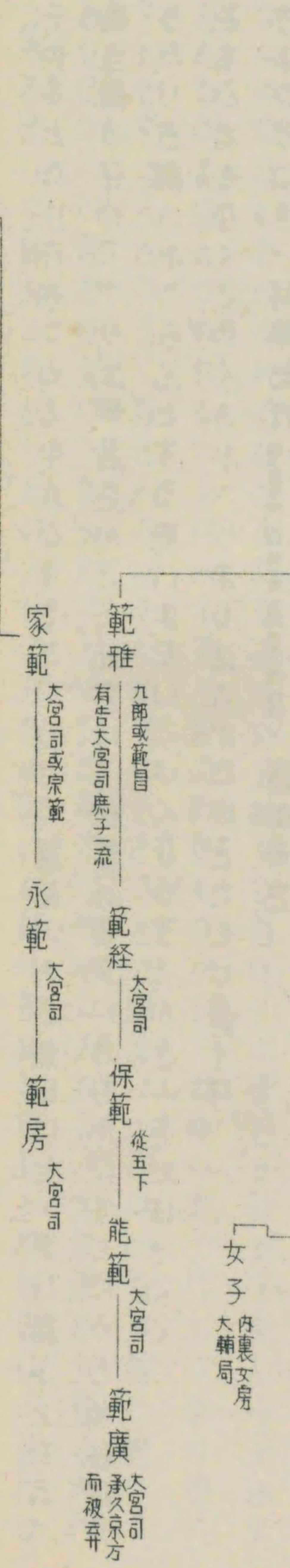
むかし彼社の宮司尾張氏、代々なりきたれけるに、尾張貞織か女の名を、松と申しけるか、藤原の季兼にしたしくなりて、季範をうめりける後、明神かく託宣させ給ひけるによりて、彼季範はしめて、大宮司になりて、其末今にたへすとなん。女の父熱田神主眞基。

新拾遺に
あれはつる我宿とはぬうらみをはかくれてこそは人にしられめ
是は熱田社あれて待ける頃詭宣の御歌となん。

不比等 — 武智磨 — 巨勢磨 — 眞副 — 高仁 — 保蔭 — 道明

尹文 — 永頼 — 能通 — 實範 — 李兼

李範 — 母熱田神主眞基女、依有重盛、慶子、大宮司相統始也、從四下、女子石大姉、賴朝母。



一 季兼 住三川田、四郎大夫
一 太平記。 千秋三河左衛門大夫惟範。
一 太平記。 任廣 紋三柏の兼と有。
一 同。 千秋駿河左衛門大夫。大系四星野範信二男千秋駿河守信綱とあり。
一 頓阿草菴集に九月十三夜東下野入道素英熱田大宮司入道常端来て歌詭侍しに、月前旅。
頓阿法師
草まくらむすへはつゆにやとるなりやま路をおくるよ半の月かけ

此常端証文大塚性海寺に在。

李光 千秋紀伊守
稱葉山合戦討死

李忠 千秋紀伊守
於捕獲關討死

向義元陣。

待李 刑部駿河守
永享帝保

勝李 スルカ
宗守

政李 スルカ
祥運

李國 大宮司
加賀守

李通 紀伊守

李平 千秋加賀守

李光 四郎紀伊守
美濃稱葉山討死
淨安天文三年九月五日

李忠 紀伊守
尾張分分マに討死善確

李信 紀伊守
紀七郎善英

李盛 母水野四郎右門
紀伊守善祐

李行 母關本下野守
紀伊守

李明 母寺尾越前守
直政女

本子 母關宮
大隅女

一 李範 寺志橋

一 李範 寺志橋

任憲 山志橋
東登三有

行憲 山
仕快

一 範忠 大宮司
改出心願

清李 大宮司
改出心願

朝李 大宮司

朝氏 大宮司
野田三郎

清氏 大宮司
野田三郎
1本

行成 大宮司
野田常陸守

朝重 大宮司
野田八郎

範重 大宮司
常陸守

天正口年五月、三州長篠合戦之砌、織田信長同信忠和勢として、同十三日、岐阜を打立て、其日當國あつたに、着給小。翌朝神前に詣て、礼拜の至誠、神に通して、擁護の眸をやめくらし給ひけん。内陣に響鳴て、物の具の音ぞ聞へたる。信長冥感、肝に銘し、いよくたのもしく、覺之給ひければ、神官田嶋丹後守惣檢校千秋伊七郎等におほせて、神酒を捧たてまつり、すなはち御祝有て、先年今川義元の大軍にむかひし時、内陣にてもの具の音のしつるか、捕狭間にし、て勝事を一戦の中にて得たりける、今度も亦響の音の聞えけること、ふしきなれ、されは、此軍に

も勝つへき事うたかひなし、歸陣の時、八剱宮を始め、末社に至るまで、残らず造營あるへしと、の給ひ置てぞ、立たまふ。はたして其合戦に打勝て、おめき立て歸らせ給ひけるか、又熱田大明神に御参詣有て、御立願逐らるへしと、宮社造營の事、岡部又右衛門尉におほせ付らる。爰に柴田葦毛といふ逸足の名馬あり。ことの急なる時は足をか、めてのするなる、希代の名馬也とて、柴田修理亮勝家が奉りけり。さてこそ柴田あしけとは呼れけん。今度の合戦にもめされたる物よき馬也。明神に、こゝろを奉る事は、惣して勝頼との合戦、信長も一大事とおほしければ、殊更に明神の加護を頼給ひしによつて、此駿馬を神馬にひかせ給ふとなり。是より前、天文十八酉年八月、尾州熱田京都將軍家より、織田備後守信秀、信長父に仰て、造營と云々、江源氏鑑に見ゆ。

景清屋舗といふは、平家の侍、悪七兵衛景清が住宅の跡と申傳也。景清は大宮司所縁有之云々。

彼屋敷の跡に、藪あり、今も篤に、かけさよとなける鳥より、果実作茶点と申と主あり出來るといへり。

姪堂。三途川の姥とて、大なる木像有、景談の橋の瓜なり。

裁談橋。そのかみ弘法大師、此所にて、讚談ありしより、讚談の橋と名つくともいへり。礼皇殊鑑に曰堀尾金助十八歳頃、天正十八庚子二月十八日、打立、小田原に趣所に、於陣中、同六月十二日卒死。遠岩世俊禪、定門と号。悲母愁歎のあまりに、かの三十三年に、あたつて、渡裁談の橋と云々。此橋、瓜商家の棚に、大黒有、委細追而可守。

義経記に、しやな王丸鞍馬を出、奥州に下るとて、尾州熱田にて、元服して、義経とみつから、改名と

云々。

沙石。熱田の神官のかたりしは、性蓮房といふ上人、母の骨を持って、高野へ参る。次に社頭に宿せんとす。人しりて、宿かす者なかりければ、大宮の南の門の脇に、参籠する夜、大宮司の夢に、大明神の御使とて、神官一人来て、今夜大事の客人を得たり、よくもてなせと、仰にてさふらふと見て、ゆめさめ使者社壇へまいらせ、通夜せし人もあると尋ぬるに、この性蓮の外に、人なし。さてはとて、此僧を請する、母の骨を持って候へば、えまいらしと申けるを、大明神の御下にては、万事神慮をあふさき奉る事にて侍りける示現をかうふる上は、私に忌に及はずとて、請しさま／＼もてなし、高野へ送りけりと云々。

承久の乱に、尾張住人恐て、社頭にあつまり、つかきの中に、財具等もてはこひ、所もなくこそ、あるたる中に、或は親におくれ、或はうぶ屋なる者あり。神官制しかねて、大明神をおろしまいらせ、御託宣をあふくへしと、御神樂をあけ、諸人祈請しけるに、一人の祢宜に託して、われ天より此の國へ下る事は、万人をはくくみたすけん鳥也。折にこそよれ、いたすましきせと、仰せられければ、諸人一同に声をあげて、隨喜渴仰の涙を流しけり。其時の人、今にありてかたり侍ると云々。

同國熱田の社頭に、若き下子男^{ゲス}十一月十五日、俄に両眼つふれてけり。心うくて、神宮寺に参籠して、兼師に祈念す。次のとし三月十五日の夜、夢に一人の僧来りて、汝起て、目見あけよ、と仰ければ、見あけんとする程に、頓て開てけり。まのあたり見たる人の説なり、文永年中と

云々。

撰集抄。興福寺の僧一和、維摩會の講師にもれ、性延にこされて、世をあぢきなく思ひ、立さりてあつまの方におもむき、尾張のなるみかたにも着侍りぬ。塩干の隙^{ひま}をうか、ひて熱田の社に参りけるに、けしかる祢宜の来りて、汝うらむ事ありて、本寺をはなれたり、迷へる人のあらは、うらみはたへぬものなれば、ことほりにし侍れとも、心に叶はぬはせなり、陸奥の國をひすか城へと、思ふとも、そこにも、つらき人あらは、又何の死とてか、こえゆかん、たゞ急ぎ本寺に歸りて、白頃の望を、どくへしと侍る時、一和僧都おもひ、まらぬおほせか、な、かゝる乞食修行者に何のうらみか侍るべきといふに、祢宜大きにあさけりて、う、めども、かくれぬものは、夏虫の身より、あまれる思なりけりと古歌を出し、おろかなり、かの講師といふは、みな帝尺の札にしるせり、性延一和義操觀理とあるなり、汝はなさけなく、我をすつれとも、われは汝をすてすし、こ是迫したる来世、春日の山、老骨すてにつかれねとて、あからせ給ひにければ、一和僧都かたしけなくて、いせき歸りのほりにけり。頃は神無月中の十日の事にてなん^上。

雑談集に、尾張の熱田の宮に、下郎ながら、學問して、學生なる僧ありければ、とも、本地の物なるゆへに、講衆ともさけて、一座につけす。住山して、西塔にて、學問しけるか、碩學のおほえありて、四人の學生、延信、恒慶、信覺、慶兼といはれける、恒業は、かの熱田の宮の下部なりけり。律師になつて、輿にて下向して、時の大宮司より上に、座してあるを、みたる人物語し侍し下略。宝物の内。吉光短刀。しのきに金を以、巴を入て有之。

長谷部國重贈指。 瘤丸備前守所作。 此短刀景清刀と云々。

九月廿二日稻葉山合戦に千秋紀伊守神殿の瘤丸を申しろしてさしけるか討死す。蔭山掃部亦これを取てさしけるか流矢のために両眼を射つふさる。其後丹羽五郎左衛門長秀さして眼病をうれふ。依つて神殿に返納し奉云々。ははき際に地金くろく瘤などのやうに見ゆ。度々すりあけ、るに、おなし所へのほりて有夫より瘤丸と申けりとせ。

琴。義直卿より御寄附云々。

弘法大師自筆の繪像小。

官譜一卷。菅丞相の御筆云々。

曰蓮 自筆法華經。

勅筆御経。白帛金泥。

千躰の小佛永亨。

馬角。大宮司持季自作。

五重衣。唐櫃に入ていくらも有十二重と申てみせ侍し。

伏見院御造營の時、宮女多く五重衣を上云々。

其頃にか 禁裏より なてしこの花や手向の神の前御法來。

横田治左衛門小弓。

真柄か太刀越前朝倉義直が士真柄十郎左衛門常之云々。世五人の力を持て、そのかく小なかりしもの也。於柳川合戦討死

柳姉川合戦の事是江州の事にて尾州の戦にあらず、然共真柄討死の次第可書自角於之とるに申す。
織田上総介平信長 徳川源家康公へ、以使札、今度於江北、朝倉茂井と無二の一戦を可遂と存候間、是非御加勢頼入旨申遣はさる。家康公頓て出陣可仕との御返事にて、御加勢として御出馬の節、高天神の小笠原典八郎長忠前廉より御手に属すといへ共、旗頭郡キトウダを領して、勢を持ゆへ御跡にて甲州への手かはりを察給、かれか手勢を半分のこし、御人数をも五千と、めて、甲州を押へ小笠原をは召つれらる。すてに永禄十三庚午年元龜元年也六月にうつ立同廿三日吉田にして、小笠原を待合たまひ、二十四日に五千余騎の勢を率して岡崎を御立、同廿六日の暮方に、江州坂田郡龍ヶ鼻今須辺に御着居なり、彼是御留守居の御手配りによつて、江州へ遅く御着ゆへ、信長公を始め、諸卒此度の一戦、家康公をたのみに相待候に、若御出馬も有ましきかと心許なく存けるか、依之諸軍いきほひを増せり。先信長公には、遇たまはて、翌日未明に、本多平八郎忠勝後中務 内藤三左衛門尉家長後赤石五門二人召つれられ、淺井か陣取大寄山へ御越敵のやうすよく、御覽し分ら龍ヶ鼻辺の足水、リ嶮難を見はからひたまひて、扱朝倉孫三郎か陣取をも不殘御覽有。夫より信長へ御對面なり。信長、白帷子の上に、桐の塔の紋付たる八幡黒の革羽織を着、笠をきてぬられけるか、感悦不淺して、床机よりありて、笠をば不脱しきたいあり。遠路御出張満足かきりなきよし、述らる。家康公仰に曰、敵さためて横山の城のおちさるうちは、是へおしかけ可申間、近日御合戦たるへきと宣ふ。柳横山の城には大野本土佐守三田村左衛門尉野村肥後守同兵庫頭四人侍大將として、八千五百、淺井こめ

置どころに、信長小谷より歸して、城に押よせ是をせめらる。城兵一先はふせきけれ共抱か
たくおほへければ、頻に注進に及ぶ。淺井手勢はかりにては叶はしと、義景に加勢をこはる。
義景今度は覚束なく案しわつらひける所に、早馬再三に及へば、朝倉孫三郎宗景を大將とし
て、一万七千余騎を差向、其身も頓て出張すへきよしなり。廿六日に淺井父子越前勢を合せ
て大寄山に打出、陣す。信長の兵、彌横山の城をせむ。城中猶こたへ難く、後詰をこふ事極
のはをひくかことし。備前守長政、家老共を呼て評議ありけるは、義景出勢を待中には落城
すへし、急ぎ合戦をとくへきは如何と問る。各可然と申す。さらば大寄山より、信長の本陣
龍ヶ鼻へは五十町なれは、直にかゝつては、人馬つかるへし、明朝野村三田村へ陣をうつし、一
宿して廿九日の拂曉におしかけ、一當あつへきとあれば、いつれももつとも同す。中にも
淺井半助といふ者は、一とせ武、百修行して、美濃に至り、稻葉伊弉守通朝越智氏に仕て功あり、依
年美濃に有て、信長のはたらきを見るに、勢ひ速なる大將なれば、明日野村三田村迄もよも陣
取らせ候まし、ねかはくは今暫く軍の様を御うか、ひ御尤の旨申処に、遠藤左衛門直継と
云る荒者出ていはく、備前守殿の謀よろしく、覚候唯一戦可然、我敵陣に入て、信長と組て討果
すへきうへは、味方の勝利、何のうたかひか候はんと申に、皆々是に同す。二十七日夜、ふけ
て、上下支度して、大寄山より、未明に、野村三田村へ陣を移さんと、ひしめく処に、あんのことく、
信長申されけるは、夜すから、敵陣に火を焼は、朝合戦にかゝる事、必定なり、是このむ処の幸な

り、人々は如何となり。家康公仰に曰く、すみやかに御手たて有て、備を御定可然候はんと也。
即武井肥後守視持出て、かしこまる。家康公、今度は敵死生を極て、来るへし、淺井にても、朝倉
が勢にても、一方は其うけとり可申と御望也。然とも池田勝三郎恒興後肥伊守
信輝入道勝を号。内々申
こむによつて、信長も介かねらる。乍去池田まへかとより、達て望につき、惣して、合戦は二の
手が大事なれば、越前勢におむかひ候へと申さる。池田は何とて二の手まで、やりたつへき
とつふやきけり。扱信長家康公は、小勢なれば、たれをか加へ申へきとあれば、稻葉伊弉守を
差添らるへき旨、好仰らる、によつて、信長、かやうの望にあひぬるは、名譽ぞ伊与守はせ加つ
て、軍功可致よし申さる。伊与守わつか千騎計の手勢なれば、一應は辞するといへ共、家康公
存る子細あり、加勢あるへきといかにも、丈夫に仰らる。其時一旦は如斯申つ、いかなる大敵
にても、御心やすかるへしと、御うけ申す。かくて、家康公朝倉が方の一番合戦その二の手
は、稻葉とは定めらる。淺井が勢にむかふ處の先陣は、坂井右近、継て池田庄三郎恒興後政、信
長旗本、迫は、已上十三段なり。横山の押へには、丹羽五郎左衛門長秀をさしむけらる。とや
かくと、さためらる、内に五更の天に及ひぬ。合戦の次第は、使番を以て、ふれらる、に、諸卒
心得ぬかほなれ共、下知にまかせること、く、面をさして、勢を押廻す。淺井が勢、野村三田
村にうつり入けるに、矢石を放て、攻めれば、敵も案の外に見へぬ。されとも、味方のまはらな
る所を見おほせて、三田村にひかえたる朝倉が勢より、徳川殿の先勢にかけ、合、始川を、四度、迫
越つ、こし利に乗て、競ひかゝるを、淺井が先勢、これを見て、越前勢こそ勝てみゆれと、信長の

先軍に討てかゝる。兼て木下藤吉郎秀吉、大將の御前に参て申けるは、それかしに、淺井郡を給はる上は、先陣を給へきよし望めり。必是尤なれども、坂井は功の兵なれは、一番に坂井池田と定め置ぬ。汝は其次を請取へしと申さる。内々は坂井池田にも劣るましきものをと思ひながら、力及はてひかへらる。去る程に、淺井が先手磯野丹波守秀昌が勢、勇進てかゝるを、右近ひかへて待かくる所に、磯野丹波守につゝいて、高宮三河守、大守、大和守、山崎源太左衛門尉行家、赤田信濃守、連大寺主、膳正、和田傳内等五千余騎おめいてかゝる。右近も二千余騎、姉川をこさせしと、さゝゆれ共、磯野が勢強ふして、河を迫越し、さん／＼にたゝかひける。勝にのつて、忽いとう声をあげて、迫崩せば、坂井が一族百騎許引返して討死す。右近が嫡子久藏十六才、十三の時より武勇を勵しけるが、これも同じくうたれにけり。郎等には可児彦右衛門尉坂井喜八郎なんと、枕を双へうたる。信長の先勢此いきほひにおしたこらぬ、家康公御本陣に横さまにくつれかゝる。左衛門尉忠次、最前の詞といかふちかふものかなと、悪口して、長太刀ナギナタをもちこにくるものを拂ふ處に、池田が股のあたりには、少しあたりけるを、家康公御覽有て、先手の所は不見もの、前にて無用の悪口せんなきよしと、め給。西の方朝倉小勢がこれ二万餘騎に、家康公の御勢、わつかに五千騎、先手は酒井左衛門尉忠次、小笠原興八郎長忠、神原小平太、康政、其外鳥居彦右衛門尉元忠、松井左近允忠次、後松平大久保七郎右衛門尉忠世、石川伯耆守教正後改吉輝、東三河の兵共二千余騎、馬を一面に立ならへ、鎧をさろへて進けるに、敵の先陣八千槍袋を作て、川向より突てかゝる。家康公の御下知を以て、小笠原が一手、御備をは

なれ、川を越し、朝倉が勢と相戦、酒井石川本多、神原大久保、川の上の瀬を、鋭々に越、横合にかゝつて、切くつさんとすれども、敵多勢なれば、味方す、み得ざる所に、渡辺半藏守綱、本多三弥正直、真先に進て鎧を入。酒井大久保、石川神原、毎度かへし合て、むかふ敵數十人つきせ切ふせ、さゝゆれとも、敵目に余る大勢なれば、ごととせて襲来る。刺へ東方坂井池田、淺井につき立られて、信長の本陣もくつれ立て、己に三町余退、危くみゆる所に、家康公本多豊後守廣孝陣重と本にあり、松井左近允松平左近、忠次に仰られけるは、東面を見るに、味方すてに利を失り、此上は、我旗本をくつしてかゝれと。御身を守る本多平八郎忠勝承て、川を渡つて向にこし、弓を三度おこして、敵三人射倒す。これにつきて、彦坂小刑部も矢を放て、かせくうちに、本多馬上に鎧をひつさけ、只一騎、三陣にひかへたる一万余きか中へ、面をふらす、さけんで向ふ。豊後守も左近も、平八うたすな、本多討すなと声々によは、つて、手つから鎧おつとり、我おとらしと、姉川に乗入、鎧を投ゆるれば、家康公の近習の兵左右に立て、同音に鬨を作りかけ、鎧を入ぬ。敵すてに引色なり、爰をうてと下知し給へは、さしもにほこりし猛勢も、家康公に迫立らぬて、散々に敗北す。田川虎御前、迫うち討て行ほと、真柄父子三人、前波新八郎、舎弟新太郎、小林瑞周、軒魚、住龍、文寺、黒坂備中守等引かへして討死す。中にも真柄十郎左衛門尉は、大力にて五尺斗の太刀を以て、多の人を切すゆる處に、匂坂式部手鎧にて渡り、合、真柄が草摺のはつれをつく。こと共せず、太刀をもつてはらへは、匂坂が甲の吹かへしを打碎き、鎧をも取落す。処に、式部が弟の五郎助来て、わたり合けるが、太刀打おられ、刺弓手のも、を薙すへらる。

かゝる所に、句坂六郎五郎見付てたすけ来る。内に郎等山田宗六主をへたて、立向ふ。眞柄志を感じなから討之。其間に六郎五郎鑓を提て走り来り、十文字にてかけたふし式部に向つていひけるは、最初に鑓付らぬし所なれば、御迎首とらるへきよし譲る所に、式部斬々あふのひて、薄手少々おひたる上に甲をつよくうたれて伏ければ、進退も心にまかせず、汝取て大將へまのりすへしといふによつて、首を挫。眞柄が嫡子十郎も差を死所と戦けるが、父が討死を聞て、其場に来て、青木が郎等を討ける所に、青木加賀右衛門尉重直法印後名也が嫡子所右衛門尉一重後長部少輔を以て、め手の脇をかけおとして、首を取る。東の方淺井は、坂井池田を追立、信長の旗本すてに崩ける所に、家康公御勝利に力を得て、氏家常陸介入道卜全伊賀守三千餘騎横合にかゝつて戦へる半に、稻葉父子は、家康公にしたかつて、彼御のあとについで、遠御後にあるし、家康公は朝倉が勢に勝ておひちらし給ふ上は、今はとて淺井が勢横合に突でいる。美濃の三人が家子仙石忠左衛門安藤右衛門佐桑原平兵衛今枝弥八森九郎兵衛稻葉刑部少輔同土佐守古江加兵衛豊頼与十郎等、龜を入、追崩し、淺井雅樂助を始として、弟の齋助狩野次郎左衛門尉同次郎兵衛尉細江左馬助、早崎吉兵衛なんと同じ枕に討死しけり。雅樂助兄弟は、故有て曰、頂義絶する處に、廿七日亥の刻斗に齋助が陣所に行て、明日の討死を定め、酒を乞て、遺恨を断て、郎等ともをもよひ出して、盃をめぐらしけるが、はたして討る。斯て遠藤喜右衛門直継は、信長とさしちかへんと、心にかけて、首を提、味方に紛れ、ならふ處に、竹中久作見付組討にす。是も兼て、遠藤が首をとるへきといひしか、終に得たり。遠藤が郎等富

田才八、主うたれめと聞て取てかへし、さん／＼に太刀打して討死す。富田が義士をや耻たりけん、弓削六郎左衛門尉、今村掃部助も、とつてかへし比るいなき働してうたる。上坂刑部少甫、同五助、其弟治部右衛門、同弥太郎刑部少甫、安養寺甚八郎等歸る。安養寺三郎左衛門尉は敵の首を取て立處に、信長の走のもの五六人拵かさなつて生捕にす。信長かれを呼寄て悉く顔を見せらるゝに、二三拾程其名を顯はす中にも、織田一郎那常一郎同儀久持來る所の首、いつれも弟のよし申す。信長不便のくはへらる。直に小谷へおしよせへしと有れば、今日の合戦にあはさる備前守殿父下野守殿手勢千騎も候井口越前守が勢五百余き、千田采女正が勢三百余都合千八百はかたく候はんと申すにつき、是を止らる。安養寺は加恩有へき由にて、不破河内守に預らる。秀吉は、直に小谷へ押よせ給ふへき旨進けれとも、早速にはせめ落しかたし、味方今日の合戦に勞するうへは、重而可攻にきはまる。武井肥後守等に仰て、戦忠の品を記させらる。就中家康公今度の大功、当家の綱記、武門の棟梁たるへきよし、感狀にのせられ、次に美濃三人の横鑓を被賞。小笠原勢進て川を越ける時、渡辺金大夫といひし兵、川向の堤の上を行て鑓を合けるを、信長大きに譽感せらる。後に盃の上に、眞宗の脇指感狀に添て給。其拵ふし、伏木久内、林平六、伊達興兵衛、吉原又兵衛、中山是非介等、金太夫より十間斗先立て鑓を合けれ共、堤のかけなるゆへ、信長是を見らぬすとかや。板横山の城は、おのつから退散す、頸数すへて三千餘、義昭公へ持せて奉むとせ。それより磯野丹波守が佐和山の城によせて、かこまれけれ共、峻難の地なれば、一旦には落へからすと、鹿垣を結廻し、百々が屋布シキをむ

かひ城にとりて、丹羽五郎左衛門尉長秀を入置北の山に市橋九郎左衛門尉長利南の山に水野下野守信元尾州和多郡小川郷三州刈屋等城守、彦根山に河尻与兵衛重能後肥後守、爲定番すへらる。小谷のおさへには、秀吉をもつて横山に置、而大將飯陣し給。かくて信長七月六日近習斗にて上京ありて室町殿へ今度合戦の次第申上られ、歸國に趣き給ひにけり。

松平記に曰、六月廿八日早天、姉川合戦、信長衆、淺井衆に切たてられ、敗軍の処に、家康公衆、横鎧を入切かへし、信長も是にきほひ悉ひつかへし討勝給ふ。越前衆を家康公御衆、虎御前山追討にす。此時敵二人、味方にまさきれ入、家康公へ近付處を、天野三郎兵衛組討にして、高名をきはむ、老人の敵は退と云々。

一元龜元庚午年夏六月廿六日、公卒シテ五千之軍士ヲ、至ル江州津守信長。二十八日、姉川合戦、信長當ル淺井、公卒五千之兵、向朝倉万騎之軍、而大破之、淺井虽乘勝、然以越兵破故。共敗走矣。此日信長賞公戰功、公賜重器奇珍、又以書牋之曰、今日大功不可勝言也、先代無比倫、後世誰能シ、雄ヲ、当家綱紀武門棟梁也云々。

一 熱田に山口祥雲屋敷の跡あり。今は神龜田島丹波橋の内世四段が在る、神龜田島千の門は祥雲の門と云々。三代已前の山州は祥雲智之世、祥雲才次をなせし水鏡に記す。此は事大略記に在。

一 夢違観音。庚申。最明寺時頼の守本尊と申す。
○ 富部天王。此は富部戸部或は乃部一説、天龍寺に在る、富部戸部信盛元の坊住持の事云々。
蛇毒神天王と申奉る。天王、むかしは、はるか山下に、社おはしけるを、ちかく爰にうつし奉るとなり。祭は六月十日也。御芦をながす事、大むね津島に同じ。

津嶋にも、模社に、蛇毒神天王と申奉るかありと言ひ、可尋、この社大蛇をいはひけるにや、社人に侍るなり。

社僧天福寺百石の社領あり。道言宗。
いにし比、南野に、梶川道齋といふ者、十一月廿七日より十二月四日、追身をきよめ、国主忠吉卿の御煩平癒の立願あり、則、快全のよろこびにとて、三月下旬、神樂をあげ、湯を捧ぐ。忠吉卿此事を聞せ給ひて、慶長十年の頃にや、御再興の事あり。其後、少進法印、保生太夫等、神前において、猿樂有とせ。

薩摩守忠吉卿御朱印、兼義直卿光義卿御黒印あり。

戸部の城跡。今は天王の社有、本は海辺にありしを、爰にうつす云々。新左衛門城と申傳外に委書之。新左衛門能書云々、属義元。

○ 笠寺。そのかみ、十二坊ありしか、今は六坊ありとせ、東光院天神繪像アリ、西方院、西福院、宝壽院、泉増院、慈雲院、轉輪院。笠覆寺と号。開山は、禪光和尚と申す。聖武天皇天平五年に草創の寺也。観音は、八劍神作なり。中頃堂破て、観音雨に濡て、野中に立給ふ。ある時一女、菜をつみて居けるか、俄に雨ふりきぬ、これをかなしみて、観音に、我着たりけるひの木笠を脱て、着せまいらせ歸りけるより、今後幸得、名有人の妻となりて、家とみさかへ、かたのことく、堂をも建てけり。夫より笠寺といふにこそ。今も、其の笠朽なからに侍るとなん。つふさなる事、縁起に有とかやいふ。柳縁起には、尾州愛知郡呼統の浦、松巨島の北端なる坂野にさかの、太夫子善光

上人濱に一つの寄木あり。是鶏旦ケイタン國蒼山の靈木にて、放光夢告あり。天平聖曆八年丙子聖武坂野の北原に寺を立、天林山小松寺と号。抑此佛を造る人は、いつくともなく采りしか、熱田八剱宮の前にうせてかたなし、しかれば八剱宮の御作といふ。一だひ堂破れ佛像あらはにて、松巨嶋荒野の中石の上に立給ふ。しかるに鳴海の長、小太郎成高美濃野上の主に對し耻にあふ事有、怒て美濃におしよせ討之、かの人の女の美なるをとりて歸。成高か妻見て、耻も元此むすめ故なればとて、深くいきとをり、茶つみ水汲む業をさせて、追たす。ある時、星さきの野にて、十一面の觀音の、雨にぬれてあるを、この女笠を佛にきせ、顔ひを申て歸る。其頃ときの閑白の御子中將と聞へし人、東に下るとて、かの成高か家にゆとれり。中將かの女におほし入て下りたまふる。

うちいて、月日はるかになるみかたこ、ろのま、にかへる浪かなと詠し、さて中將都にのほるとて、彼女を乞請て召つれ給ふ。閑白は照宣公、中將はかねひらと云々、縁起大概社關部三有依而思す

一 延長八年庚寅人王八十代醍醐の御宇、堂を造供養せらる。庚寅大明神の御縁日たるものをや。姫のきせま（い）せられし笠ゆへにこそ、未代迄に笠覆寺とは申けれ。今も、かのひの木笠の、朽残る云々。かの、みさきは鷄旦ケイタン國の蒼山の靈木天竺の靈山となり。熱田八剱大明神の御作にて、利益尊くまします也。

一 此迦藍原仙人塚（仙人塚方士が事歟、徐通か追可尋）田樂ヶ窪、鷺津芋河。

一 笠寺城といふは戸部の城の事と云々。

山口新左衛門亡て、後に今川義元の兵部五郎兵衛、三浦左衛門佐、飯尾豊後守、淺井小四郎、葛山播磨守以上五人守之と云々。武鑑に、此時、沢田掃部介、今川中務丞も籠ると云々。

又戸部松本の古城と云々。東面廿間、南北六十間。（笠寺城にあり、重盛にて、西に河原あり、今天主社あり）城南に、松本とて、小郷在山口愛知持之と云々。新左衛門と聞へけるは、山口左馬助小事となん。左馬介は中村城にありとあるなり。愛知この城に居し内の事が可尋。

新左衛門（戸部の新左衛門と今に云也）亡ひし事、和漢軍談に曰、

織田信長つねに、今川義元を亡ほさんと思ふて、謀をめぐらされけるが、義元の家人戸部新左衛門（山口左馬介と云々）とりふもの、笠寺の刃を知行して有けるが、義元に二心なき者なれば、尾州の様子見聞次第くはしく、義元へ告げる間、信長のはかりごとと、のをりかたし。新左衛門能書なりしかは、信長其手跡をこ、ろやすき石筆に一年餘り習はせられけるに、新左衛門か手跡によく似たりければ、謀事を作り、義元を亡すへき請合の状を、信長方へ新左衛門より越ける文言にした、め、二心なき侍と云々、商人（こまもの）に出置候を、駿府へ遣し、これを何となく披露ありけり。義元大に（い）かりて、戸部新左衛門を召よせ、三河國吉田にて切腹せしむ。これより尾州の計略、義元へもれさりければ、信長うんを開りと云々。

彼反古に而賣物をつ、み女中の手に入れて見せけるに、心あさく是をとりもて、義元に見せまいらするに、せ、かくはあこなはれける。新左衛門はゆへなく、尾州よりおひて、吉田ま

て下りしを、おして生害に及ふと云々。此子にや後の左馬介信長に属しけるが此事ろけ
 んしけるゆへにや、依帳つゝに今川にかへりつきて、勢を引入し事諸書に見へぬれば、は
 らく爰に略すなり。

左馬介 新左門守

九郎二郎 同人生害と云々

左馬 大坂藩城

愛知那笠寺出生

初佐久間甚九郎に仕之中仁常真

後仕

家康公

山口修理系圖に云紋唐菱 俗に是を大丹菱と云 大内氏多良姓

琳聖

王爺子第三皇子

正恒 藤根 宗範 茂林 保盛 弘真

周州吉敷郡 宮野藩生

貞長

貞成 盛房

周防 権介

弘盛 周防 権介

満盛 弘盛 周防 権介

弘貞 周防 権介

弘家 天田 太郎

重弘 周防権介六波羅評定御采女 号小野号三葉福寺淨重心

弘幸 周防 権介

弘世 周防権介 号正壽院常尚 号道隆

義弘 孫太郎 左京大夫 号香積寺佛実

成盛見 六郎 左京大夫 号國清寺德雄 実弘世有曾世 永享十三年辛亥年五十五才

持世 刑部少 修理大夫 号澄法寺正弘

教弘 左京大夫 關雲寺教弘

政弘 左京大夫 法泉寺直正

義興 左京大夫 凌雲寺義秀

義隆 兵部卿 隆福寺珠天

持盛 孫太郎 周防権介号勝音寺 道継永享十五癸巳年四月八日辛三十七才

教幸 孫太郎 号廣沢寺南宗

任世 至星崎居 五波羅寺地 後東 彰友生子曾世 尚法世号多門院

盛幸 山口太郎 修理大夫 号四覚院弘心

盛重 將監号 樂峰院宗先 号生崎庄城主

盛政 平兵衛 号重七宝院道五

重政 長次郎 平兵衛尉 但馬守 修理亮 全勇男 母關部為九郎正房女

教仲 次郎太郎 左工門尉 号明善院弘樂 (異本ニヨリ訂正)

重俊

政成 平七郎生 星崎 天正十年於美濃討死 十七才 法名良英

重信 熊凡長次郎 伊豆守 母小坂孫九郎雄吉女

重定 長次郎 母西方出雲守忠隆女

重克 小平次生 星崎 元和元年之卯大坂陣時 就水野準人 正忠清、到三國山表、五月七日討死 三十七才

重長 嶋之助 同母 慶長十五庚戌年辛十七才法名全金

重直 半左工門尉 慶長十三年戌申生

女子 山口長石工門尉重根母

重隆 半兵衛 従五下 但馬守 慶長八癸卯年母同上

重恒 半左工門尉 従五下備前守

重時 長左工門尉 母同右

女子 高木主水 正成妻女

尾陽雜記 卷之二

天正十年六月二日信長父子於京都明智光秀かためにうたれ給ふ。其比家康公泉州堺よりかへり給ふ処に、淀堤にして、むかふより編笠を着てはたと馬に打乗て、ときはする者有。人々のかにと見るうちに、馬よりひらりとおりて、御側にかしこまるを見れば、茶屋新四郎也。信長信忠討死のあらましを申上によつて、人々穿義まち／＼なり。信長より御馳走に付らぬし長谷川藤五郎御とも申けるか、御断申て京に登る。家康公仰らぬけるは、義をもつて急きのほる長谷川を見すて、ころすも本意なしとも、京にのほりて、ともかくもならんというて給ふ。しかれとも、本多平八郎等強て申上伊賀越にかゝらせ給ひ、伊勢の白子といふ処より、御舟にめし遠州にかへらせ給ふ。

しかれは信忠の若君家督として、安土におはしますによつて、爲後見北畠信雄御出仕也。秀吉見廻として、こゝれ又出仕なり。雖然、秀吉内々信雄と手切有度内意ゆへ、其節に及て、信雄へ申さるゝは、某毛頭疎略なしといへとも、今度城内にて生害を可蒙との儀承及候、子細は秀吉か身に對して、曲事可有には、夢想の告あり、たとへば、白張装束の者、たれとなく来て、右のことし、しかるときは、御恨みに存奉る事至極せり、左候へば、一旦信雄御へ陣し申さむために、しばらく安土を立退候はんとして、坂本をさして歸城なり。右の躰によつて、常眞安土にたまり得ず、長嶋へ引取給ふ。家康公へかかたのみ給ふにより、其上信長の厚恩謝し行ふため、御出陣と云々。

右一本の異説也。

長久手合戦始終。

一天正十二年、信雄の家臣岡田長門守同助左門長子尾州星崎城主津川玄蕃豊州松坂城主淺井田宮丸尾州安賀城主周新八秀吉より内々内通有て、三人ともに秀吉味方の志あり。信雄秀吉江州にゐたまふころ、右三人の外に、瀧川三郎兵衛後号服部下總守をも、秀吉旅宿の暮方によひよせ、右四人に申されけるは、瀧川も同しく一廉取立へきとの内意ひそかに被申聞處に、いつれも同心可仕と應諾す。すなはち誓紙を望る、によつて、此時瀧川心中に観念し、此誓紙を以て信雄へ可申上と相究、をの／＼誓紙相濟けり。翌朝三井寺の金堂におゐて、信雄と秀吉對面可有との儀なりしか、其前瀧川三井寺へ参り、信雄へ秀吉の内通または誓紙仕候通、ひそかに委細を申上すなはち瀧川歸宅なり。信雄秀吉於金堂對面相と、のひ、それより秀吉は直に上京有。信雄はかなつちといへる黒の馬にのり、三井寺より直に尾州長嶋へ歸城也。日着なりければ、供の人々つゝ、かすして、漸馬取一人にて下着也。馬も息をして忽死す。それより三十日はかりは、何のさたもなかりけれとも、諸人不審をなしあへり、しかれば土方勘兵衛雄久を使にて、三臣のかたへ、明朝鷹の鳥たふへき間登城有之やうにと、信雄より申つかはさる。三人すなはち御請を申。就中長門守は此ころ病氣につき、廿日計籠居のところに、氣色本快につきて登城す。最前長門守土方と参會の時、我に自然御疑

を蒙らば、必定其方に仰つけらるへし、これ見給へ、此わきさしは、かくれなきわさものよとて、大わきさしをぬき放し、袖にてぬくひてさしたりけるに、勘兵衛申けるは、存もよらぬ仰なり、さりながら、其事を承らば、中々脇指に手はかけさせ申ましと申て、だかひに笑て罷立。かかれは、三人の者翌日、城に参り、饗應ことおはりてのち、津川、浅井は二階よりおり、長門は、いまた矢倉にのこる。かねて鉄炮の象眼をみする、砌討へきよし、土方に相圖ありければ、信雄仰けるは、此南蠻筒、秀吉より来る象眼めつらしければ、見らるへしとて、奥の一間へ入たまふ。岡田さしより、かの鉄炮を一見のところ、勘兵衛下座にありけるを、呼て見らるへしと申せは、心得候とて、よりさまに、うしろより、二のうてかけて、しかと抱き、小わきさしをぬきて突伏る。長門守も、脇差さか手にぬきて、臥なからきらんとしければ、とも、つよくすくめら此て、おのれかひたのを切けるうちに、信雄長刀を持って出られ、土方はなすへしと有しに、勘兵衛大事の忍ものなれば、某ともに御つき有へしと申。津川玄蕃をば、飯田半兵衛、浅井田宮を、森久三郎後勘藤田に申つけられ、うつへき所をおくれけるに、や、首尾をちかへて討延す。津川、浅井、岡田が、最期のてい、二階の下までき、付階子をあからんとせしか、信雄へ申けるは、いかやうの事ありて、長門をば、かくはなされしやと、すてに氣色を変す。信雄少もさは、かす、長門守は仔細あるゆへ、生害せり、各すこしも別儀なきうへは、下候へと、ひかにもしつめて申さる、につき、おりけるところに、信雄つゝ、いて津川を一刀切たまへは、やう／＼下にて、兩人を討。森は日ころ、浅井をたふして、川安賀をおのれたまはらんとはかりけるか、本望達してぞみへし。かくて、長門守が若黨とも、落きたりて、長

嶋の城にて、長州生害のおもむき告しかは、屋さきの城には、上を下へと騒動す。長門守、弟岡田勝五郎後伊勢守、門葉坂井下、総守、其弟赤川惣左衛門、林宗右衛門、那須十右衛門、弟彦次郎、那須隼人、山口半左衛門、喜多野彦次郎等四を呼あつめ申けるは、下々のさうとうの上、心一致せさるかゆへ也、長嶋より、ゆかてよすへし、然は、吊合戦に、当城を守り、廿日もつほとならは、秀吉よも合力せては有まし、各ひと質を本丸へ入おかるへしとて、あつめける。中にも、山口は、其つま、長門守妹なれば、母をと好む處に、何とやらん氣味あしけに、母は、前宵、熱田に行給ひしか、今曉より、腹痛正躰なきよし、申來、本腹次第、箆へきよし、申せは、城中いよ／＼おたやかならず。如案、翌日、山口か母をば、長嶋へめしとられけり。此事、難儀のよし、半左衛門のひ出ければ、勝五郎か、伯父、良隊和尙山口に申けるは、柴田勝家が恩をすて、其合戦にも、忠死せず、落武者の身となりけるを、長門守撫育の余り、五千石の地を施しをく處に、其恩をもしろす、母を以て調署をめぐらし、長嶋にまいらする段、人非人なりと、あさける事あくまてにして、城を出し、何も堅固に楯籠。信雄より、水野忠重を、始三州勢を以て、攻めさせらる、處に、城の、兩星の宮の橋にて、須賀多左衛門と、惣兵衛、忠重、家人、鈴木与八郎、鑓を合。かゝるところに、城中の、兵荒、川弓を能射て防ければ、忠重勢を引あけ、指向つて、ひかへけるに、三川、方石川、伯耆守、康昌後吉輝と改、か組、惣兵衛が、せめ手にくは、り向處に、上方勢の中より、城内へ、忍ひ入者有けるを、三州の、士太田善兵衛イ本夫、教ヶ所手は、負ながら、生捕にこそしたりけれ。かくて、星奇の、城持か、ためか、たく、坂を以て、城をわたし、彦五郎は、伊勢國へと退けり。

或書云、星崎城、岡田長門守居、爲信雄被誅時、水野忠重、天正十二年甲申三月六日、仍信雄命、攻星崎城、而破外廓、十七日、城兵出奔、忠重入之、攻手石川酒井忠次、本多作左衛門守之者と云々。これら水野が勢につく、天正十二年甲申春三月三日、信雄殺、岡田長門守津川玄蕃、淺井田宮三臣、於長嶋、而手秀吉絶好、許秀吉之發兵、請援兵於公、此曰公出濱松至岡崎。

その比北伊勢不殘、信雄の國なれば、秀吉人数をさしむけらる。信雄の兵、龜山の城は平場にて要害よろしからずとて、佐久間駿河をはしめ、小坂孫九郎、中川勘右衛門、關甚五兵衛なんと、嶺の城へ勢を引入。秀吉の方、堀久太郎、蒲生飛驒守氏郷、關安藝守、長谷川藤五郎、追詰けるか、城へ入兵、取てかへし、火出るばかり勝負有。城方山岡八郎左衛門、後道河孫と堀久太郎、家人監物と鎧を合す。關甚五兵衛は、殿をしけるか、名村百左衛門とた、かつて討死す。殘兵城にはこもるといへとも、始終もちかたければ、尾州へと志し、城を明てぞ帰りける。十七日、秀吉臣森、長可、羽黒、瀧川三郎兵衛は、勢州松ヶ嶋の城主故、彼城にこもりけるを、御次丸の人数を以て、取巻せめられけるか、しはしは持かたむといへとも、堀に水もなく、要害心のま、ならず。ことに多勢に不勢かなはずして、城を渡して立退けり。さるほとに、池田昌入は、信長の乳母子といひ、源三郎勝長の舅といひ、かた／＼叛逆有ましく、必定信雄へ味方仕へきものなりしを、秀吉之をなつて、秀次をかかれ、婿とせられ、尾藤甚右衛門を以て、入魂にて頼まれけるを、片桐半右衛門罷出て、義を外にし、信長の厚恩のわすれたまは、ん事甚しかるへかからずと申といへとも、伊木清兵衛か申けるは、武畧の輕重をみるに、信雄より秀吉の方かもし、ぬかはくは、此れにくみし身をも立先祖をも祭り、旧功之

者ともをも、とりたてたまふへしといさめける。中に津田隼人佐を使として、濃尾三の三ヶ國領納相違不可有と誓紙を以、秀吉よりまねかれければ、當分の利欲にまよひて、内々秀吉に心をよすといへとも、三左衛門を長嶋へ人質としてつかはしおきけるゆへとやせんかくやあらましとおもひわつらふ處に、信雄申されけるは、池田かことは、女在あるましき者也。かやうなる者に入質をとりては、いよ／＼人の心疑しく、うとむ心もいか、とて、三左衛門をかへされたり。勝入これをさいはいは、いとおもひければ、秀吉のかたに馳付しか、其比濃州大垣にあり、秀吉への忠節として、尾州へ手つかひす。柳大山の城は、元龜の初、信長勝三郎にたまはり、一万貫の地を相添普請等丈天なり。天正九年にいたつて、織田源三郎勝長をむこになし、此城をはたす所に、天正十年六月二日、勝長於京都信長と一所に討死也。しかれば、信雄尾張の太守と成て、中川勘右衛門を以て、城主として入おかる。中川これをもつといへとも、勢州番手に行、かへりさまに踏次におゐて、私の意趣にてうたれてしす。折からよろしとおもひければ、大山の町人等に日置三藏を以て、金銀をあたへ内通させけるに、何れも同心して、明後十三日の夜船をわたし引入へきよし申て、人質二人渡しければ、同十一日の未明に、日置は大垣へ歸りけり。勝入よろこひ、わさと陣ふれには、来る十三日ひかし、美濃にいたつて、発向し、其日に歸陣すへきなり、腰兵糧のみ用意せよと掟て、十三日にも成しかは、大垣を立出るところに、北方の渡りの辺より、小船あり、またになひて、東をさして行有。これは、池田紀伊守獵船を十艘斗と、のへつ、大豆戸のわたリへ、つかはすにて、せ有ける。夜に入しかは、使番を以て、諸勢にいわせけるは、宇田馬鵜沼川のはたに

陣取へし、東美濃へは通るましき旨かれまはし、亥の時とおほしきに、紀伊守十之うはかりの舟に打乗つて、河を渡し城へ忍びよつて、相圖をまては、地下人等調し合て、三月十三日のよひの月、てりもせずもりもはてぬおほる夜に、坂下水の手より勝入をせ引入ける。城にいたりて、とさのこゑをあくるに、城中おもひもよらねは、十方にくれてありける處に、乗入てこれをせむる。勘右衛門尉が叔父清菴も十字に切て廻り、八字に追廻すといへとも、多勢入替せめけるゆへ、つゝに討死したりけり。かくて池田父子城に入て、十四日の朝、弥地下人をなつて、稻葉通朝豊後通共也つりければ、同十五日卯の刻より、父子小牧山前後に出で、在々所々をおひやかし、午の刻には岩倉近道焼働して引歸す。翌日家康公清須に御着陣あつて、地下人のめして、池田か働のやうすをとはせ給ふ。巳の刻はかりに、勢二三万も有つへうみへて、在々を放火し、ゆかてうち入候と申上れば、今少着御はゆかりせは、一あて御當あるへきものと御後悔なり。かくて家康公信雄へ御尋なされけるは、みかたの城主の人質とも、取置給へけるやと仰ければ、信雄譜代のものはその儀に不及と申さる。家康公此節の事なれば、人質取置可然と仰けるによつて、安井將監をもつて、先茆安賀の城主森勘解由三時方へ人質出すへきよし申おくられしに、森返答には、我等を御うたかひ有て人質なと、候ては、清須の城はもたれ可申かとの、しり、人質出すへきていならねは、將監其方なとは人よりさきに出してこそ可然に、其儀ならは是非なしといひすて、それより黒田の城主沢井左衛門尉方に参りて、人質のこと申ふくむ。左衛門尉申けるは、内

々御うたかひのため、妻子を清須へつかはすこと、是よりとこそ存し候つれ、足よはとも城に有ては、あしまとひになりぬ、其方参らる、こそ幸なれ早々引つれてゆかるへし、籠城の時分は一人も大切なれは、人をはつくるまでもなし、元より將監は縁あるもの、事なれば、同道可然とて、これを渡す。か、りければ、秀吉の先手も、濃州へ出張し、武藏守も金山より、羽黒八幡林へうち出けり。家康公の御家人、酒井左衛門尉忠次、國中打まはりとして、出ける處に罷歸て申上けるは、小牧山を敵にとられ候ひなは、陣中みおろされ、合戦もなりかたし、ことにつけて、あしかるへきとおほへ候、此方より小牧山をとりしき、森武藏守長可後陣をはなれて、羽黒に小勢を以て足長に、只今陣とりて候、追ちらし、上方勢の奴原に一塩つけて、目をおとろかせんと申せは、尤と仰られ、すなはち左衛門尉に、奥平九八郎信昌後号美作守、本多豊後守康重、松平主殿、同典市、松平紀伊守、大須賀五郎左衛門尉、康高、神原小平、木康政、兵部助、氏次等、其勢都合二千はかり、天野周防守を案内者として、相添、同十六日、樂田、羽黒、五郎、凡、刃の民家ごとく、く放火し、時のこゑを作りにかけ、朝樹にこそしたりけれ。二説夜討と森武藏守、尾藤甚右衛門等、隔小川、たかひに鉄炮を放して、剋を移す。時に武藏守か使番とみへて、淺黄羽織の歩者十四五人、馬のまはり、にめしつれたる武者一騎、陣の前をのりめくる事再三也。九八郎、此を見て、何さまよき武者とおほゆる、あれうちとれと下知すれば、馬上の面々ひし、とおりたち、鉄炮を以てかの武者をうち落す。敵これに色めく、廻を馬引よせ、ひたし、と打乗九八郎が手勢はかり、わつかに千餘輩、川を越て、武藏守長可三千はかりにて、ひかへたる真中へ、まつくろに突てかゝる。而陣たかひにくろけ

むりをたて、いとみ合森もしはしこたへて戦ふ所に、奥平が旗奉行川井三郎太夫信昌が旗を、森かうしろへまはすを見て、雑兵あとよりくつれければ、羽黒の内へひき入處を、いきをもくれず、犬山刃までおしかけ、討ほとに敵そこはくうたれにけり。大須賀神原等かひかへたる陣の前に沼ありけるによつて急にかゝる事を得ずして、ぬまをめぐりて馳付、其後追々に、味方馳加りければ、勝に乗にくるを、追所に、羽黒の東山きはにして、野呂助左衛門取て歸し、鎧を合て討死す。長子同助三、父討れぬときいて立歸り、先に進むものを突伏しか、うしろより股をなかに、終にそこにて討れにけり。武藏守辛々金山さして敗軍す。犬山には稲葉伊守通朝入道一鉄、同子右京亮忠通、郡上の西遠藤都合の勢三万余騎、犬山段の上に勢を備敵来るにおひては、一番合戦をは稲葉仕候はんと、鎧玉を取て待かくる。家康公は、敵段の上に備て待うくるときこしめし、九八郎か方へ、天野佐左衛門を以て、凱歌をとなへ引とるへしと仰つかはされければ、やかて勝ときをあけて引上る。敵にも、ときを合せ合たり。かくて小牧山さして勢を打入給ふに、今日の合戦に、九八郎か手におひて首数七十餘討取けり。家康公御感不斜して、九八郎に一文字の御刀を給ふ。叔信雄家康公同十七日小牧山へ御移有て、堀をさらへ、屏土をあけ、御陣城の御かまへ也。蟹の清水、外山村、宇田津村をも要害にこしらへ、勢を入給ふ。又春日井郡小幡之古城をも取立て、三州上下のたよりのために、本多豊後守康重と駿州穴山名代として、穂坂常陸介在城す。しか此は、秀吉大垣をたつて、船沼に船橋をわたし、犬山の城にうつりて、先手を小牧山の西東へおしまはす。かくて上方勢、小牧山の東三重堀の前へ人数を押し出して、備間

遠に見へける處を、小牧山より、家康公御覽ありて、本多平八郎忠勝に一當あてよと仰付らる。御挨拶も不申上、再三仰ありける處に、酒井忠次御側におりしか、此中のてい無評定也と申せば、本多必無用と申。此とき、いつれも、小牧山の城にて、さげすみけるに、よすへきとも陣とるへきとも見へす。されとも諸人合戦の心かけありし所に、左衛門尉忠次うちあふのき、日を見て、郎等に申つけ、るは、今日は、軍もあるましき間、宿陣の用意して来るへしとて、清須へつかはす。其節家康公忠次をめして、合戦を持たる敵にやあるとおほせられければ、忠次合戦は、仕まじきてきと申上る。仔細は、いかにとせば、世給へは、左衛門尉日巳に未刻を過敵地へ深入したる勢なれば、早速陣とるへきと覺候、其上秀吉弓矢功者なれば、無案内なる合戦は、よもあるましと申上處に、あんのごとく、其通りにて、てきも早速陣取けり。其夜二番堀へ小牧山より、たれとなく、鉄炮二つ三つ打入しを、上方勢ことのほかに、あはてさはいて、ことく陣中しつかならざる所に、秀吉、稲葉は、なきか、いかなれば、かくは騒動すると有ければ、一鉄則二重堀をのりまはし敵もなきに、かくのことくは、ささくせと、大音声にて走めくりければ、ほとなく靜に成り、秀吉樂田におゐて、急度思案有けるは、三州岡崎の城を攻るものならば、家康いかに武しといふとも、よも小牧山には、こらふましとて、羽柴孫七郎秀次を大將として、其先鋒池田昌入、森、武藏守長可、堀久太郎、奔政、後左衛門督、等已上其勢三万余騎、四日八日樂田を立て、小幡岩崎にさしむくへきよし、これは、武藏守羽黒のかけ合に、犬山より昌入等助さる處と、人口ちまたにみちければ、そのいひわけのために、やありけん、昌入、秀吉にまいつて申けるは、敵にも、篠木、柏井の一揆原をかりもよ

ほし村瀬作石衛門のよし篠木より告しらむる者の候へは、すこしもはやく、秀次武藏守久太郎某四入の勢を以て岡崎を乗取へし、さて東三河少々放火せしめ、ゆかて引取篠木柏井に両城をこしらへ、一揆原を撫多くこれを扶助し、毎夜敵をおひやかし、夜討を入るほとならずは、尾州はかならず味方に属し候へし、武藏守も一家也、秀次は智なれば、何も一所なるゆへ、久太郎を加たまかへきよし望けるとせきこへし。久太郎申けるは、昌入武藏守等敵をかうしめ候間、合戦の首尾心元なしとせあゆみける。家康公物見をつかはし見せ給ふに、いそきはせかへり敵すに野田志談、味の河をこし、東をさして、おもむき候と申上る。あんのことく、勢を介るときこしめして、我はかりことに落ぬと御悦喜かきりもなかりける。

或本に、秀吉の先手日根野備中守、弟弥次右衛門、子共五人、其勢二千餘、三重寇の要害に入あかる。

岩崎山の城には、稲葉伊与守、子右京亮彦六、同右近勘右衛門、其勢四千餘。小松寺山の城には、丹羽五郎左衛門長秀、其勢八千。

青塚の城には、森武藏守長一、其勢三千餘。

内窪山の城には、蜂谷出羽守、金森五郎八、其勢三千。

即水野惣兵衛忠重後和泉守、子息藤十郎勝成後日向寺、神原小平太康政後式部太輔、大須賀五郎左衛門康高、本多豊後守康孝、岡部弥二郎長盛後内膳をめして、丹羽勘助氏次を案内として、敵のあとをふんで、一戦をいたすへしと、仰ふくめられ、三千餘騎にて打立、篠木柏井へかゝり、小幡の城へ入て敵の体をきくと、け、秀次の後備へくひつき合戦可有と評定を極む。此時小幡のすむ豊後守康重、穴山衆、穂坂常陸等也。合戦の時、康重は、小平太五郎左衛門にさしかゝり出す。かくて孫

七郎三好、其勢一万、堀が勢五千、池田父子、三州に発向すへきよし、秀吉より増田仁右衛門を以て下知あり。秀吉も樂田の本陣にゐて、二重堀より青塚まで、馬ふせきの築地をつかせ、用心きひしく、六日の夜半比より、池田父子、森、堀、秀次、篠井、柏井、兩郷尺地もあまさず、四方二里か間に陣取八日の未明に打立よし、篠木より小牧山に至り、注進申上る者あれば、神原井伊丹羽等そのほか小姓馬廻母衣の者、使番等にふれ仰て、旗をしほりさし物をかくし、ひそかに小牧山を忍び出よとあつて、すてに八日の夜半の比、常真も家康公も、小牧を御立有、豊後守に内々仰付られ、遠間の歩士カキ十人斗、龍泉寺表へ成の刻はかり出し、おかれしか立歸、亥の刻より南をさして討通り候旨次第く、に告来れば、急ぎ給ふ処に、こゝに流る、川あり、いかにとはせ給ふ。勝川と申上る。名詮好と御心よけに打立給ふ。御物の具なされける中、石黒善九郎御湯漬を上る。則甲を御めし今甲塚とて、勝川に有、それより猪、越原に御かゝり、辰巳の山へ着陣ありて、夜の明るをぞ待給ふ、面白うにも成ければ、長久手へとす、ませ給ふ処に、家康公御先手は井伊万千代後兵衛、直政、武者奉行には内藤、次郎左衛門正成、高木主水、清秀元水野信元、郎等也、御旗奉行は、寛勘右衛門、渡辺半十郎、則綱とそきこゑし、凡三千餘騎。信雄も馬廻三十騎斗にて出たる。小幡原へ出、敵の跡を追てうたせ給ふか、小牧のるすぬには、酒井左衛門、石川伯耆、同長門守康通、本多平八郎忠勝に、信雄の勢をくはへて置給ふ。明れば凡日の早旦に、勝入武藏守、岩崎の城をせめ、其比丹羽勘介は小牧山にありて、弟の二郎三郎氏重を籠置処に、勝入武藏守、岩崎への道筋令放火、由地下人とも聞及て岩崎へこそりて、城を堅む。池田、森、軍神血祭にせよと着とひとしく、取巻て、池田が先手伊

木清兵衛二千余片桐半石衛門二千平せめに乘入廻に城内より大手へ突て出防戦ふ。就中鉄形打たる甲を猪首に着なし、大身の鎧を持、一きは先に進む武者あり、池田紀伊守が内太湯寺左平治後放野新九郎と名乗て突合しか、終に猪頭の甲は討死すかくしてそこを打破られ引入處に、次郎三郎手鎧ひつさけ、大手の門を二三度つき出しけれとも、多勢に押られて數ヶ所手を負、土肥の七郎右衛門に討れにけり。雜兵共三百余討とりければ、即時に城は落たりける。此時久太郎は森池田よりも廿町ばかり跡にひかへて陣を押す。秀次は三十町斗も跡、猪の越山の内に陣取り、かてをつかひ、稲葉村の上の山を引こさんとする處に、九日のまた明やらぬしの、めに横雲たなひくひまよりみれば、大須賀、榊原、水野、本田、豊後、岡部、丹羽、斯介、氏次等三千余騎、うしろ口より鉄炮少々放か伏ときを依て平に馬を入、小荷駄を切崩て進みければ、おもひもよらぬ事てはあり、なしかは仰天せざるへき、秀次の人数しとろになつて敗北す。秀次も馬にはなれ途方にくれて見へけるか、可児才藏といふ者眼前を乗とおりければ、馬をかせと申されけるに、才藏打笑て、雨降の唐笠候、只今引かへし勝負を仕る条成ましきに候といひすて、こせ退けれしかれば世治て後、秀次ににくまれしは、孤獨の牢人に成けれとも、福島正則よひ出て扶助せしとせきこへし。秀次の体を見て、木下勘解由馬者走來つて、我乘たりける馬をひきよせ、秀次のせ、我身はかち立になつて戦ひけるか、楯物をぬいて地にゆり立、其場をさらて討死す。青山の六郎重次といふ者と、しはしかほとは突合けるか、其後組討になつて、勘解由は青山にうたれてにけり。木下周防守も、一足もひかずこにて討死したりける。水野藤十郎、鮎江庄右衛門等

を初として、早利雄の兵とも、分捕高名して追立、攻ければ、二万餘きのせり、四面にさばけて、討もらされたる者と、武具馬具なんと取おとし、赤裸のふせいで、四角八方へせにけちりける、見くるしかりけるありさま也。秀次も辛き命りきて、這々美濃地をさして逃行けり。中にも、吉田修理斗、さしもの以下もおとさす、刺首一つとつて樂田にかへる。

或書に辰之下刻、秀次の先手岡本秀三郎、村善右衛門、白江権太夫これを防、平野権平後遠は秀次の馬廻りなりしか、秀次情に懇意に付、見廻として樂田より来りしか、鎧提け一防ふせいて、はたもとさして退ける。かくて木下助左衛門を始岡本も徳富も討死す云々。

扱又池田森堀等は、今朝丹羽三郎が権籠し岩崎の城をせめとり、首実檢しける處に、跡に合戦ありと覺て、鉄炮一立なつて、つゝ音なくなりければ、不審をなして有ける處へ、田中久兵衛秀次先手後号筑後守、只一騎走來り、跡に合戦有、いそぎ勢を話へしといひければ、久太郎、其方は何としてかは参りしととへは、先手へ参といひすて、馬をはやめて打通りぬ。堀おもふやう、跡は敗軍とみへたり、久兵衛旗本にて扈性の頭なれば、使もつかひにこそよれ、かやうの使には、使番か若き者こそ参るへきに、物頭の来る事、一定しゆつは、にけたるにこそありめと、悪口すれとも、田中さらには、こととはもなくしてかけ過る。左右の者ともこれを見て、堀は推察の上手がな、田中は使の下手がなとて、め引はな引、わらひしなり。さらは手介せよとて、三手に分て、立もなをさぬには、や大須賀、水野、榊原等勝ほこつて、秀次の勢を追立て、堀が備に行當り、待かけたる陣の堅きを見て、追と、まつてかゝりも不來、引もせず、しはらくひかえて、勢を崩ゆる所を、堀承おつとりか、れと下知すれば、かの荒手にかけたてられ、まはらかけにおひ見たれたる勢のくせとして、たま

リもあへず引たつて、一里斗か内にて二百八十餘うたれにけり。池田父子同紀伊守弟古新後等三郎、森武藏守も、久太郎に推つゝ、いて、何くまでもおひくる處に、長久手の上の富士山へ、家康公三千餘騎にて、押きたり給小。給小は、岩崎の北に山あり、池田、森、堀谷山を前にあて陣を構へ、未だ十圍の外には、まどうなに、敵を見て、大きに驚て、久太郎か勢ひざりなりに見くつれするところを、加藤喜左衛門、成頼小吉、小栗又市、権太小三郎、大久保次右衛門忠佐等追かけて高名す。先軍くつれける時、神原と藤十郎は岡部とうちつれ、岩作へかゝりて御旗本へかけつけ、家康公の御前に参りけるに、源君よにうれしけにて、康政が手を取てのたまひけるは、先手打負ぬて聞て、汝も討れぬらんとおほつかなくおもふ處に、ことゆへなくこれまで采りぬることよと、御涙をなかせ給ひ、よろこぶたまふせ、かたしけなき。康政うけたまはり、ひつかへし、すてに討死せんと仕候處に、御旗の間ちかきを見奉り、岡部と、もに是まで参りて候惣兵衛、五郎左衛門等は、猪子石を引退き候世と申上る。去ほとに、池田と森は、間二町程を隔て、富士山の東に備を立なをさんとすれとも、立もそろはず、下知をもきかず、只一揆勢のことくなり。堀か人数もみたれ散て、漸五六百なれば、昌入武藏守と一手になりて黙んと、富士山東南の方へ逃入けり。家康公御陣所よりにくる体と見へければ、敵は崩けるせと仰られければ、若者とも乗出し、衝中にも高力与次郎、三宅弥次兵衛なんと高名をとく。かゝりける處に、渡辺半藏は馬上にて来る敵をばせよせて、つかんとするに、乘ちらし逃ければ、よし／＼臆病なる敵は討ても益なしと、次にきたるを突むとかゝれば、水野惣兵衛が旗さしと申す、旗さしならば馬上にはあらしと申せば、はなれ馬を取て乗申候、旗の紋を御覽有へ

しと申に、つきて見れば、惣兵衛が旗なるゆへ打置て通る處に、内藤高木これを見て、いかいと問、先手敗軍によつて敵これを追討にすしかれば、人数みたれちつて、てきのはたもとすくなし、まとは、大軍にてかなふへしともおほへず、散兵あつめさる中に、御旗本を以て御合戦あらは、必定御勝とこそ存すれば、御前に参と申す、御旗本は、ほとへたゝりぬ、肝要の時なれば、御先にて下知あるへし。其旨をば申上へきよし、兩人申けるによつて、本の場へ走歸て敵を防ぐ。かくて渡辺半十郎、内藤次郎四左衛門に申けるは、御旗の立ところ、長久手の内、富士山可然と申せば、内藤間て富士山不可然といひすて、乗まはし石黒善九郎をつれて、富士山の上のほり、見めくる所におもひしよりは、よきたて、乗かへし、半十郎をよひて、最前の見立一段しかるへし、弥御旗立へしと下知す。扱仰によつて、内藤高木、斥候として、乗出し、両手先手へのりまはし、敵の体を見きり、御合戦の時刻宜候と申せば、鳥のはさまの嶺へうつり給ふ。井伊直政は、旗本の先手なれば、鉄炮の者に打交つて、昌入か手へかゝつて、数百挺の鉄炮をうちかくる。昌入か先手にこれに辟易して進み得ざる處に、池田いらつて下知をなせば、昌入か勢御はたもとへむかつて、谷を押し、味方の御先手も押下す。おし上る勢つよかりければ、御先手も少色めくところに、此時御承をとらせ給へは、惣方おりしきこたへけるに、平松金次郎と名乗つて、真中に飛出、鎧を入れは鳥井金次郎も、つゝいて、鎧を入たりけるに、武藏守か手より五六騎すゝみ出て、鎧を合す。松平助十郎は、鎧に引添て弓を射る。家康公承を上げてかゝれ、や者ともと下知したまへは、直政に指添、貳十人組の鉄炮頭に、渡辺半藏守綱、大久保次右衛門忠佐、加藤喜左衛門、水野太郎作、渡辺弥

之介、森川金右衛門、神谷弥五助、神原小兵衛、高木九助、嶋田次兵衛等已上十人、鉄炮貳百挺、御右の方へ進んで、きひしく打かけ、鳥井鶴介、成瀬新太郎、布施孫兵衛、坂部又十郎、大久保新十郎、忠隣等、か手の者、鳥辺金九郎等、さしつめ引つめ、矢たねをおします射かくれば、武藏守は、家康公右の方、勢うすきに、ついでかゝれと下知して、山のなかには、敵を待うけ、鉄炮を放て、山の下或本長久手の辰巳なる山に白しなみの引つて、ほうの者五六百人の敵をうたんと、筒先をおし下れば、先にすゝむ、味方危きゆへ、敵の鉄炮大かたは、こし矢なり、後陣はさながら放ちえず、前すゝまねは、後陣もおさす、手をいたつらにして、打なかめたる斗世。山下よりすゝみかゝる、味方の勢は、しころをかたふけ、山上の敵は、あなかちにみねとも、手まへかたまりければ、むた矢もなし。武藏守のらちて下知しけるが、其日の出立には、仰花威のようひ甲イ、甲に五輪イ、五輪のたて物なり。立物の際、盾間を鉢付の上へうちぬかれて、馬より真さかさまに落つ。武藏か下部はしりよつて、死骸をかたに引かけ、退所を、本多八藏追かけて、うたんとせしかは、骸をすてゝ、逃のひけり。かねて首とるましきよし、定られければ、八藏やかたて鼻をかき、懐中に入、指イ、加かをぬきてしるしとす。

井伊直政、足輕頭、熊井戸半右衛門といふもの、足輕柏原与兵衛、武藏守を鉄炮にてうちおとし、三度名乗て証とすと云々。

水野左近家記には、太郎作山きはよりうたせたる鉄炮にあたると云々。前此圖にあり。井伊か手は又、覚によつて時の名を得し此物かたり長し。

が、りしかは、清須の細工人、信雄の供して陣中に有けるか、かの指加を見て、我去年拵てまきれなし、武藏守さすかなりと申ければ、八藏立歸てかの首を尋けるに、似合敷首の有ければ、これこそ武藏か首よとおもひ、かの首取てさすかに取添差上げるに、信雄方につね、武藏を見知たる事なれば、森か首にはあらざりけりとせわらひける。八藏面目なく、やおもひけん、同年六月、蟹江の城攻に、はれなる討死をしたりけり。かくて、森か討死に仰天して、かれか手勢三千餘きこと、く敗軍す。関金平、永井善左衛門、久永源兵衛、永見新右衛門、鶴殿兵衛、大橋左馬介、寛牛之助、同平十郎、今村九郎兵衛かうし、白のかたひらを着等追かけて高名す。味方勝に乗て、山の尾崎を取て、押廻せは、昌入父子も、左の合戦色めくを見て、右手を強せよと、さいを振て、声もかれ、身もとくるはかり、怒りけれども、井伊直政か鉄炮の者、引しこつて打ければ、せんかたもなきところに、金の扇の目を出したる馬しるし、峯わきより朝日のごとくおし上たり。扱は徳川殿よといふほとこそあれ、我さきにと見くつれして、勝入か旗本、うすくせ成たりける。秋田賀兵衛、梶村兵七郎、片桐与三郎、竹村小平太など少へたゝつて戦けるか、このよしを見て、勝入か側に來つて、同枕に討死す。昌入も今度の合戦討負なれば、必討死せんと、心かけければ、母衣の者三十騎はかりにてひか之たる。其中に黒糸おとしの鎧に、頭なりの甲を着て、指物もさゝぬ武者、十文字を取なをし、二三間ほど走り出ける、安藤彦兵衛、直政向ふてきなれば、つくとところに、永井傳八直勝後右近、黒母衣をかけたかせきけるか、つと出て引組て頸をかんとせし時、大將と名乗りけるにこそ、昌入とは知りたりけれ。昌入かさしたりける簾の雪といふ刀は、傳八ふんとりにして持しとかや。かくて直政は、武藏かそなへを追崩し、池田か手へ横合にかゝり、黒母衣の者と太刀打しけるかはせならへて、組合處に、安藤彦兵衛行かゝりて、おもひけるは、仕廻いかにと心許なく助けなは



やと存じつれとも、つね／＼弓矢におぬて、吟味つよき者なれば、たすけは腹立すへし、もしよはめにも見へはと、鎧ひきそはめ待かけしに、直政なんなく首をとれば、氣つかひもなく打通ぬ。敵方關十郎右衛門も討死せしかは、味方には、水野藤十郎、渡辺半藏、成瀬小吉、蜂谷七兵衛等（つれも乗入高名す。甲州軍人初鹿野傳右衛門。御旗本の一番高名とす。米沢清右衛門は、敵陣にかけ入て、敵一人馬上より突て落す處に、味方走寄て、是を切相討のよし申ければ、清右衛門其首をは汝にとらするそといひすて、馳通り、よき敵を突落し終には首を取たりける。半藏が手の着大岡傳藏高名して、郎等山内喜左衛門も首を取、渡辺多くのてきをつきふせければ、鎧のさきのおれたるを、惣助にわたす。惣助其鎧をもつて、敵をつく處に、とをうされはてきこれをうはひ取て逃たりしに、家康公御馬廻武藤彈右衛門を見かけて、鎧をとりにかへしたみ給さなくは、御ひけたるへしと申せば、彈右衛門追懸て、射たふし高名して、鎧をとりに彼者に渡す。かゝりしほとに、秀兵衛はよく進て、先を行きあたりをきつと見廻す處に、勝入が長子紀伊守敗軍にひかれて退けるか、父はととへは跡に残り給ふと聞て、心もとなしと、のりかへす處を道わきより、つゝと出て、馬よりとうと突おとして首を取。紀伊守が出立、朱具足を着、栗毛の馬にそのつたりけるさし物は、さゝす、こしに白熊イ初をさす、いかさま只人にあらしと、人に尋てこれを知。二男古新も、昌入をたつねけるに、先へ御のき候と申けるゆへ、すくに退。三男備中は最初に手を負て早く退。勝入、俵番の母衣の者とも、一人も不殘付したみ、一所で討死したりけり。かれらは、水野藤十郎、勝成、小栗又市、井伊直政、蜂谷七兵衛、榎田小三郎、大野三郎兵衛、康景なんとうつとりけり。大久保新十郎、忠隣後相模守

は、旗本の勢をあつかかり、本陣にありけるか、軍はしまりければ、かけ出、昌入、人数百斗にて退ける。夙々追懸けるに、土肥権右衛門とつてかへし、新十郎を馬より突落し、おつれはいそき其馬に乗、諸鎧を合てにけのひたり。新十郎は深田えつきおとされければ、甲のまつかうをつかれけるゆへ、手も負す、其身歩立になりければ、追に不及、ひとり腹を立ながら、それより敵陣に入て高名す。後に相模守牧野助右衛門に此事をかたりければ、土肥権右衛門にて候とて、右の鞍をもらひかへして、おくりにけり。その鞍は黒漆に、ぬのこを蒔繪にしたる作なりけり。叔父信雄の手にて、林大学首二討取、村瀬左馬、長谷川孫八、牧野傳藏など功名す。黒田にありける沢井左衛門尉は、御見廻として、長久手御陣場に参りけるに、家康公大事の境目の城を明て、いかなれば参つると仰られければ、左衛門黒田の城といつは、四方沼にて鉄炮十挺候へは、堅固に持かため候、譜代の者共によく／＼申付て参候、御合戦今度御頁になり候へは、たとへ黒田の城持かためても、專なく候、御一戦全り心元なきに、馳参候旨申上ければ、御感悦不斜。角て家康公は三万余騎を追崩し、一万餘の敵を討、首実檢したまふ處に、内藤四郎左衛門、高木主水、佐申けるは、秀吉早き人也、必よせ来るへし、平場と申諸勢は草臥つ、まづ小幡の城へ入せたまへと申ければ、此儀、尤可然とて、急小幡に入せ給ふ所に、あんのこづく、秀吉樂田にて、味方敗軍を聞て、其勢三万余引卒し、龍泉寺山へ押出す。小幡山のるする酒井石川本多平八石川長門守、康道一通を始、信雄衆こもり居ける處、秀吉出陣を聞て、本多平八郎石川長門守を相伴、若先にて合戦始まらば、横合にかかるへしと、纔イ三に五百騎斗にて、春日井原をすぢかひに、秀吉の右の方を、小幡へこそは押行けれ。秀

吉たれなるらんと尋らるゝに、本多平八と申す。大きに感して、けにも聞及し程の剛の者とせ
ほめられける。天下一統の世となりて後、秀吉朝鮮征伐として、出陣のとき、智名勇功の諸大名
多く属しける中にも、陪臣にて有ける此中、秀少輔を召して、今度の首途に鎧をきすへきよしの
たまひけり、外には又武士なく見へし、平八かふるまひほめぬ者こそなかりけれ。然れば秀
吉龍泉寺にて後陣の勢を待て、是非合戦をとくへしと、小幡の城に先足輕をかけて、城の様を窺
ける處、諸勢一圓にすゝまねは、軍は明日の義とてさしをかれぬ。家康公此よしを御覽して、諸
勢に仰けるは、秀吉大軍なれば、城を取巻んとおもふ也、此小城にこもり居て、利あるへからされ
は、勢を張出し、てき寄せ來らば合戦をすへしと、本多平八に鉄炮の衆を添て、城外に押出さる。
平八鉄炮百挺三役に立て、城外に置、忠勝手勢廿騎を引具し、敵陣へ馬足輕をかけ、龍泉寺の山下
までおしつけ、鉄炮をはなしかけ、敵したひきたらば、鉄炮うち立へしと、足輕に下知して、馬足輕
をかけあしらへとも、敵陣を出る者あへて一人もなし、合戦をもたさる色合慥かに見切て、平八
すみやかに城中さして引あけけり。此かり合たとて、いはんかたなけれは、又あるへしとも
おもはれず。此時長井与次郎平八に付て参りけるに、いかゝはしたりけん、馬かけ出して、落馬
すれば、馬ははるかにかけ拂ふ。かゝる所を、平八やかに乗付、やりの石突を以て、手繩をしつか
と突とめ、与次郎をこそ、のせにけれ。然る所に、内藤弥次右衛門は、るかに見れば、龍泉寺山より
ふもとの川へおり下つて、百人斗水汲所を、内藤家康公の御前に参て申けるは、山のすそに水あり、
敵これを汲んと、二三十騎ひかえたり、後陣もつかす候へは、我等向つてかけちらし候はん

と申、御前を立。子息喜一郎後左馬助を先として、廿騎ばかり、敵陣にかけ入れければ、敵こらへす、逃
けちる處を、追かけ、三騎討取る、喜一郎其時十六歳、首とつて歸ける。秀吉の足輕頭此体を
見て、敵城中より打て出、味方味方かたく候へは、いそぎ御勢をよせられ候へしと告げれとも、秀吉
曰もすてに暮に及び、その上味方進まず、明日城をせむへしと有て取合なし。家康公、とかく此
小城にこもりては、利有ましとて、諸勢を卒し、小牧へ還らせ給けり。秀吉其夜は、田中に宿し、人
々をあつめて申させけるは、面將この小城にこもりけるこそ、天のなるところなれ、明日即時に
攻亡すへしと、勇まれけれとも、今日の敗軍にこりて、坐中の面々辞をも出さず、かゝる所に、先手
より、小牧へ引とり給ふよし告來りければ、秀吉手を打て、扱々花も実もある大將かなと、感しつゝ、
さらは引かへせとて、堀尾茂助忠晴後帯刀に、しんかりをさせて、秀吉本陣へ引返す。何者のし
わさやらん、はやく在所に火をかけたりによつて、後陣の勢まはらに、成て引處に、篠木柏木の
郷人起て、小荷駄にあたり、おくれしものを討とめけるととき、こゑし。扱小牧におかれし左衛
門尉伯耆に向て申けるは、秀吉龍泉寺山へ出られし跡に、二重堀を押ゆふり、陣屋をやき拂ふほ
とならば、必敵敗すへしと申ければ、伯耆あへて同心せず、今敵の残りし勢一万に餘れり、此小勢
を以て、破らんことかたかるへし、若仕損しなは、かへつて敵に氣をつけ、味方敗軍のもとひなる
へし、其上岩崎小松寺より後詰のせひ來りなは、合戦の勝負はかりかたし、とかく小牧を大事に、
おほゆれば、丈夫にもちてこそとて、かつて進まず、左衛門は此機にのりて、陣取破らん事堂に有、
いと容易がるへきものをとて、無興タマク足々にて、腹立してうちみけり。二重堀にありける上方

勢には、日根野備中、同弥二右衛門、木村常陸介、長谷川藤九郎、神子田半左衛門、加藤遠江守、細川越中守忠興等也。而將は、四月九日之晚、小幡を御出、比良にかゝり、小牧へ入せ給ひ、諸卒梅酸の湯を補す、未空曰一尋も有比なり。敵も觀音堂に火をかけて退き、樂田にいたりぬ。都合十二万余騎を卒して、小松寺へ本陣を移し、戰陣可有催し也。今度も堀尾忠晴殿を承て、篠木の内大草村に有時刻を待所に、秀吉夜をこめて打出、勢をくり引にひき取といへとも、夏の夜といひ、多勢なれば、辰の刻にやう／＼軍を引拂、野へ上れば、堀尾も引むとせし處には、はや一揆雲霞のごとくおこりて、忠晴か宿陣を、いく重ともなく打かこむて、弓鉄炮を射入打入れとも、戎介少もひるます、面の方をつよく張出して、鉄炮を放す、一揆原西の方へはせあつまつて、今や切て出ると相待、せき合て騒動する處を門をひらき、鉄炮を以てうち立しかは、左右へよつてためらふ中に、門のうちに入東に向つて拔出、うへなる山へ引上、北の方へとおもむきけり。一揆ともたしぬかれけりといふ声して、山の尾にき尾さきよりしたひかゝれば、堀尾かやうの時わき道をのくへからすと下知して、郎等松田左近右衛門、吉川新兵衛、并河平右衛門、中西勝右衛門、保木善右衛門、小野弥一、廣瀬專之介、一瀬仁右衛門など歸し合て、追拂やう／＼にして引退く。同十四日、秀吉羽黒古城普請あり、堀尾茂助忠晴、山内猪右衛門、伊藤掃部助を入置、其他小牧山に對して、向城十餘ヶ所相立、濃州さして打納むせし處に、小牧山より家康公信雄の面勢をつかはし、二重堀上方勢の付城を、一もみ捫んと備をたつる所に、二重堀もつてのほかにさはきたつて、小松寺に進す。秀吉折ふし、圍碁のなかはなりしか、これをきいて、敵二重堀をやぶりなば、後詰可有とて、

あへてさはけるけしきもなし。小牧にても、而將へ人々申上げるは、二重堀色めき、すてに押やふりやすく見へ候取かけ申可よし、再三うかゝふ處に、家康公仰けるは、小松寺の軍勢、二重堀へ後詰あらは押かくへし、さもなくは、合戦無用たるへきよし仰られける中に、はや日中に及へば、彼勢小松寺へ引上る。小牧にて小松寺へ取かけは、即時に打かつへき軍なりしをとて、みなくいさみすゝめとも、家康公の御心には、人々すゝめ申といへとも、小松寺よりの勢をひきつ、仗有無の合戦あるへし、たとへ二重堀をやふるといふとも、其つかれに小松寺より勢を出し來り、一戦をとくるにおゐては、危しとの御慮なり。案のごとく、秀吉も其心はへなりしよし、世治て後筑紫の名護屋にて、御雜話ありけるに、森右近等承て感入す。とにつけかくにつけて、上方勢は、殊の外に臆して、色々敵の美をかせへて風説する所から、秀吉齋沼に舟橋をかくへきよしなりしか、木村常陸これほと諸軍臆病なる處に、逃道不可然と申す。同五日朔日、秀吉小牧を可責とて、前日諸軍にふれ廻し、翌日諸勢可攻兩度仕る處に、俄に引かへ美濃國へ、人数を打入る間、跡をは二重ほりの者とも殿りせよとて、即諸勢引とりけり。もしや小牧よりつき添事もありとて、秀吉自身青塚にのほりて、陣中を見わたしてひかへらる。若又二重堀に有之、加藤、長谷川、木村、細川、日根野、神子田等難儀に及事ありは入替へしとて、黒田勘兵衛後勘解由、明石与四郎後左近、両人を殘さる。いづれも引取に及んで、小牧において、而將御覽有しに、信雄人数を出し、くひとむへしとあれば、家康公、大軍のひきとるをは、さうなう付さるものなり、人数出す事必す無用たるへし、とおほせられけり。此御下知なかりし以前、信雄の衆廿騎斗、いざ逃ゆく敵のありさま見

んとて敵陣に馬をはやめて近づく処に、細川か手の者沢村才八、朱の日笠に、白箱を以て天道と書たる指物して、ふみとまつて防きしか、信雄の足輕大將、大槻助右衛門、紙子羽織にて、眞先かけて鎧を合す。沢村これをつき伏れば、山本又三首を取。又信雄の手大原文藏一兵黒き吹ぬきを出しにし、母衣をかけ歩立になつておつかけしに、亦細川か家人沢村才八後大守とつてかへし、大原に目をかけて、はせよるに、つゝいて敵の同勢甚たかへせは文藏もすゝむに不及、さありとて、敵にうしろをも見すましとやおもひけん、鎧を以て打拂、後さまにもさりて、土居陰に若黨二人馬ひつ立て有けるに、うちつて引返す。此ふり合家康公小牧よりはるかに御覽ありて、殊のほか、御感有、其以外てきもみかたも、ほめさるはなし。此時細川か手へ首六ツ討取、西川与助、大石清藏、園部太市一与、曰下部与助等衆人を出て勵けり。日根野か内にも弓削將監首一つ討取。信雄方小牧より慕ふに付、曰根野、神子田、木村三人の手崩立、中にも曰根野か手は、少くつれけれども、首一ツ取て早く静まり、木村も早く足を揃ふ。神子田は、日比の口にも似ず、跡をも見すして、くつれにけり。秀吉無興有ければ、神子田、人数を持さるゆへと申す。秀吉猶も腹立有て、其方初て仕むと罷出る時、侍十人はかりの身代ならずや、用にも可立と申故取立候處に、其後いつかたにて、いかほとの働して、さやうのことをは申にやと、甚いかつて改易せらる。其外秀吉穿儀有て、細川か手の者ととも、寝美あり。山本には、のしつけの刀をアタ得させ、西川は、鎧下の功名と稱して、熨斗付の脇指をたまはりけり。しかれば、秀吉五月朔日小牧をひきて、同三日濃州大羅に陣とり、弥八かこもりし、かゝ野井の城を攻めと、同十日不破原六が城、竹か鼻の要害を

水責にせめ落いて、大垣へと志さし、馬を打入たまひけり。

一長久手辺。道間もり

小牧山。直高廿八間。ふもとにて、東西へ三百八間。南北へイハ貳百四十間。

小牧山。本城。

東にて。南北へ十三間半。西にて南北へ十九間四尺。

南にて。東西へ十三間。北にて。東西へ十九間貳尺

但古は殿守有之よし、今は本城の少南に愛宕の宮あり。此外曲輪數おほく、土居堀のかたち今にたしかに見ゆ。

南に大手口あり此道坂也。本城まで五曲り。右の外口三ヶ所。東方の口、むかしは馬出有之由、所の者申す。今は木津用水の川筋になる東城の南西之間、山の中分に井有、車井戸と申傳。小牧山より蟹清水へ九町巳の方。

蟹清水。蟹清水の北への続に、屋敷形有、東西四十六間、南北六十一間、北西に堀巾九尺かき上土居高七尺、東は今小牧岩也。町裏にて、土居形所々に有。南も土居形同前。山下、北、西方昔は沼、今は田、南東、昔は野、今は畑

外山村。同所より外山村若造二十八町十二間、辰方若形東西へ三十七間、南北へ三間、四方の土居高一間土下、若の東西むかしは野のよし

宇多津若。今は畑北は昔は沼、南は昔より田、同所より宇多津まで二十八町十二間成の方、此所昔は町ある由、今は畑右蟹清水、外山には、小牧御陣取のとき、家康公信雄より人数を入置給ふよし申傳。右に宇多

津にも、人数を置給ふよし。

何も小牧也

- 一同所より犬山へ二里廿五町四十二間子の方少丑より也。
- 一同所より樂田村砦迄一里十丁四十八間五の方砦。秀吉本陣。東西三十八間、南北三十四間形四し、土居の高、南にて三間二尺、東面間半北三間半、面三間五尺、堀中南にて二十三間、東土間北二十間、面十六間、南北に二口有砦のせと、東南は田、面は畑、樂田の本村西にちかし、北は全前の枝郷。
- 一同所より羽黒山へ一里廿一町四十四間子丑の間にあたる、但丑に近し。
- 此所、最前森武藏守陣取、こゝにて合戦にまけ、自身の居城濃州金山へ引取よし、当所より兼山迄五里廿五町。

- 一同所より二重堀村迄十七町卯の方此砦細川越中守日根野備中守同弥右衛門陣取のよし、東西へ五十五間、南北へ四十間、土居高さ五尺、砦の外四方むかしより野の中也。
- 但今南一方は畠に成る。

一同所より小松寺山砦まで廿二丁五十間、五寅の間にあたる。

- 此砦、再羽五郎左衛門長重陣取のよし、東西に二所、東の砦、山の直高廿一間、山上平東西へ十間、南北へ十間、但東西には山つゝき、南山下は田也、西之砦、山直高廿二間、山上平東西へ八間、南北へ十間、但東西北は山つゝき、南山下は田也。
- 一同所より内久保村砦山まで一里五十二丁五間五の方。寅より也。

此砦蜂屋出羽守金森五郎八陣取のよし、山の直高十九間、山上平東西へ九間、南北へ十三間、南東は山つゝき、山下西北は田。

- 一同所より久保村砦山迄廿二丁二間、方角同前山の直高十五間、山上平東西へ二十三間、南北は村也。
- 一同所より岩崎山へ十八丁、イ三のなまし五の方此山稲葉伊与守陣所也。山の直高十一間、半禁にて東西へ三丁、南北へ一丁四十六間。
- 一同所より青塚へ廿四丁五十七間子の方少し丑寄也。

此塚森、武藏守陣所、塚山の直高六間上の平東西へ十一間、南北へ十一間、塚の根にて南北へ六丁、世間東西へ廿九間、北むかしは沼有今は田也。

此所、龍崎三項補遺 第一卷ニアリ宇多津道筋勝川迄同所より二里十一丁四十三間。

- 一同所より豊場村如意村へかゝり勝川迄二里廿一丁四十九間。

長久手御合戦の砌、家康公此道筋を勝川へ御出。宇多津岡山兩道はみな敵陣へ見へ、此道筋は敵地へ遠く、地形早く敵陣へ見へ不申也。

- 一同所より小幡村へ三里五丁廿五間。
- 一同所より岩倉へ一里。申の方
- 一同所より清須へ三里。未の方
- 一樂田より龍泉寺山へ三里十九丁。同所小牧山より二里八丁。樂田より野田へ三里十八丁。

小牧山より二里九丁。樂田より志段見へ三里廿三丁。小牧山より三里廿五丁。

一野田村より稲葉村迄一里廿丁。志段見村より稲葉迄一里十丁。

小幡より稲葉迄一里十九丁五十間。白山山林山高十間東西へ七丁四十間。

勝川より小幡迄廿九丁四十一間。龍泉寺より小幡古城へ十八丁。

小幡古城 平如東西へ三十七間南北へ廿八間 繪圖別在。

龍泉寺より岩作村迄一里廿八丁十間。猪子石より小幡迄十六丁五十間。

小幡より岩作迄一里廿六丁四十間。大森より岩作迄一里五丁四十間。

勝川よりかなれ川迄一里廿三丁。かなれ川より長久手迄廿丁廿間。

長久手より岩作迄廿三丁廿間。岩作より北金山廿三丁廿間。

一岩作村の北色金山。直高十一間。岩作枝郷多く出来。今は色金の禁込民家有之といへとも、

本村は色金山より四五丁も間有。

御床机石。本村より色金山は丑方。家康公御腰かけられ候由申傳る石之有、里人御床机石と号

す。一色金山より富士が根山へ十一丁未申の方也。

同所より佛が根。午未の間末に近し。本書に富士山と出。

富士ヶ根より佛が根へ三丁巳の方にあたり。

長久手村は富士ヶ根山より二丁十間四方。

家康公小牧より勝川へ御出、勝川御鑑めされ、かなれ川辺に御越候時分、味方の御先手迫立ら

れ来しに、御遇被成候へ共、それに御かまひなく、御急、岩作之北色金山へ御上り、池田父子森武

藏守人数押来候を御覽有。それより富士が根の切通しを御通り、佛が根へ御上り、井伊兵部

少は御先手として、佛が根と申候峯より前山辺迄之山をなへて惣名佛ヶ根と申由里人の

一説なり。前山を御馬印立候處と申傳。森武藏守御陣の後を襲むと、南より西へまはるへ

きやうすを御覽被成御馬印を前山へ御移し被成候歟。

一富士ヶ根山より白山林は亥の方也。色金山よりは白山林は戌へあたる。

一富士ヶ根山。直高 十一間。佛ヶ根山直高六間。

一前山直高五間。井伊直政備山より池田昌入塚へ二町五十三間 卯の方なり。

一森武藏守塚より勝入塚迄三丁七間。

一勝入塚より庄九郎 純伊守塚 迄一丁四十二間。

一武藏守塚より庄九郎塚迄二丁廿五間。

一長久手より岩崎村 イ愛知郡 迄一里四丁

岩崎城屋敷直高七間東西へ八間南北へ六間此城長久手御合戦の刻は、信雄の臣丹羽勘介氏

次城のよし。

一長久手よりうぎうか原迄廿七丁四十四間うぎう原より岩崎へ十二丁 イ大間乙。長久手御合戦の時分

池田森等岩崎の城を乗取うぎうか原にて首実檢有之し由。

一岩崎より三州岡崎まで六里。

山崎城 愛智かまへの内東西八十五間南北百間四方二重堀なり岩崎の村より子の方。
 丹羽若狭築。それより四代目丹羽勘介氏次居城。

丹羽系 清和源氏 九本骨松扇紋也

公深 一色 次郎 範氏 直氏 右京亮 氏兼 右京亮 氏宗 勘次郎 氏明 丹羽平三郎 住尾州丹羽郡故号如右 氏時 次郎左衛門

氏盛 傳介 氏範 勘六 氏從 和泉守 氏員 新介 筑尾州本郷城住之 氏與 平左門居城同前 氏清 若狭守名跡岩道壽築尾州岩崎住之 永祿二年十月廿一日卒七十五才

氏識 右近大夫名者奥道休居城同前 尾州藤島奉仕家康公賜三州之尾色赤羽根家康公与信長和睦後氏誠居尾信長然トモ三州之領地如元永祿八年死六十九才

氏勝 右近大夫名者奥道休居城同前 尾州藤島奉仕家康公賜三州之尾色赤羽根家康公与信長和睦後氏誠居尾信長然トモ三州之領地如元永祿八年死六十九才
 氏次 勘次郎 天正五年屬信雄依勘氣五年屬家康公長久手戰比水野大須賀本多神原共与秀次氏于細山同六月雖江城棄入出丸二ヶ所被死後依家康公命亦仕信雄。信雄死後氏次依秀吉命一從秀次關ヶ原從家康公供奉。翌年三月十九日卒五十二才賜三州伊保一五石。

氏重 次郎三郎岩崎 計死三十四才 氏信 勘介少輔大坂陣与水野勝成同道明寺口 寛永十五年賜濃州岩村城二五石 氏貞 勘六郎

氏定 勘助少輔 母水野日向守勝成女 氏柁 勘助少輔 女子 加々瓜土住守事女 氏房 勘介 母水野忠善女

樂田城。丹羽郡

東西四十間南北五十間四方二重堀城樂田村寅卯の方 樂田より城跡先行程九十間。織田彈正左衛門城其後坂井右近居城。

此處天正十二年 小牧陣には秀吉陣取云々。小牧城。春日井。近年小牧にあつて馬市立之

小牧山城あり、四方三重堀山下より西の方惣かまへに堀有、山下より西東の方沼田。今は田と成る。

城は小牧の郷より西戌にあたり、小牧より山下迄百六十四間。信長取立爲居城、清須より此所に移らる云々。

小幡城。春日井。此村出生岡田助右衛門 同出生土肥周防 勝入に仕。東西百十間南北六十間二重ほり。北切岸小幡のむらより戌亥の方 小幡より古城まで百間。

大永年中、岡田七郎取立、其後織田孫三郎居城、之れより三代の城孫十郎を後号右衛門尉信次致。

小口城。丹羽郡

東西五十間南北五十八間二重堀。小口村より御方 織田和泉守居城其後与八郎。法名白倉 犬山と改城云々。比良城。春日井 大野本城。高九郎右衛門 京田備中守

東西廿八間南北四十間四方二重ほり。

佐々内藏介成政城也。

長久手。村の野叟申云。湿地を在々にて久手と申よし也。龍山の麓より北南へ長く、久手

なれば昔より申ふらし致。又久手は湫也。木曾路美濃の内に、大久手湫共書細秋湫トモ

かくの如し、秋は野沢なるへし字彙。

一長久手合戦旗奉行寛勘右衛門子助兵衛元龍之助と云。

一此陣にて秀吉小松寺山の若に居、小牧と対陣廿日斗の由。其後退陣の時、信雄かゝるへき敵か
と申さる。家康公可懸てきに非ず、大かた引取へきとの仰ぞ。ことし。秀吉退陣の序に加
賀野井の城を攻。加賀野井は中島の内也。此時より尾州のうちと云々。依然別に載之。

長久手合戦之比、家康公は瀧松御居城の節也云々。

常真長嶋城清須城信雄也。信雄と讀はあやまりなるへし。

伊勢國司の内三四年も信意にて、後に信雄とあらためらる。

又信意は具敷の嫡大腹の前を云と云々。秀吉は大坂。昌入は大垣。其節は犬山。紀伊守
新九郎 岐阜

長久手。家康公御利運の時三州へ被遣候

御書の写

今日九日午之刻

於岩崎之口及合戦

毛利庄藏、赤林也、御いそかしき折なれば、
御吟味までもなきにや。長谷川竹は、二重

池田紀伊守毛利庄藏

堀久太郎長谷川竹

其外大將介至人数

一万餘討取候則可遂

上洛候間本望可被

察候恐々謹言

卯月九日申刻 御判

平岩七之助殿

鳥居彦石衛門殿

長久手合戦繪圖別紙在并三河合戦之繪圖一卷

堀にめて討死せず。藤五郎事也。久太郎
討死にては無之といへとも、御書の刻いま
左異口口々なれば、先三州にて心元奈く可
有比なるゆへ諸平のす、むへきたために如
此あそはしけるにや。

古城

沓掛城。愛智

東西六十二間。南北廿二間。四方二重堀あり。一沓掛村より丑の方築田出羽守城云々。

其後織田越中守。一訖備後守信孝子
母は熱田商家加藤安又後に川口久助居城。松平記。永祿の比は、織田玄蕃在城し

て、岡崎へ出張、元康公に對し、度々足輕共せり合有之。御年譜。公重襲尾州沓掛の城、燒城下人家而歸矣。于時織田之兵來、救之、土井大炊利勝同腹、利勝は水野信元子、母信秀死後、信元愛而生、利勝并孫八妻、妙源尼等ヲ産。常滑監物妻、総心

荒子城。愛智。親音の事は別に書之。前田又左衛門利家取立築之。東西廿八間。南北廿八間、四方一重堀。城荒子の村の内。但成亥の方。利家子肥前守利長於此城生

立前田氏系譜訂正増補補遺卷一

前田。紋梅鉢。秀吉之時賜菊卜桐。某孫四郎某同。利昌。孫四郎女子有無、男子、依之、而國守人原田氏を養爲子嫁之。女子。松平安藝守光景室。

坂部城。英比城とも云。細利。母源頼房卿女。家光公養子。

久松氏及一色氏系譜訂正増補補遺卷一

道定。彈正左衛門尉阿古屋トモ。定則。新左工門。道勝。太郎兵工尉。守俊。勝城。

正勝。大膳大夫。定継。大膳左工門尉。定氏。左京進。詮定。一色三郎左工門尉。

一色の系圖。源紋引而筋。義兼。足利。義氏。足利典統。義氏。足利官内少。公深。一色祖。太夫法印。範氏。良。範光。修理太。

義持。將軍。義重。同。直明。一色宮内左京大夫。

黒田城。葉栗郡。東西六十五間。南北六十三間。東一重堀。西三重堀。城黒田村の内在。沢井左衛門尉居城。和天河内取立築云々。黒田の事。

太平記に新田義貞尾州黒田に陣取、尾張府にましますと云々。柳監物本領と云々。

黒田城。山内但馬守盛豊尾張上の織田家老尾州黒田城に居と云々。小田井城。春日井。一本小田と有。

東西廿間。南北五十二間。四方二重堀。下小田村西の方。下小田井より古城まで百六十間。織田大和守居城。織田太郎左衛門居。又織田又六城跡。小田井へ入口。左方高からぬ松一本有。其南に少の岡有。これ城の跡と云。田の中に見ゆ。又六墳所並。影。繪像松壽院に今在。

苅屋須賀。刈安賀也。城。中島毛受村に新八家老、茂井玄蕃屋敷跡有。東西四十三間。南北三十間。四方二重堀。茂井新八郎居。毛利伊守女子を以て合之。同長男田宮丸居城。河内守秀政妹新八郎室。寛永の比、まて苅安賀被居、围守憐愍を加へ玉ふ。これをか、りやすか殿と申、則毛利伊勢守武衛の女也。

凌井。蚊桐或菊或上羽蝶列安賀蝶ハ武衛紋也。

公綱 三永大綱言此綱近江国凌井郡高小谷庄領知
此時安嘉吉三永成年生三男三子是凌井祖也

凌井系譜訂正增補
補遺第一巻ニアリ

女子 秀忠公御基

一本政氏 三永中綱言
後北園御中、嘉吉比依勒勤左邊江比凌井部丁野村
被、後、佐々木京極宗近江一談ニアリ

重政 新三郎 後新左衛門 凌井祖也

政 新太郎 仕秀忠公山城井手近馬五百石地

政好 家綱公御進物番

政時 助右門 家光公仕近君

岩倉城。丹羽郡

東西五十八間南北九十四間二重堀。織田伊勢守信安數代城。

守山城。春日井。一本守山

東西廿二間南北廿八間四方一重堀。天文清康公尾州守山より其守松平内膳男也内通によつて

守山に陣玉ふ、織田彈正清須にありて戦とす。かゝる處に阿部弥七清康公を討奉る故軍
やみぬ、守山くつれと云ふこの事也。

津田孫十郎居城孫十郎は信長伯父備後守弟の由也、一本守山の主孫三郎信長伯父弘治元年十
一月廿六日の夜坂井孫八郎に殺られぬ。

信長記に委。孫三郎信光は孫十郎信次兄也、宗長記に大永六年三月廿七日、三州刈屋水野和
泉守近守が宿所より、尾張国守山松平典一信定館に行れ、歌の千句有之由云々。其後宗長の

旅行には、安城松平典一信定もとに一宿のよし也。安城に信定遷れりや、その比は、三州岡崎
松平次郎三郎信忠、同國深溝に松平大炊介忠定在城の由をしるせり。
守山に鶴の森とて有、頼政かゝる物にはあらざるへし。春の末行て、さかまほしき事あれ
ともいとまなき身のあたに過す也。

尾州小川水野も三州大給源二郎も松平内膳智と云々。土民の説あり、それは頼政が射たる
ぬえ、此所より奉帳ゆへあつて靈魂都に徘徊するよし也。

信光 親忠

長親 信忠 清康

内膳 藏人

右京 十郎三郎

品野城 春日井一本科野

東西廿間南北八間。但山城上品野村より辰巳の方松平内膳居城云々。

同處田村。

東西廿間。南北四十二間。四方一重堀。城上品野村より西成方川向。

上品野村より城まで川原を直にうつて廿間。

桑名の城と云は、上品野村惣名松平内膳家老永井民部居城。

古渡。愛智。

東西七十八間。南北五十六間。四方一重¹ほり。今橋町うら。大佛と郷の間、織田備後守信秀居城在茲。万松寺を菩提所とす。

後亦末森の城に在云々。

末森城。愛智

城末森より成亥村よりかまへの間五十間。

東西百間。南北八十間余。四方二重城。織田信秀城居。二男武藏守信行へ讓之。木崎長母寺の庫裏は此處の台所と申也。

上野城。春日井。

東西六十間。南北七十貳間。四方二重堀。城上野村の内。下方左近居城。

同處亦一ヶ所

東西廿間南北四十三間四方一重ほり。城上野村の巳午の方。小関源五右衛門居。

蟬江城。海東郡。

東西五十四間。南北五十間。大手口南に在、四方三重堀、佐久間駿河守居。

柳蟬江合戦城攻之事。イつたへきりてかく

天正十二年申六月の事なりしに、藤川左近將監一益は、去年まで北伊勢五郡を領して、長嶋城主の所に、柴田滅亡の後、は遊客と身となつて、江州南郡におゐて、わつか五千石を知行す。これに

よつて長嶋の城を、信雄ゆかて領せらる。かゝる所に、信雄秀吉緋槍に及しかば、勢州木造の城へ、藤川富田平右衛門後左近兩人をこめ置く。藤川おもかやう、蟹江の城を調略して、尾州に至て中入せし家康公をおひやかし見んとはかつて、其比蟹江の城主佐久間駿河元甚九郎勢州すかか(萱生)へ在番にまかり越て、留宅居には前田興十郎駿河母方の伯父也を差置イかり處に、一益興十郎方へ申あくりけるは、此節秀吉へ忠義有之におゐては、一かと思賜あるへき所なりと、ひせかに、かれをいためければ、即同心して、駿河守近習の士一人計て捨勢を秀吉に乞。秀吉悦て、藤川勢州神戸にありけるに、調し合來る十六日の夜渡海して入城有へしと約諾す。然間九鬼右馬允後大隅守に告しを、兩人勢都合三千、大舟にのりつれて出ける處に、藤川が勢まつ半分着岸して、六月十六日の朝入城し、柵逆茂本なんと下知せんとするに、沖なる船の相図として、大狼烟のため、にや有けん、はや酒家に入て放火せしかば、おもはす三十軒はかり焼出たり。そのおりふし、家康公は清須城におはしけるか、かの狼烟を御覽有て、不審におほしめさるゝ所に、注進しきりなりければ、井伊兵部御前より直にはせ向ふて、外一騎かけにはせ行。かくて信雄と一所に御馬を出され、蟹江の城におしよせ、先濱の手を御乗廻し、固く備へ入城の勢を防かせたまふ。かに江川汐ひきて、折しも遠浅なれば、藤川が大船入すして、小舟にのり川口にのり込、一益なんなく城内に入。武者船は大かたこきよせ、城へこもるといへとも、弓銃炮の供舟は、いまた川口に不入うち、御勢次第々にはせかさなつて、川口をとり切、てきの先ふねと供舟の間を押し、たて敵船三艘めのまへに乗取る。藤川九鬼等が者と、漸下市場大野辺より、打かゝらんとせし所を、

岡部弥二郎長盛を始常貞衆、山口修理等懸合、あけもためず、岡部が郎等劔持治右衛門、九鬼長兵衛大隅騁を生捕す。而將城を三重三重取巻、その夜に柵を付廻し、十九日には棲樓をあげ、城中を見おろし、弓鉄炮を射入、打すくめ、夜に入は、火矢を四方より射込て、ときのごゑをあげ、鉄炮を子の方よりつるへ、初て、亥の方にて打おさめ、息をもつかせず責ほこる。攻手には、大須賀五郎左衛門、井伊兵部、松平上野、酒井左衛門、石川伯耆、本多中書、其外信雄衆、鉄心勇剛の三河武者、甲州侍等呼吸の中にとりひしかんと、ひしめけは、城内矢たねも、玉くすりも、つきはて、人数もすくなければ、持たたく、外曲輪をすて、二の丸をかためんとは、おもへとも、そのまゝに、ひかは敵付入にせんことを思案し、神原が攻口かいもんし口は、谷崎忠右衛門、前田口は、日置五右衛門、物頭として討出せり、合處に家康公の御方松平善兵衛と鎧を合せ、水野藤十郎功名あり。此時内藤弥二右衛門、火矢を射かけて、大手の門を焼崩す。其外敵あまた射殺す、その紛に、滝川が人数二の丸へ、身とる時、谷崎忠右衛門、鉄炮にあたるといへとも、其場は無恙引取、一両日経て終にうせしとぞきこゑし。前田口にては、させるとり合もなく、城の成亥の方、大須賀が攻口のおさへ、滝川豊前忠往かいもんし口の、せり合を聞て、寄手より忠往が持口へあたりけれとも、城よりてきを、おひ拂堅固に持て後、引はらひて、豊前二の丸へ引ぬ。このとき、よせ手の三の丸へ押込、行束をつき攻。よつて、櫓柵樓をあげてもふたりけり。しかれば、はや城のやくらへ辞をかはし、旗のまねきをむすひ、違へ鎧を引合ほとにせ成にける。其程に、滝川一益は難儀に及んで、九鬼が方へ、ひそかにひひおくりて、船をこされ候へ、退きなんと内通せしかは、九鬼大船にて兼向て、蟹

江の沖より城へ通し合るほとに、そのつかひのゆきゝに、夏の夜あへなくあけければ、相四違ふて、專そなき。内々は夜の間に引退んとしけれとも、ねぬに明ぬる短夜の横雲つら／＼引わたせは、九鬼も今は兼もとさむと、船とりまはす処に、潮ひきければ、途にまよふ処を、間宮造酒丞小舟にのり追付、かの大船に熊手をもつて引よせ、すだれ橋をかまへ、うちかけをかけ、すてに兼とらんとせしか、鉄炮に当りて、そこにて矢にはに討死す。しかれば、九鬼もほう／＼まぬかれて大船をのりすて、小舟に移り、からうじてこそ引退けれ。かくて城には、いよ／＼無勢なりければ、織田有樂を以て、信長へ降参す。常貞よりも家康公へ色々に申されけるにつき、家康公御このみには、前田叛逆の者なれば切て出し、藤川は信雄へ對し、弓を引ましき旨、誓紙つかまつるへき由仰ければ、滝川難儀なれとも、さすか傘のおしさにや、あひなく、典十郎を切て出し、其身起請文を仕つて申の七日二日に、城を明け、伊勢の神戸へ退けり。一本廿七日勢州木道の城へ退滝川是より富田かこもりし木造の城に行けるが、富田云けるは、蟹江の城を退しに付て、いかやうの堅約も有らん、此城へは、之こそ入ましかれとて、とりあはねは、滝川天にもつかず、地にもあられぬ境界となつて、一身をおくに所なく、後は越前の国五ヶ所といふ所に、餓死のていにて終りけりとぞきこゑける。

同年八月下旬、秀吉十六万騎の着到にて、尾州に参陣。二宮山へ上り、犬山より岩倉筋をも働、上奈良村より五良丸久地三井重吉へうつり、其近辺尺地をも不餘陣取也。信雄は小折村に戦陣。家康公は、小牧山におはします。翌日より上奈良村河内大野三ヶ所要害の普請はしめ、有九月

下旬大かた出来して城主を定め、十月三日大坂へ馬をうち入、直に勢州へ行、ほとなく大坂へ歸城也。

十月六日勢州羽津に秀吉着陣ナラフの城に蒲生忠三郎桑部イヌの城に蜂須賀秀石工門を入置。

同年十月秀吉伊勢へ働、曰永山に陣取。信雄中江に對陣。濱田の城に滝川三郎兵衛後羽柴下総守桑名の城に酒井左衛門石川伯耆守在城す。曰々足輕共せり合有、其中に足立清左衛門信雄秀吉扱を以て和睦の事、町屋川のほとりにて相とゝのふ。十月廿日矢田川原にて有對面と云々。家康公尾州鳴海まで、すてに御出馬の所に、先陣酒井左衛門尉神原小平イヌ治桑名へ着陣せしかとも、和睦之旨きこしめして、いたつらにかへり給ふ。石川伯耆を御使として、秀吉へつかはさる。その時秀吉伯耆を殊の外に、御もてなし懇なりければ、伯耆三河にかへりて、家康公と秀吉御和談然可旨しめて申上ける故、諸人にうとまれけり。人々のうたかひ、後に指をつねければ、たまりかねけるにや、もとより二弓の心もや有けん、忠臣の道をそむきて、上方へ立退、妻子をつれ、岡崎の城を明て、秀吉へ参りしときこゑし。ほとなく子孫も滅して、永く悪名を末代にのこす。

一 天正十二年六月十八日、尾州蟹江城手替に瀧川左近一益、籠時、伊勢の九鬼船手取切といへとも、漕坂出る其跡、船進行事不成。雑兵六七十、一所に陸へ上り、芦原をさして退、処に、姥江庄右衛門鎗を入、追崩首一討取。其外の者共、首多取付、姥江寛悟を以て、首数級討取、旨趣注文阿部善石衛門、家康公奉達上聞畢。

川向は家康公御旗本御人数多。

川向の面は横須賀勢一手相見と云々。

尾陽雜記 卷之三

地圖補遺
唐卷三

大野。宮山城。智多郡。

東面十五間。南北七十間。四方二重堀。城宮山村より午未の方。

佐治上野守為貞元典九郎居之云々。信長に属す。
佐治 太平記。網目、小河川下に、佐治海東、其尾の國人等とあり、延文比。

佐治元來丹波より出と云、これは太平記。建武比。
4。丹波住人佐治延三郎五尺三寸の太刀を持つと云し

中古近江甲賀郡より出と云々。紋九本骨扇に日の丸。
遠江守江州にて六万石の地を領云々。駿河守以前尾州知多郡に在、佐治家好みを以て、駿河守を招き、其勇を借て、當郡の内を治む、即駿河守居、城知多郡宮山村にて、近迎を領す。上野守為貞同典九郎相統四代と云々。備中守為總伯父、駿河守内縁有に付、知多以引取、内海に居城す。知領七千石と云々。即上野守弟一の女を嫁す。水野藤三郎と相婚。
同所大草 東西七十八間 南北廿六間 四方二重堀 城大草村のうち卯の方。
織田有樂築之云々。一説此大野城には、一色右京亮在之よし申す。此後に有樂築改て居城云々。

宮山の天神。石瀬村際也。城山につゝく、石瀬村瑞龍院。齋年寺末也。佐治上野家元竹村九郎兵衛、竹村二代の畫像有り、小倉村蓮台寺門外に古塚有。但駿河守死去之、砌宮山齋年寺地内狹、殊に本城に近きゆへ、地を借、葬礼執行す、今の壽山塚是也、今大野村之、万松山齋年寺、曹洞城主佐治氏四代の位牌あり。

此寺に雪舟筆大幅の達磨面壁の像有、裏に天文元壬辰初秋二日寄進佐治為貞と云々。しふくは白云和尚、天文十二年と有、即雪舟七十七歳之筆とかけり。

佐治系 宮山城主旧跡東面四丁南北一丁半惣がまへ九十三丁二反七畝廿歩 城の面代々の牌所齋年寺の旧址有之。
又鎮守の廟跡有、今謂會下畠。当城山の南、本城の守護神、八幡の松林有。六丁十八歩南北十八間、東西十一間、其外旧基有。

為貞上野守 信方(八郎) 某(典九郎) 一説長久手にて討死

信長妹婿云々 天正三年面方 長崎にて討死也 女子 九條殿室

女子 水野藤三郎口近妻

甘茶 長兵卫

甘茶 藤十郎

陳西堂 元年 山相国寺 善徳院

女子 大沼三郎九郎妻

一本駿河守弟につくる

女子 丹海城主佐治備中守爲繩妻
女子 寺本城主花井島八妻

京 遠江守

爲繩 備中守

知多郡内海城主備中守居城跡、西町四方惣家中のかまへ、岡部より中の郷迄也。郷の東に八幡有。城の守護神也。大手、南向後門の跡、東に有。又とまやの南に二檀といふ屋敷有。東西十五間、南北廿二間、則備中息居之村之勢雲寺、曹洞、備中夫婦の牌有、西端西岸寺に備中守茶釜あしや鷺に芦鑄付 葉茶壺 藤四郎。其外東鞍等ありしと云々。

一本に甘茶 水野孫八郎河和孫石工門養之、妻水野信元女、号妙源尼。

甘茶 九兵衛

善父備中守病死後、家督相統の死、秀吉常貞之領國没收時、九兵衛浪人、而後池田三左衛門に仕云々。

甘茶

半平。菅沼小大膳養子とす

然処、貞田陣の時、被懸にて手合之、御有之といへども、御陣法破に付、切腹被仰付之御、養父大膳御老中迄申上候時、於養子は兎角申間敷候得共、養子の儀不便に存候間、御赦免被遊被下候様に御嘆申上し、かれとも不相討故、此上は半平香として、甘茶切腹被仰付御助被下候様にと、遠而御託言申上る、仍之御老中以内意、半平高野山へ走籠、去跡住後池田三左工門仍招行、彼方に今子孫あり。七百石知行す。

甘茶 権左工門

岐阜中納言殿御介抱、若年にて關原陣御、中納言殿は権左工門母方の伯父によつて、其後浪人となる、小大膳半よりをもつて、松平丹波守請扶助、丹波守家中において死。一説丹波守に御預けと云々。丹波守につき、信州松本より和勢、濃州に住と申傳。

〇〇 傳兵衛

若年比、三州新堀に在、水野大和守養子となる、五六年も有之、病氣によつて、父の方に歸り、程過尾州高木修理城代比、此祖少病氣にても相勤役養たるによつて、寛永年中尾州之太守公へ申上成代相に出、正保二西三月晦日に死。

爲榮 五郎左工門

幼名傳十郎 二才にて父の跡職被下置。

甘茶 源木左工門

甘茶 小兵衛

甘茶 半平

女子

爲次 典九郎 甘茶 再三郎

女子 富田藏人妻

藏人秀次に仕て、領三万石、秀次生害後、加藤肥前守招之、領七千石、一年加へ大聖寺城に、再羽五郎左工門より山口玄蕃菴

女子 加藤小十郎妻

加藤は、信長の甥のよし、池田三左工門に仕、子孫于今在

女子 高木忠摩妻

忠摩は、尾州太守へ奉仕、子孫于今在、入親也。

天正十二年、長久手合戦之砌、戸田三左衛門忠次、尾州大野に被爲置、小濱民部、向井兵庫、間宮造酒、壺千賀孫兵衛、其外大野又者共付申候、伊勢へ働處に小濱にて、九鬼大隅が勢と遂合戦、其り合なるへし、戸田小手の者、石原孫二郎、加藤甚平、一番に鎧を合、孫二郎討死、藤田弥七郎、福井源藏先かけして突くつす、家康公御飯陣後、甚平に御加増五十貫被下云々。

名和城。知多郡。

一色左京持之。洞家の末寺。木田長源寺末云々。

大高 西浦知多郡。

水野下野守信光之妻の爲に建ると申傳。水野大膳妻の母云々。東西五十九間、南北十八間、四方二重堀。大高村之内辰巳に城跡あり。此所、

三州よりのとり立にて義元合戦之時分、元康公御座なさる。義元討死之後、是岡崎へ被為歸。其後水野大膳介居城と云々。

同處鷺津。東西十四間、南北十五間、四方かきあけの岩跡有。

城大高丑寅にあり。村より道のほと八町、此所義元合戦の時、尾張勢飯尾近江守居城、駿河勢攻落即近江守討死、近江守弟隱岐守、織田玄蕃允共に在城。都合五百廿騎こもると云々。

同所丸根。東西廿間、南北十五間、四方かきあけ若かた有。大高より道四町有。

此所義元合戦之時、尾張之勢佐久間大學居りけるを、家康公御攻落、即大學討死也。佐久間と山田藤九郎百五十騎こもると云々。○イ高平城跡より鷺津の古城へ八町、鷺津より丸根古城へ五町、丸根古城より大高城へ四町也。

緒河。智多郡。小河とも。東西廿間、南北六十間、四方一重堀。小河の村午未の方。小河村より古城へ道三町、往古小河三郎重房、水野又太郎、同左近以来の在所と云々。太平記、小河中務

丞又二郎生害の後、中程子孫同國水野へ蟄居、再ひ水野藏人貞守切取、住此城、それよりこのかた、一昌賢勝石衛門大夫忠政正康下野守信元まで、代々在城云々。

同處亦一城。東西廿間、南北四十間、四方一重ほり。古城への間行真町、水野織部正忠守、城忠守は右衛門大夫忠政子也、其孫水野備後守居城、元内匠と言し、若年内匠と申也。所の野更又申云。

源満政之末孫、此所に住し、小川三郎重房と号、連枝近辺、当國水野庄を領して、名字とす。しかれは、小川水野一家にして、未々に至ても、むつまじくす。小川経村、承久乱に、武家方にわかれ、て功あり、水野左近、京方山田重忠にくみして、利あらず。終に経村、小川を領。後雅経より小

川中務亟にいたるまで、代々繁榮の処に、中務仁木にくみして、土岐かために討る。其子孫卒して、一家の領水野に蟄居して、三四代の名もなきこと、くに、水野藏人貞守代にいたつて、近江を切取、小川へ再ひ立歸て、此城を守る。貞守より四代水野右衛門大夫忠政、近辺に名を起し、三河をも切とつて、刈屋にも城を築て、而城を、持尾州知多郡一邇に、これをなひかす。其子下野守信元、近國に名あり、かゝりし処に、秋山伯耆守時近に、小川の者塩を商ふ、依之、佐久間讒に、信長疑ひ、莫大にして、爲信長生害す。其子藤四郎高野山に、元茂と状あり、刈屋に在城しけるを、これも同しく、傷害せり。しかる後は、刈屋に川を、佐久間信盛ほしむまゝに、これを信長より給と、いへども、行作あしき故、ほとなく、改易あり。信長も、科なき信元を殺しける事、先非悔けるに、益なく、信元弟和泉守忠重を以て、刈屋の城主となさしむ。小川にも、信元弟織部正忠守守城。今に、旧城の跡ニツ、残れり。水野系、因末にあり。

入見明神。神名帳に、あぐひに入見神社と有。今に、森の中にほこら有。今は、入海大明神と申。ほこら古

し、み存楠を以て、作れり、中に、むなふた有、水野十郎左衛門信近とあり、末に、奉じ、是藤九郎也、後の十郎左衛門は、此子藤四郎元茂也。

宇宙山。乾坤院。曹洞宗にて、開山は、逆翁と申也。

道元。元天台宗にて、所経をくつて、不審を師に問、不分明、建仁の宗面にたつて、これをあきらむとのへとも、猶尋て入宋、帰朝して、永平寺を開く。

○惠獎、義介、加賀大乗寺開。瑩山、能州慈持寺開、イ、炭山。イ、大源。梅山、遠州大洞院開。如仲。貞巖。

川僧、遠州ノベニ雲齋。逆翁、乾坤院を開、開山といへとも、師川僧を、乾坤院の開基に用らる。

芝園 芝田氏也然其芝園泉田と云

同鼎

雲関 同國常清天沢院開然夫逆翁の志を継ぐにや同鼎を開山に用。

永正元 甲子比、始當時輪番となる、此寺末三十六寺今は四十ヶ寺餘歟。尾三面園にあり。當寺の地みな小川の壅下領内としるへし。此寺に魚灯台とて奇妙なる火ともし有、其外什宝唐繪等多く就中妙音辨財天と申は、たえなる声きこゆと申傳なり。水野藏人貞守の繪像あり。紋桐直衣、木像も有。水野忠善為此善。小川水野家代々の証大かた及失却、住僧牛薫字所の証文あらまし、于今至て有之末に書。

水野氏系譜訂正増補
補遺第一卷ニアリ

水野系 異本

万里梅花無盡藏、白水野藤原氏と称す

時長

房前末高房三男
鎮守府將軍民部卿

利仁

武略神通
武藏介延喜土任上野介

叙用

齋藤頭

吉信

或吉備齋藤頭
中務少

重光

加藤豊後守

中正

水野武藏介
時國

貞輔

水野武藏介

貞直

行忠

近成

近信

近重

重守

貞守

藏人

一〇〇

堅勝

忠政

忠守

信直

藤二部
(藤九郎弟)

近長

藤三郎備後守

右無信用

小川證文に系あり

人王五十六帝清和天皇

貞純

經基王

高政

高仲

忠重

定宗

重宗

重実

重遠

浦野四郎。信濃守。住尾張瀬野

重直

浦野太郎又号河辺冠者、住尾張河辺。

重親

親氏 山田四郎 尾張上某野地頭

泰親

山田三郎 尾州上某野地頭。

重房

小河三郎、尾州小河祖。

重清

山田又太郎。或水野又三郎

重弘

山田次郎 尾州行家、空山大将

重光

小川又三郎、一説これより下野守雅経に傳る。

経村

小河太郎

承久乱の時、京方甲斐宰相範徳を、駿河守殿常葉範貞の手に属して手負ながら祖、伏る所に、首伊豆平馬太郎これをとり、いへ共奪頂なれば、いへ事に落て、小河に勲賞を給云々。水野左近は、山田重忠一家たるによつて、共に爲官軍、参京方小河経村は常葉範貞につきて爲東兵、小河山田水野の三所依爲、近辺一家兼領、かはるゝ、在名に改乎云々。小河、宇宙山、乾坤院に水野藏人貞守自筆の写とてあり。

天福二年四月廿九日

常葉駿河守 範貞

水野又太郎殿

文章しるしかたきによつて無其儀とある也。

左近将監在判

四糸院御守 天福年中在鎌倉と云々。

雅経

小河下野守或下野次郎。尾州英比郷内小河村地頭。文永元年甲子八月二十五日卒。法名雅実。

雅継

下野次郎。小河地頭。弘安元年成寅十一月卒。法名覺妙。

將軍家政所下尾張國英比郷内小河村一色住人可令早源雅繼法師法名覺妙為地頭職事
右任親父前下野守雅經法師法名雅興去年八月十五日讓狀為彼職守先例可致沙汰之狀所
仰如件。

文永二年十二月七日 案主菅野知家事

イ令 金左衛門少尉藤原

別當左京權太夫平朝臣

相模守平朝臣

在御判

在御判

胤雅 下野守 小河地頭

將軍家政所下。

可令早源胤雅領知尾張國英比郷内小河村舍弟介除之地頭職事。

右任亡父下野次郎雅繼法師法名覺妙弘安元年十一月廿六日讓狀子細載之為彼職守先例
可致沙汰之狀仰如件。

弘安七年十月一日 案主菅野知家事

イ令 金左衛門少尉藤原

別當陸奥守平朝臣

左馬權守平朝臣

在御判

在御判

在御判

某 下野九郎入道

元号二年五月廿五日

大佛陸奥守

維貞

貞守自筆にいほく

陸奥守在判

此一通も文章しるしかたきにより無其儀云々

某 下野守

イ下野又次郎

或中務丞

觀應元年足利直義入道惠源典兄將軍尊氏發戰也属直義經勢州江州之間致軍功且從之而經關
東東、東源奔鎌倉、同二年辛卯十月十一日惠源死匿在武州、同三年壬辰閏二月廿日新田武藏守源義宗擊尊氏軍
於武州射講コテサシ差原也從義宗合戰後属尊氏旗下至江州同年三月十二日尊氏賜書云々貞守直筆の字に
曰、辛卯曆也。

凶徒退治事於伊勢近江國致軍忠至關東令供奉之條最以神妙發向海道致軍功者弥可抽賞狀
如件。

觀應二年

錦小路殿

十一月廿二日御判

御判也

小川下野又次郎殿

亦一通同字壬辰曆也即文和元年

去月廿日合戰已後江州供奉之條最神妙也弥可抽忠節之狀如件。

觀應三年三月十二日御判

小川下野又次郎殿

尊氏御判也

延文五年仁木義長乱に東池田頼忠とくみして仁木に属處に土岐直氏攻小河城拔之ときに被誅中務丞。崇光院の御守延文のころ尊氏薨去の後仁木右京大夫義長に同心して城を小川の庄にかまへ橋こもり旗をあく土岐宮内少輔三千餘騎をひきりてこれを圍むこといくゑともなし挑たしかふといへとも経營倉卒にして城廓いまたまつたからぬは廿余日にかてつきて落城す降参新將軍義詮すといへともひころ土岐と所領を論しける宿意あるによつてつゝみは和せずして及生害。

其比仁木は三州の主也小川尾州にて境なれば仁木に阿る事さも有へし土岐尾州を知れば小川を麾へきのたて可有事也。

ときに小川の住絶子孫世に流浪して同國水野の庄は由所なれば塾居して名もなきかことくなり。漸藏人貞守か時に至てふたひ小川刈屋兩城を保中祖とすと云々。

近守かりや。石衛門大夫代小川。信元かりや後小川。元茂小川。藤九郎かりや。

中務。東池田とともに籠城す。池田はもと土岐か一族なるによつて同國番豆崎に送ると云々。小川は將軍より三州月谷庄刈屋をたまふといへとも高師直かすめて土岐にあたへければ諍論すること年久ししかれとも土岐は大名也小川は近國也たかひに強みの沙汰に及ひて

落着なし一旦義長おしこめらるゝ後公議一同して月谷を土岐に給ふ。これより小川うらみをふくめり。東池田は小川と縁者といひ義長の恩ありければ如此云々。其比三州吉良治部大輔以謀同國守護代西郷兵庫助仁木家城に属し四千餘矢はき川の東に陣し三州に押領しさて尾州に出て働むとす小川三百騎東池田二百騎かれをふせくにことよせて俄に小川に城をかまへ籠る土岐吉良をうたんとて二千騎先小川にいたる土岐兩人將軍方をそむく事をしらすあへて用心もせず後陣の勢を待て矢矧へやよせん敵をこゝにやうけん小川の近郷に二三日をふる處に小川池田不意に土岐か陣を襲ちちまち土岐敗して一の宮にはしりかさねて小川をうたんと敗軍の兵をあつむるに廿余日に及大野か大野ト家侍遠縁と説之不審佐治海東太平記に山門を攻し時大かた絶か不審荒尾知多等の勢をまねき小川の城におもむきけり中務出て戰ていけとらると云々。觀應三年より延文五年にいたつてわつかに八九年に及小川討死すと也。

〇〇父中務遇害故入水野塾居。——九郎次郎住水野——〇〇——

尾州小河庄

水野姓系譜

皇五十六帝

清和天皇

文德天皇第四皇子也諱惟仁、

母太皇太后宮藤原明子忠仁公攝政大臣良房女 添殿皇太后是也。
元慶四年十二月四日崩於四覺寺。歲三十一。

貞純親王 母神祇伯棟。貞女。

中務卿。兵部卿。四品上總守。常陸等大守。

延喜十六年五月七日六十四歲。号桃園親王。

武門当代相統源氏正統祖。

經基王 母右大臣源能有女。

武藏守下野介正四位上。上總助内藏頭。太宰大貳。左衛門權佐。式部丞。歌人。拾遺集。筑前信濃美濃。但馬伊豫等守。天福五年六月十五日始而賜源朝臣姓。天性達。弓馬長。武畧。鎮守府將軍。天福五年十一月十日卒。四十歲。号六孫王。依為第六親王子也。

高仲 多田親光意。贈從三位。歌人。

高政 母橘繁忠女。同滿中。

鎮守府將軍從四位下。号八嶋治部少輔。左衛門大尉。兵庫頭。龍馬助。兵部丞。陸奥伊豫武藏等守。

忠重 一重忠。

刑部。太輔。駿河。遠江。陸奥。

從四位下。使左衛門尉

定宗

大從五位下。駿河守。使右衛門大尉。

重宗

母大納言齊信卿女。

佐渡守。從五位下。左衛門尉。

承曆三年八月。義家與國房合戰之時討死。依勅宣義家朝臣と討之。

重實

佐渡源太。保延三。勅勘出家。

同院御時四天王其一也。鳥羽院武者所号八嶋冠者。

重遠

一遠重。

浦野四郎。信濃守。兵庫頭。

義家朝臣智祖父重宗為猶子。擬血男。而依重宗勅。追蒙使廳之責。生國者美濃住者尾張國浦野也。

重定

号山田先生右兵衛尉。筑後守。依_下關連鐘面八郎爲朝之貴任筑後守。

重滿以下兄弟_并。重昌等治承爲頼政於美濃國被誅被渡首。

重滿

左兵衛尉。北白河院傳長。

重繼

重久 大隅守

中宮侍長使左衛門尉

文同自害

承久於京方被討。

重直

又依住尾張國河辺庄号河辺冠者。

浦野太郎号山田先生又号佐渡孫太郎。

重蒞

重義 泉太郎

重忠

山田二郎。改重廣。承久乱之時爲京方被誅云々。

承久三辛巳六月五日義時之兵戰於尾張墨股從會水野左近近筆大金太郎太田五郎兵

衛荒尾左近九十餘騎於杭瀬河之端防東兵軍敗而後父子巖嵯野此方於小竹中自害苦
提所尾張木賀崎長母寺無住國師重忠弟明長右馬允云可尋。

重繼

山田孫三郎。伊豆守。承久乱父子同時被誅。

兼繼

山田又太郎。号津保山入道承久乱之時十四歲流越後國經七年赦免出家法名安心。

重親

号山田左。左將監改正親入從五位下。

重泰

出家道田
山田二郎 奉書關東法光寺

泰親

山田三郎尾張國上菱野村地頭義村之所領也。

親氏

山田四郎下菱野村地頭。

重房

小河三郎。尾州小河祖。

重弘

山田六郎次。属十郎藏人行家室山大將三遠雁直垂紫威鎧を着黒の馬に乗平三十余騎云々。

重季

山田小二郎

重光

小河又三郎 左兵衛尉 一説從之下野守雅経につくと云々

重清イ満

小河又三郎自是号小河其後移居尾州水野家以水野為称号。山田又太郎。異本に水野小三郎と有。

水野藏人貞守自筆の写小川乾坤院在僧牛薰書之。実名雖不分明且載之或曰可為小川太郎経村矣。

天福二年四月廿九日

常葉駿河守

範貞

水野又太郎三秋少不見介殿

左近將監

在判

文章はしるしかたきにより無其儀と有。

四糸院御守。天福年中在鎌倉ト云々。

経村

小河太郎。小川領主

承久乱之時京方甲斐宰相範義駿河守殿常葉範貞之手に属す手負ながら組伏る処に首は伊豆平馬太郎取之といへとも奪ひ頂なれば僻事に落て小河に給勸賞と云々。

水野左近重忠依為一家共に為官軍参京方小河常葉駿河守範貞に属して為東兵小川山田水野之三庄依為近辺一家兼領山田水野小川一家兼領改在名と云々

雅経

小川下野守或水野下野次郎尾州英比郷内小河村地頭。

文永元年甲子八月廿五日卒。法名雅実。

雅繼

下野次郎。小河地頭。

弘安元戌寅十一月卒。法名覚妙。

將軍家政所下尾張國英比郷内小河村一色住人可令早源雅経法師法名覚妙為地頭職事右任親父前下野守雅経法師法名雅実去年八月十五日讓狀為彼藏守先例可致沙汰之状所仰

如件。

文永二年十二月七日 安永主菅野知家事

イ令 金左近衛門少尉藤原

別當左京權大夫平朝臣

在御判

相模守平朝臣

在御判

如右

胤雅

小河地頭

下野守

將軍家政所下

可令早源胤雅領知尾張國英比鄉内小河村 イ地頭ノ字ナシ 地頭 舍弟分除之

地頭職事。

右任亡父下野次郎雅繼法師 去名覺妙 弘安元年十一月廿六日讓狀 子細載之 爲彼職守先例可致沙汰之狀仰如件。

弘安七年十月一日 案主菅野知家事

金左衛門少尉藤原

在判

別當陸奥守平朝臣

在御判

左馬權守平朝臣

在御判

京一説 東池田之祖云々

甘木 下野九郎八道

元享二年五月廿五日

大佛陸奥守維貞

陸奥守在判

異本 此一通も文章しるしかたきにより無其儀と貞守自筆の写に在。
元享二年五月廿五日常盤駿河守範貞古川陸奥守維貞証文有之。

甘木 下野又三郎

下野又次郎。或中務丞。

觀應元年足利直義入道惠源与兄將軍尊氏_二兇戰也、屬直義_一經勢州江州之間致軍功、且從之而經關東、惠源奔鎌倉、同三年辛卯十二月廿日、同三年壬辰閏二月廿日新田武藏守義宗擊尊氏軍於武州射鞆差原也、從義宗合戰後屬尊氏旗下、至江州、同年三月十二日尊氏賜書。

貞守直筆写

凶徒退治事、於伊勢近江國致軍忠、至關東令供奉之條、最以神妙_一尙海道致軍功者、弥可袖賞狀如件。

觀應二年十一月廿二日御判

錦小路殿御判

小河下野又次郎殿

同右

去月廿日合戰已後江州供奉之條
最神妙也、弥可抽忠節之狀如件。

觀心三年三月十二日御判

尊氏御判

小河下野又次郎殿

延文五年、仁木義長叛与土岐東池田頼忠俱属仁木、據小川城、土岐直氏攻小川城、拔之被誅、
中務丞、崇光院御宇、延文之頃、足利尊氏薨去之後、同心仁木右京大夫義長、構城於尾張國小
川庄、箱籠場、旗土岐宮内少輔、帥三千余騎、圍之數重、挑戰廿有餘日、經營倉卒、城廓未究、故粮
盡、落城、雖降、參、新將軍義詮、日來与土岐依有論所、領宿意、終不和、生害于時、小川住絶、子孫
世流浪于同國水野庄、至貞守再保小川刈屋、兩城為中祖云々。中務与東池田俱、籠城、池田
元、因為土岐之一族、送于同國番豆崎城云々。其後番豆崎城領大宮司新田義口池田者、自建武以來、属
仁木義長、屢、顯、戰、功、得、教、高、所、領、是、皆、義、長、所、申、界、也、依、此、思、願、内、々、深、属、仁、木、小、川、者、自、將、軍、
虽、賜、三、州、月、谷、庄、刈屋、高、師、直、抑、遏、私、謀、界、土、岐、故、諍、論、數、年、然、土、岐、大、名、也、小、川、近、國、也、迨、及、
強、沙、汰、無、落、着、一、日、義、長、被、押、籠、後、公、儀、一、同、賜、日、谷、於、土、岐、於、是、小、川、啣、恨、矣。東池田者
与小川縁者、云、不、忘、義、長、恩、好、如、斯、云々。其、比、有、三、州、住、人、吉、良、治、部、太、輔、者、仁、木、以、謀、使、属、
同國守護代、西郷兵庫助、仁木家礼其、勢、四、千、余、陣、矢、知、川、東、押、領、三、州、出、勸、尾、州、小、川、言、余、騎、東、池、田
言、余、騎、據、事、防、於、彼、彼、構、城、於、小、川、庄、箱、籠、土、岐、欲、討、吉、良、卒、二、千、余、騎、臻、于、小、川、元、來、与、中、務、不
和、是、以、不、入、城、直、次、小、川、近、郷、土、岐、未、知、而、人、叛、將、軍、方、故、不、肯、用、心、謀、後、陣、兵、而、赴、于、矢、知、乎、待

敵于此所乎、猶豫歷二三日、於茲小川池田擇遣兵三百騎、味爽襲土岐陣、出其不意、揚、開、土、岐、兵
遽、駭、失、度、小、川、兵、無、透、間、攻、入、放、火、於、敵、陣、土、岐、周、章、捐、甲、擲、弓、矢、取、刀、乘、裸、馬、乍、摺、眼、任、馬、蹄
逃、去、士、卒、不、知、大、將、在、所、騷、動、離、散、小、川、鄉、民、乘、勝、逐、于、彼、討、于、此、獲、首、二、百、餘、手、負、不、知、其、數、土
岐、已、奔、一、宮、集、敗、軍、兵、攻、破、小、川、城、欲、雪、其、耻、辱、散、兵、猶、未、半、集、適、聚、者、或、失、兵、器、失、馬、具、無、奈、之
何、漸、經、三、十、余、日、招、在、治、大野海、東、荒、尾、知多等、勢、召、在、國、郎、從、又、帥、三、千、余、騎、攻、小、川、城、陷、之、云
々。最、前、小、川、与、池、田、俱、討、土、岐、軍、所、得、首、悉、劊、馳、价、送、于、矢、知、曰、土、岐、宮、内、一、時、追、落、畢、首、級、欲
持、參、之、中、間、敵、多、故、延、引、今、也、土、岐、危、急、之、秋、也、速、乘、此、費、討、之、宜、不、勞、兵、水、如、解、土、岐、且、然、况、其
余、小、敵、望、風、靡、之、若、及、遲、緩、敵、羽、翼、生、殆、危、乎、吉、良、西、郷、雖、善、其、言、不、忍、棄、自、國、之、敵、將、往、趨、追、歷
廿、余、日、於、是、土、岐、亦、衆、自、國、他、州、軍、勢、押、寄、小、川、城、含、先、日、之、憾、勵、氣、輕、命、攻、擊、且、謂、吉、良、西、郷、為
後、攻、当、合、計、之、当、此、時、吉、良、西、郷、与、大、嶋、对、陣、剋、國、中、敵、起、大、敗、吉、良、乞、降、西、郷、逃、亡、不、知、其、所、小
川、池、田、及、聞、此、事、失、後、力、竭、將、自、殺、土、岐、欺、諭、降、參、曰、本、領、之、事、許、京、都、可、俟、其、命、盾、之、側、不、對、面
是、則、殺、戮、為、報、疇、昔、之、讐、也、而、人、察、其、機、悔、不、死、城、内、無、詮、竊、相、謀、以、為、罽、徒、死、于、此、不、如、遂、一
戰、聚、三、百、余、兵、三、分、取、闡、其、二、分、属、池、田、其、一、分、属、小、川、曰、畫、討、出、池、田、先、登、小、川、繼、戰、遂、不、克、勝
敗、績、中、務、被、數、ヶ、劊、為、土、岐、虜、池、田、一、身、僅、免、入、于、番、豆、崎、城、土、岐、虽、愾、失、池、田、然、喜、補、小、川、即、誅
之、土、岐、不、顧、已、無、謀、而、憎、敵、深、重、拳、世、嘲、之、云、々。
從、觀、心、三、年、至、延、文、五、年、迄、僅、及、八、九、年

〇〇父中務遇害故水野庄入蟄居。

〇〇住水野号九郎次郎

〇〇

貞守

尾州知多郡小川城主

藏人小川城東西廿間余。南北六十間四方堀邑より午未方。文明十九丁未四月廿二日病附而五月十八日亥刻死。年五十一。歳閏維之三日。後獲舍利数千粒。法名玄室全通。

鳥妙

梅花無尽藏詩集。如此出。

一初

法名一初。高野二八。延昌十有。永正六巳巳五月十九日卒。

下野守

又法名一初全妙。乾坤院過去帳。小川位牌。前野州大守一初全妙。

賢勝 法名也

藏人。小川城主。小川乾坤院位牌堅勝。

寶幢賢勝居士 一本賢勝。高野山。賢勝居士在永正十一年甲戌十月三日卒。

近守 藤九郎 刈屋主

左近太夫

討死

此所可尋不分明。左近太夫清久。天正六 十二月八日於稷州有岡城。水野藤次俱討死。

某 娶安。神谷源之丞女。

左近太夫。廿九歳時討死。藤次()とこ也。清久は五郎作父なるべし。

某 三郎九郎 娶水野石工門太夫。

女子 水野四郎石工門妻。離別。向部根津守妻。

女子 喜祐石工門妻

某 母水野周防守元氏女 金次郎

某 甚九郎

女子

某 又石工門

女子

四郎右衛門

甲州武田信玄小田原

蓮池迄燒。働有て歸陣

之頃。シマ瀬へ寄す。

北條陸奥守兵二騎、

谷の上より靜に斥候

す。甘利衆覺之。武者

中津川。乘越午飼へ坂

女子 熱田大宮司妻

女子 招野助七郎妻

某 甚七郎 住尾陽重相義直公

一 半三郎

某 住紀伊重相義直公

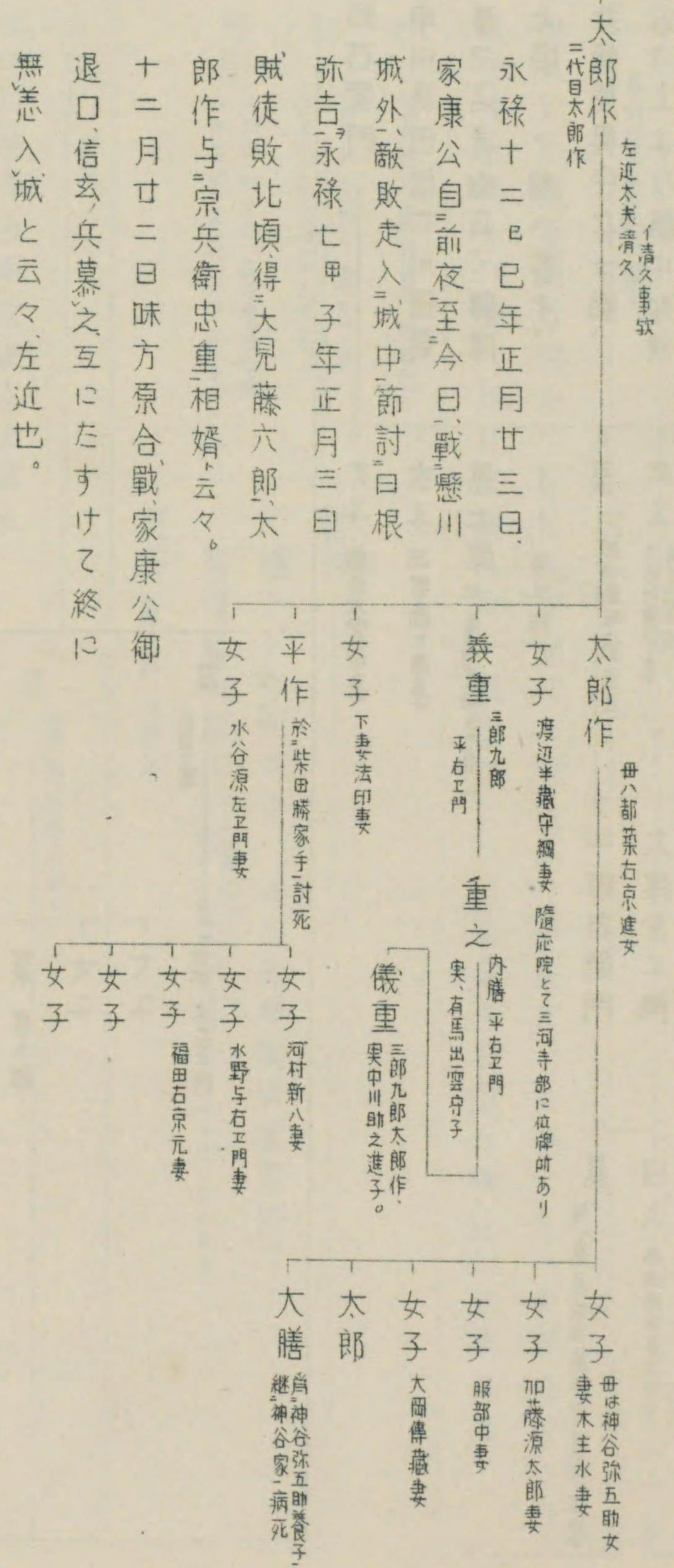
女子 水野出雲守妻

女子 号立安院。

女子 前田半石工門妻

四郎右衛門 某 為系名松平越中守陪臣。出家
太郎左工門 自久 母佐枝平兵卫女。
弥右工門 長江 大和尚。碧雲寺住侶。

を乗上る。八騎之中也。
角て物見せし設楽越前守父子是
 本見て馬を連めて引取と云々。
 女子 若谷様殿御妻

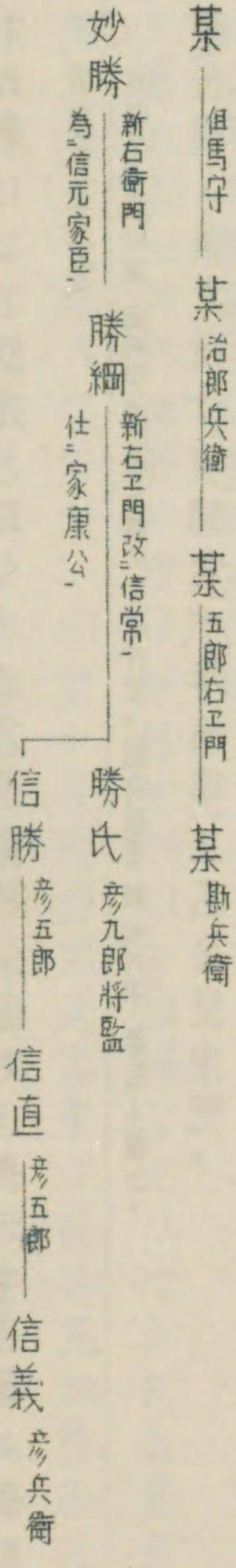


女子 松平藏人信忠室
 女子 奥平監物 興勝道母。奥平監物貞昌入道道關妻 三州作手。
 邦重 壽七郎。元龜三年辛未十二月二十二日卒二十五歳。法名安比正全。
 某十 監物 尾州知多郡常滑。大和守三政之。法名德容全勝

某 大和守 奥山見泉 花翁全宗法
常滑城主 八月十二日卒 此室月桂秋江大姉。

隱岐守殿より来る写一説近守は右衛門大夫忠政同人と云不審。
 近守 水野藤九郎 永正之比如此大永之比和泉守改三州苅屋城守。
水野藤九郎三州刈屋在城。永祿三年五月廿日尾州鳴海城代。

信近 阿部五郎兵衛尉長教令伊賀衆攻之信近討死。信元他適爲信近留主於此敵急攻云々。
信元兵急攻殺伊賀衆故得城全。



守隆 監物。異本に元民部 後改山城守云々。常滑城主。
 慶長二成戌四月廿一日卒。法名雲室全慶此室下野守信元女花影総心大姉元和四戌午

八月廿六日死、建総心寺爲菩提所、今のしもの城云所に老後住すと云々。

某

十五歳にして討死と云々。法名有高野山異本に長久手合戦之砌討死と云々、十五歳

守信

或重弘或清忠
河内守 徳川記、河内守清忠と載之、大目付役。駿府政事録、河内守重弘と載之。

慶長関ヶ原之役仕、東照宮供奉陣中、法名全叟宗完。

某

八郎右工門総心養子

実は中山五郎左衛門子刑部少輔には

孫と云々。常滑之水野監物守隆室禪

尼総心養之故水野と号。母は水野下

野守信元女総心妹也、号、栄壽院尼。

太郎右工門。八郎右工門

彦太夫

女子 大崎七郎右工門昌妻。早世

女子 加々美伊左工門妻。早世

女子 荒尾恒馬妻

守職 半右工門。政守政。実は荒尾

女子 徳山五兵衛妻

守矩 左京

守慶 半右工門。内藤大和守養之

女子 成瀬吉右工門妻

水野監物守隆 尾州知多郡常滑城主也。信元賀大坂一揆勢、信長对阵之時天王寺在番、
天正二甲戌七月廿三日尾張國西方長嶋一向僧徒一揆原たてこもりけるを、信長責之節

安宅舟乗押よす。信長大坂合戦室町殿張先陣五月五日天王寺附城をかこむ。一揆退
乱其後附城之侍大将中たり。織田信忠与木曾義昌、議攻武田勝頼時二月十二日未明同
宗兵衛忠重毛利河内守宗政等岩むらより信州伊奈口へ打越る勢の中也。尾州大府寶
籠山延命寺住眞慶は天正七巳卯年二月十五日証有之常滑城主、舍弟なり。しかれども
足かたはなるゆへ、爲出家云々。

イ 某 一藤七郎元龜三十二廿五年二十五歳号、安元正念心。

信元

下野守、母栄岩宗盛大姉父之跡を継て領而城。弘治三年比属信長、於石瀬家康公、度々合
戦。刈屋十八町路合戦、信元郎従矢田傳十郎一番合戦、二備高木主水、清水権助、水野藤次
郎、藤十郎、等接戦、刻有武名、永禄三年五月今川義元爲信長討死、依之信元以飛脚告家康、
同四年家康属子信長、信元合躰。
元龜元年七月比、磯野丹波守秀昌佐和山之城、櫓こもりけるを、信長責之三刻、南山爲定番
被居置。永禄六年三州一向宗一揆起、信元及忠重作援茶笏御曹司之手、属、淺井新八郎
等長嶋一向宗修行一揆を責節、篠橋城へ向。天正三年乙亥十二月廿七日、依信長命、於参
州岡崎城傷害。法名大英鑑、光号長江院。

元茂 高野山常慶院、状有、水野藤四郎元茂とあり
年月永禄八乙丑十月と有。

藤四郎。如屋城主。父之縁座によつて生害。

女子 水野監物妻 尾州知多郡市原

女子 若尾小太郎妻 知多郡木田城主同大膳子 俊美作中

女子 水野大膳妻 大膳大高尾高。大膳介大高城東西五十九間二重櫓。村より辰巳の方。

女子 水野藤次郎妻

甘茶 信近 藤九郎 如屋城主為副部被討于時永祿三年六月也。

德川傳記。信元子。信元弟とも云。

女子 戶田孫八郎妻。孫八郎尾州河和城主父孫右工門

延壽院 法名本光妙源尼。戶田三郎右工門連枝と号す。十八月十日孫八郎は五月廿日死。賀雲全慶。

光康 初名五七代

物石工門元名伊豆四日九日死。法名石室宗盛。

童形比。離河和於江戸奉仕秀忠

公此節之御教書武藏國足立郡

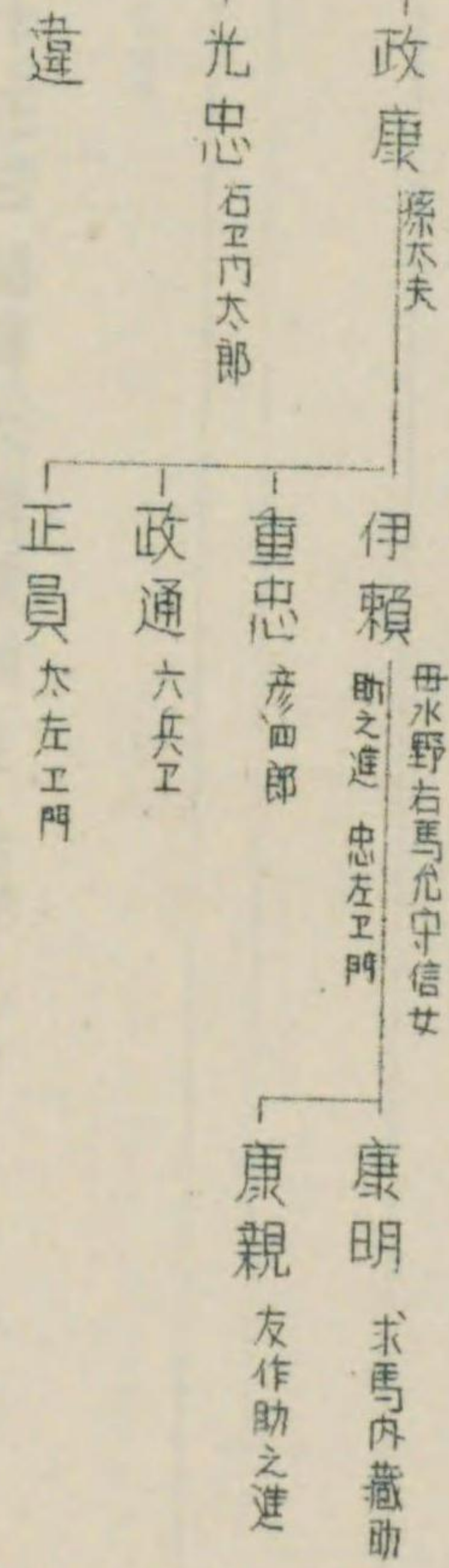
大門郷七百石之事右所宛行不可在相違

者守此旨可抽勤功之狀如件。

慶長二丁酉九月

水野万代殿

家康公以御直筆此名をあさはさる。自是略戶田。母方之姓水野。成其後仕義直公。在河和。



河和ト依先祖。旧地。歿。跡アリ。

女子 水野右馬允守信妻。石馬院。改印石工門守政母。

女子 山田長石工門妻

女子 大崎七良右工門昌妻

号栄壽院。轉營清心尼。夫大崎七郎右工門昌口仕義直大阪陣供奉勤御使番。号固菴常堅。

女子 鈴木新市右工門妻

利勝 父土井利昌

甚三郎 大炊頭 侍從。從四位下。信元末子

女子 三浦志摩守正次母 松平記三委。此事ヲ載。

元政 内藏元。利勝弟利昌実子。利勝家臣

女子 朝倉筑後守妻

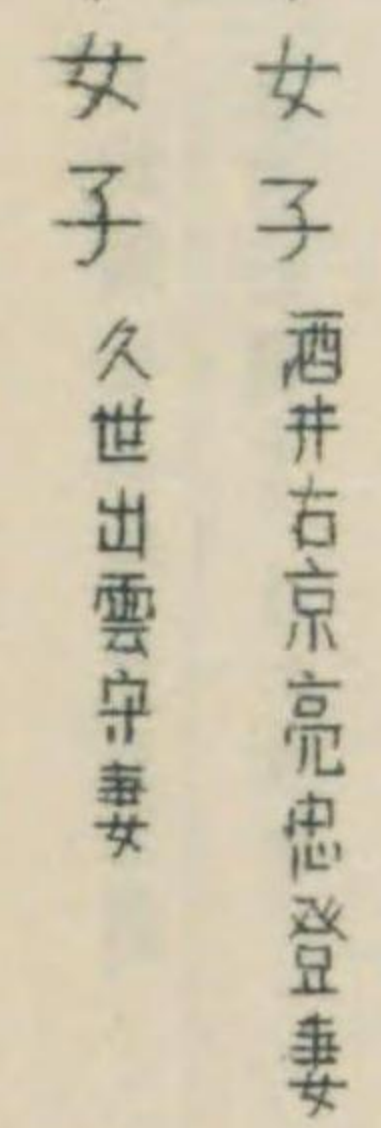
利隆 遠江守 從五位下 小名松丸

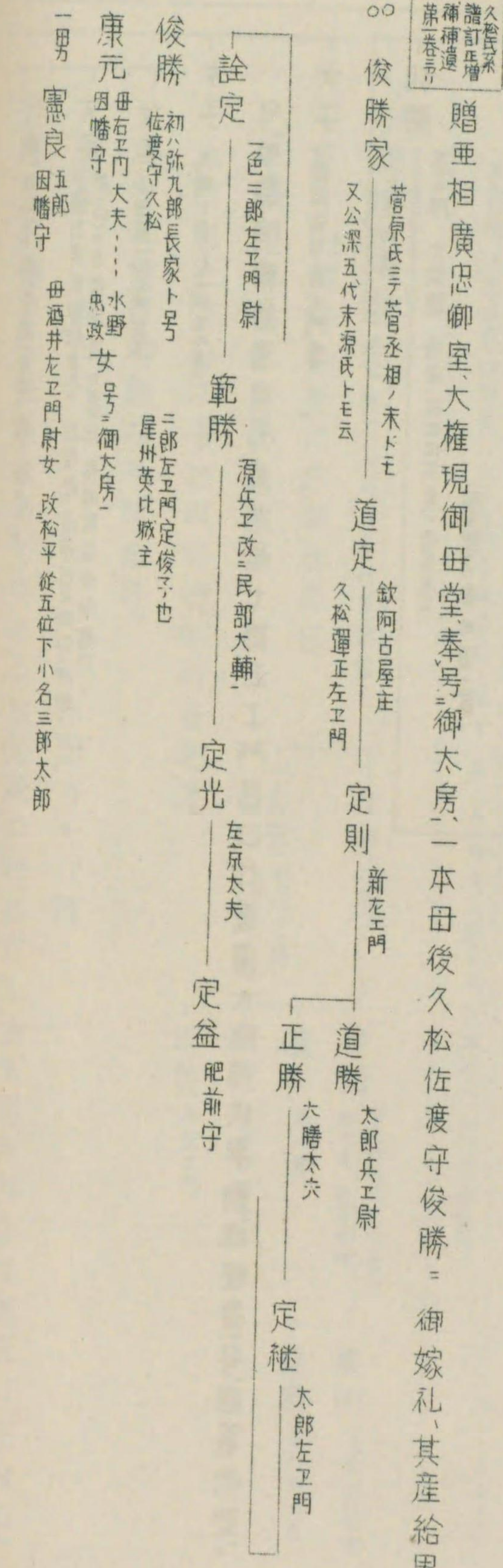
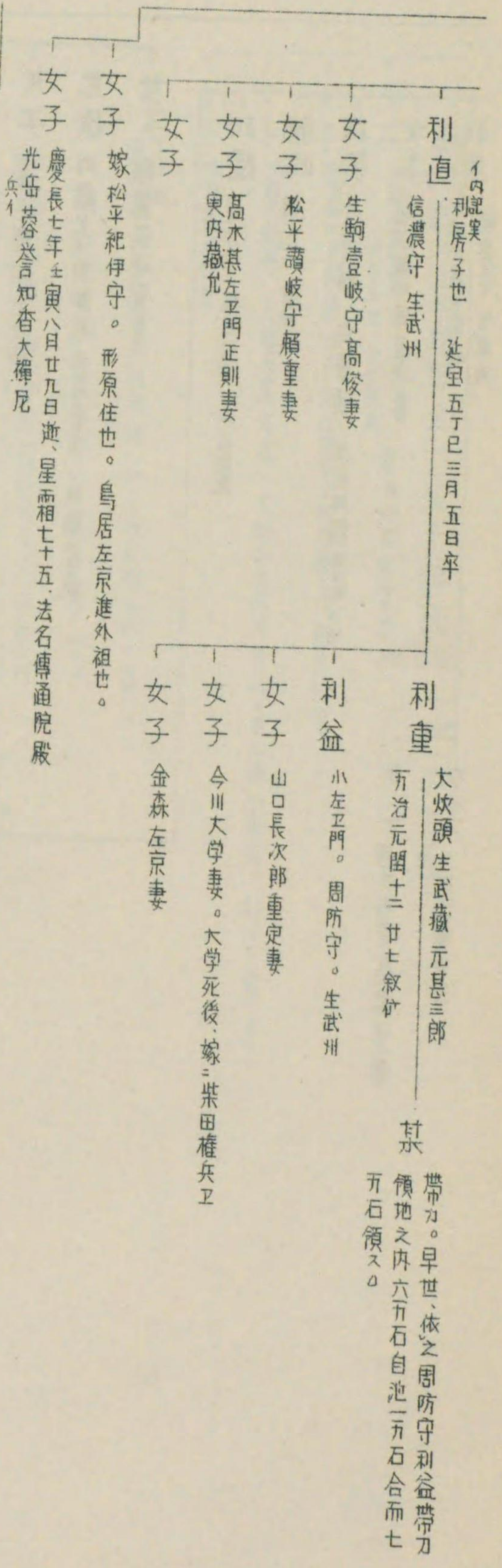
勝政 曾十代 早世

利長 小名八助 兵衛頭 生武州領西尾三州

女子 堀兵部大輔直次妻

利房 七郎小名又房助 能登守 生武州





- 三男 良尚 佐渡守 女子 阿部内膳正長留妻 女子 黒田右五門佐妻
- 女子 菅沼新八妻 女子 大権現出羽守妻 女子 松平出羽守妻
- 女子 福島備後守妻 大権現御養女 女子 中村學妻 秀忠公御養女
- 康久 康母四書
- 女子 千村平右五門妻
- 定勝 豊岐守左少將 元和九八月日從四位下 小名長福三郎四郎
- 女子 酒井雅永頭中清女
- 定重 越中守
- 水野吉左衛門 水野甚左五門養食爲子
- 女子 服部石見守妻
- 女子 松平土佐守妻
- 女子 中川内膳妻
- 定房 美作守 四品
- 女子 阿部對馬守妻
- 勝政 豊前守 実水野藤次郎末子
- 女子 嫁松平与一郎忠正後嫁松平与次郎 其後嫁保科輝正忠正直
- 忠守 織部 慶長五庚子季三月廿八日卒 法名月安梵心

織部妻慶長九巳年十一月八日死妙光。織部城東西四十間後備後守近長元八内匠卜云藤三郎子也
小河一城主後武州忍云。

忠善 生武州

監物。延宝四丙辰八月廿九日卒六十五歲吉田或田中之城主藤枝卜毛云後岡崎城主缺性院
破鐘了勤大居士寬永十二年賜駿州田中城領四万五千石同十九年移三州吉田城正保二年轉
吉田移岡崎加五千石。

忠春 母井上主計頭正就女 權五郎 右卫門大夫 生武州

慶安四九月廿三日初謁見承応三十二月廿八日任叙延宝四十月廿五日家督同九二月十六日
寺社奉行兼奏者貞享元四月十三日大坂御城代同年冬免役貞享二五月廿一日寺社奏者共免
許元祿五十月十五日卒五十一歲号通松院。

女子 京極飛騨守高仲妻

女子 松平和泉守乘久妻

女子 丹羽式部少氏純妻 寬文十庚戌八月廿七日死

女子 水野信濃守元和妻

女子 片桐主膳正妻

女子 牧野遠江守康道妻

忠及血 元祿十一年於三州大嶽寺廣忠佛有法命于時忠及血奉行。

忠之 水野清吉。忠及血養子。大監物。齋宮。主水。

元祿十二正月十一日御使番より新番頭同年九月廿七日家督同十二月廿二日任叙宝永二正
月十一日御奏者正徳元若年寄同四年京詰司代享保二御老中同十五年免役同十六年卒号祥
岳。

忠久

主膳 越中守 寬文九十二月廿五日任諸大夫

女子 水野淡路守重長女

忠景 母水谷伊勢守勝隆女 主膳

小傳次

女子 八木十三郎妻

女子 久貝忠左衛門妻早世

女子 黒田源右衛門妻

吉守 金藏 權大夫 式部 牛菴宗欲居士

奉仕 忠吉卿義直公知千石元名長兵衛。

於尾州愛智郡香懸村之内

千石之地出置候間全可令領知者也仍如件

慶長八年六月廿九日

忠吉卿御朱印

知行介之夏

水野長兵衛殿

一五百石

尾州丹羽郡

三井重吉村之内

同 中嶋郡

片原一色村之内

合千石

右令扶助訖全可領知者也。

元和六年九月朔日

義利公

御判

水野長兵衛殿

吉繩

主馬 母八景傳岐中女

雅信

權大夫 奧八松并氏男、子繩吉、合以娘。

繩興

傳九郎 權大夫、奧八吉繩子、以弟為繼子。

大學

雅信実子也、母吉繩女

守信

右馬允 元盛信

慶長五庚子年九月十五日、關原合戰之砌、從忠吉御供奉有名、元和元乙卯年五月七日、大坂合戰之刻、仕義直公、于時御使番、其比号、戶田右馬允、寬永廿未年六月二日死。去名雲山、清涼六十

六歳。守信院。

守元

母八田孫八郎女、河和、城主十九歳、
繼殿、寬永三五月十九日死

可勝

三郎右卫門 養他家仕、水野忠善

女子

前田安藝守直勝妻

女子

堀田民部之利妻 再嫁片桐弥五右衛門

女子

坂井半左衛門妻 尾州春日井郡下津村知行

女子

水野孫太夫政康妻

女子

三宅市右衛門吉氏妻

女子

興平治左衛門妻 守都宮住

重路

友之助 七郎右卫門 妻八堀備中守女 元祿六九月廿三日卒

守元

田宮 守信 河内守 守政 半左伊豆守 河内守、寬永十四年家督

守興

半左。内藤大和守重頼養之、号内藤、後守清長

女子

成瀬吉左卫門室

忠富

河内 内膳

領五千石、延宝四三月為百人組頭、貞享二年十一月為大目付、同十二月任叙、同四年八月御留

守居、元祿元年役免、享保二年火消、同十一年御小性組番頭。

守正

小左衛門 清藏 法名

守次

金十郎改 弥兵衛 妻 彦坂平六重定女

忠顯

長門守 奥隼人忠清末子初辰之介 中十兵衛女子土屋但馬守教直妻

女子

水野大膳助妻 同大膳母 西大高

大膳小尾州知多郡大高城主信長山門凶徒叡山に追のほせ淺井新八郎等香取屋布に入置る

藤次郎

範方ト申傳。水野如泉物カタリ云々

永祿之初、家康公義元方、信元は信長方にて、伯父甥之取合、数度有之。中にも、新屋拾八町といへる路之先にて、鎧合ありけり。一番、鎧水野藤助、滝見弥平次、二の備には、水野藤次郎、同藤十郎、高木主水、梶川五左衛門、清水権之助、丹羽喜右衛門、久米江左衛門、鷗辺空之介、神谷新七郎等也。石が瀧にて、家康公御働之刻、藤十郎敵を鎧付、兄之藤次郎首を取、鳥井四郎左衛門、大久保藤助、同藤次郎等終日合戦す。其後、属信長、天正六年、寅年十二月八日、於根州有岡討死。去名心得全了。

近本 介長 妻 山口半左工門重勝入祥雲女

元綱ノ条ト同ジ

彈正忠 甲斐守 備後守初三左衛門内匠小河別城に居、備部カ後住、元和九癸亥三月一日、死、奥室英心

家康公廿三歳之御時、針崎之乱しつまりて、上野の城に、三右衛門近長、同四郎左衛門と兩人入置たまふ。

初三左工門 元綱 妻 中川内膳正久盛女 母 山口少雲女

上野雖水郡安中三方石限之、寛文四年致仕、剃髮、号「道要」。

備後守從五位下

彈正忠 甲斐守 備後守 初三左衛門内匠

小河別城に居、備部カ後住。元和九癸亥三月一日、死、奥室英心、家康公廿三歳之御時、針崎之乱しつまりて、上野の城、三右衛門近長、同四郎左衛門と兩人入置たまふ。

元知 三左工門 信濃守 生武州

承応元年、辰十一月、奉謁、將公領上野安中二万石、後年有故、領知没收、被預於水野隼人正。

女子 那須遠江守資國妻

元朝 右近母監物忠善女 妻 松平内藏介正勝女

彈正忠 延宝三年始謁見、賜二千俵。

忠次 甲斐守 領三千石 生三州 寛文八年、戊申七月廿五日、死、廿四歳

女子 天野勘左工門妻

重英

藤二郎 改重仲 對馬守 出雲守、從五位下、奉仕大権現、大番頭、後被附、頼宣卿、元和元十一月十二

日、於紀州新宮卒、五十歳、号「善竜院日山常春」。

重直 母水野監物源中心元女 左内對馬守、万治元年、戊戌、閏、極月、任「諸大夫、改、土佐守」。

重玄 孟改。妻 牧野内膳正女。

藤殿以弟為子改重為忠、隱岐守、志摩守、實寬文十二年七月廿八日初拜謁、後年有故、新賜五十石、仕紀州。

女子 田中主殿妻

主殿 領五百石 生武州。大關土佐守高增妻

重好 權十郎。初名藤九郎。初謁八公。小普請奉行。

女 異本 松平若狹守康信室

攝津守 領三千石

女子 有馬出雲守妻

忠之 齋宮 奥右門大夫忠春子。為養子。虽然兄忠盈依無嗣子、繼其家督。

忠重 母華陽院 尾州宮野善七郎女。實八三州大河内元綱女

藤十郎 宗兵衛 和泉守 從五位下 兄信元与家康公戰于石瀨之時、忠重一番合鎗、令兄藤次、取首、信長聞之、感忠重有讓。

遠州懸川同國大井高天神等為大權現味方功有、大井城ヲ取ル時、忠重日幣之指物スト云々、永祿六年三州一

揆起之時、忠重与信元不和、道三州驚塚嫁姻相智、水野太郎作因族縁、属之、村起又一郎同在此所、

家康公三人共參岡崎。同七年甲子正月三日一揆以土呂御堂為根城、土呂近辺馬頭傍小豆坂、

与一揆合戰、一揆先陣石川新七郎、蜂屋半之丞、矢田作十郎大見藤六也。賊徒敗北、新七郎以金

團為指物一番進出、忠重討捕之、同十二年己正月廿三日、家康公攻遠州懸川、城於天三山、接戰、

忠重衝倒伊藤兵衛、城内鎗火、掠原次右衛門自傍出、乞此首、獻之、忠重於城外擊取大谷七十郎。

天正二甲戌四月六日、家康公攻遠州大井、凌險阻、登峻坂、兵士疲勞、卒兵而至、御倉于時、天野宮内、右衛門、跡忠重与大久保忠世為後殿、自氣多郡至大窪村、兵死者二十餘人、于時、勤有、全軍而還、同七年攻田高天神城、諸將策取守之、同八年庚辰正月、信長感勞功、賜書、同年八月、信長召於旗下、繼信元家督、賜為屋城。

天正十年八月、家康公御領甲州信州を打とらんかために、北条氏直発向、因茲公甲州新府に御在陣之比、黒駒より二里上の当木村といふ所に、氏直の士内藤大和守一組の手と、公、士鳥居秀右衛門元忠、水野宗兵衛と晴なる合戦あり、小田原方打負、田中五郎宮中野以下、彼是都合七十八人討死。

信長与越前之朝倉、近江小谷にて合戦之、初、忠重從家康公有働。天正十二甲申年、秀吉与信雄、確執三月三日、信雄誅、田長門守、弟將監、家臣天野五郎右衛門等保本治、城、星崎南野、拒命、同六日、忠重并勝、成攻之、鈴木与八郎、水野臣与、敵須賀太左衛門合鎗、破外廓、同十七日、乞降、奉城而逃、于伊勢、忠重勝成功之功有、信雄乞援于家康公、三月十三日、発兵着清須、秀吉入尾州、四月八日、欲介兵入于三州、以養子秀次為大將、以池田森為次將、堀久太郎為副、二万余人也。其晚、家康公命忠重及神原小平太、康政、須賀五郎、左衛門、康高、本多豊後守、丹羽勘介、令、跟秀次、後九日朝、与秀次合戰、大將進、長久手、家康公先鋒、衝突、池田勝入、森、武藏守、陣、池田森討死、総軍潰走、秀吉聞之、疾馳着龍泉寺、忠重日夜襲秀吉陣、可得大利、本多忠勝士卒未戰、奮銳氣、与我兵同、可為先鋒、不意諸軍雷同攻撃、則天下之勝在此、一挙、家康公見士卒疲言、虽当理不同、此儀、曳兵還小牧山、五月秀吉引兵

還美濃、忠重再初勦小陣于濃州田本、前田主与十郎背信雄、引入滝川一益于蟹江城、忠重再初圍一方、瀨川乞降、蟹江落居、同八月秀吉入勢州桑名、忠重自刈屋渡桑名陣于大福田地、故秀吉不入桑名陣于八田山、与信雄講和、其後仕秀吉。

天正十五年、亥七月晦日、得豊臣姓、叙從五位下、任和泉守、秀吉逝去、後属家康公、慶長五年、子年五月十九日、於三州池鯉鮒、為加々野井、弥八、横死、弥八刺、忠重吉時、堀尾刺、弥八。

弥八が懐中に狀あり、治部少より和泉守を討来るに於ては、可為多賞之由、文章こまやかなりと云々。しかるによつて、加々野井こしらへて討於饗應之座。

或秘書記録

家康公佐崎追討のため、取手を築かせたまふ。信元、荊屋より見廻として来る。去年は公刈屋小河之勢と戦たまふといへとも一揆なりける故に和睦す。信元と軍評定之ところに、戸呂一揆原、取手を妨んとしければ、家康公、信元はかへらるへし、我は上和田へ敵を追こめ可討と仰せられけるに、信元も制しかねて出けり。此時小豆坂といふ処にて、一揆石川新七郎、佐橋甚五郎、浪切孫七郎、本道を閉にのく所を、藤十郎追詰新七かへせと云かけて、突伏、かれ小團を添て討取。太郎作は大見藤六を討取にけり。針崎より上和田へ取かくる原木坂と云処にて合戦時に、蜂屋半之丞、小危きを見、蜂屋うたすな者ともとて、吾もくと追かく、蜂屋引かへす所に、家康公追ひ鎗を以突たまふ、つかれて蜂屋引退けりとなん。二月十二日、信忠攻、勝頼刻、同水野監物、毛利河内守等、岩村より信州伊奈口へ打越。

筑紫陣、向州表に向ふ人々の中、五月廿日、太平寺を打立、押日向。

近房 傳兵衛 傳藏子 為御小性組、入大久保豊前守組。

女子 中山五郎左五門。後刑部少輔妻。尾州知多郡、矢部一本屋鍋領主、太平記中山五郎左衛門光能、大藏冠廿三代孫、刑部少輔光種四男也、此末流ト云々。

勝成 國松 藤十郎 日向守

天正八年、与諸將攻田高天神城、取守之。九年三月、城陷、執首數十、國松手、凡十五、献之信長、家康公、信長賜感書。同十年、北條氏直出、張甲州、与家康公対陣、于時北條左衛門佐出三坂、懸黒駒陣、狭口、鳥井彦右衛門陣于惠林寺、鳥井及勝成、発兵攻戦、数度勝成討取内藤敵陣、敗走、諸將斬首各数百、献之新府陣、則梟首于敵陣前、氏直乞和、引還于小田原。同十二年、長久手合戦、一番執首往家康公本陣、内藤高木進陣、此時、献首者、四家康公悦而進旗、并伊直政先登、勝成後怒、直政疾馳、衝敵陣、討取黒母士、黒木口、牛、古ノ出ミラ仕タル者、ツキタラシ、首計、捕、ホロニテ、甲トモニ包ムト云々、勝成伯父、都筑忠兵衛ト云々、此日自斬首者三ツ。六月十七日、滝川入蟹江、勝成遮住、三九郎兵合、鎧被創、二所、家康公感其勇功、其後依讒言、叛父命、窃殺讒者、遊仕于列国。同十五年、秀吉征筑紫、勝成有志下向、于時佐々内藏助、領肥後、勝成仕之、國賊熊部但馬起、乱城守、即日攻落先登也、國賊守山城、險岨不可拔、築対城、使三田村守之、城中粮乏、毛利家入兵粮、國賊遮之、橋左近与之戰、勝成軍功拔群、國賊引退、攻由計城、渡川斬首二級、攻竹宮城、有軍功、佐々内藏介背制法、國除、小西復津守、加藤主計、頭領肥後、小西據守、土小西、弟主殿居、久間城、勝成仕之、于時志岐大草、賊首蜂起、志岐者有馬修理亮、舅也、以故蒙本領采

堵者可以城降行長遣小西弥三兵衛伊秩文太夫於城成約志岐給而擊殺伊秩兵三百余人弥三
身脫出行長大怒九月中旬陣于江津与加藤輝合同廿四日渡志岐海陣于山上志岐亦登城中兵成
列勝成進曰敵陣騷擾可擊而取之以弟小西主殿助為將勝成先登接戰鎗下高名敵引入城中破外
郭門又取首收兵翌日加藤清正渡海張陣本戶賊首民部大輔作援陣于志岐城之東山清正為討天
草賊以加藤肥前守山岡道阿弥為將岡田將監南部無右衛門小野木織部菟野三位為副挑戰民部
大輔自山押下突戰先陣敗走清正以庄林森本飯田等為副手自擊刺數十人副將亦死戰民部大輔
不能支持而敗自是追擊二三里伏尸流血行長与清正同圍志岐城遂拔之十月朔日攻圍天草本戶
賊廿三日東城勝成先登斬首一級進至城下敵十余人突出勝成擊殺六人即日拔之清正據之肥前
賊悉平此後勝成遊仕列國州処顯勇力家康公在伏見時召還麾下慶長庚子與州陣供奉
七月忠重遇害家康公賜家督還住苜屋八日東國大軍攻落岐阜陣于青野原冷松下石見守保曾
福田壘島津陣于栗田欲襲曾林并伊本多令勝成守之与嶋津有缺炮足輕九月十四日家康公着于
赤坂願在麾下仰曰曾祚者要路也敵避往粮道軍中可為難儀宜堅守曾祚十五日關原合戰勝成及
水野市正拂曉破泉田東大垣城破三丸放火町屋收兵陣于林寺内城中保守兵福泉右馬助為將相
良秋月高橋寬木村熊谷其勢七十五百人也大垣打破之由以東使告關原營中家康公特褒捷功十
六日夜相良左兵衛高橋右近秋月長門守飛檄告勝成及松平丹波守曰三人若賜本領案堵斬福原
并四人首可以城而降矣而將共喜功速成願之約曰斬首者可揮旌此時可賜大將旗約束既定十八
日以相良兵部為使獻熊谷内藏允木村惣左衛門父子寬和泉守四人首揮旌仰永野郎等餘亦与八

即持旗二本入城丹波守十五日攻戰給諸將欲乘本城福原防戰有使攻者敗勝成遣使於城中可出
加々野江子天然則可申行案堵福原應勝成命出加々野江子拳城而降逃高野山勝成及西尾丹後
守據大垣城後松平周防守代之同十五年戊午五月十一日叙從五位下任日向守同十九寅年
大阪作乱家康公陣于住吉勝成卒大和勢并堀丹後守丹羽勘介等着于住吉以御喜候陣後蜂須賀
淺野襲取織多城此時命勝成永井右近令見蘆嶋至新家居之道筋見畢右近敘歸住吉勝成曰我与
丹後守可止此所今夜可襲取阿波座右近曰而使一人不可止強爭不聽歸參住吉申此由其夜蜂須
賀襲阿波座其後自城中燒拂天滿仙波備前嶋引籠家康公被問曰天滿橋存否依敵備近皆不見
分令勝成見之此時仰西國軍兵以天滿材木作植柵可圍攻城石川主殿頭入仙波町西國大名陣于
川籍樓橋三分二之由言上十二月廿二日大坂講和翌年大坂起家康公御座于二條城秀忠公御座
伏見城以上井大炊頭酒井雅樂頭安藤帶刀成瀬隼人本多三弥五人為使有仰旨可參二條城仰曰
可為大和口大將去年以大和勢被附藤堂和泉守当年以和泉守并伊掃部頭為隅南口將汝方以大
和勢松倉豊後守神保長三郎別所孫二郎桑山伊賀守同佐衛門位同左近本田左京秋山右近藤堂
將監山岡四書為旗下丹羽式部堀丹後守副之其晚又有召仰曰回大和口与大手藤堂并伊於隅南
可合于時刻不可違旗本之勢若有背法令不得上意可誅之不可輕身手自鬪戰勝成領之其日晚着
長池大和人民誤走曰大坂勢燒郡山入奈良代官中坊神藤林等棄南良來長池勝成疾馳馬可保
奈良夜半到奈良大坂勢猶在郡山与松倉十右衛門與田三郎右工門同保奈良大坂勢退引翌日進
陣于法隆寺本田美濃守陣于郡山松平下總守陣于六條五月四日自秀忠公賜金子五十枚五日進

到國府其晚後備美濃守下總守着國府陣南山際正宗先手片倉小十郎未見陣場勝成登片山與中山勘解由村瀨左馬助見陣場美濃守馳使曰貴方陣片山我陣國府諸人同此議勝成進曰片山愚也難伺敵出不若陣國府見敵之衝靜則歸國府夜半見藤井寺方松明數千本相連無程打滅於是知敵在藤井寺吉旗下兵先伏鉄炮備前待之敵將後藤又兵衛自藤井寺前達菅田宮脇懸大和路夜半登片山於鉄炮揚關声松倉與田岡本加助登片山接戰與田岡本等數十人討死我兵不進勝成勵士卒數度攻戰再羽助介陣于道明寺傍進入橫鎚縱橫馳擊敵人敗衄勝成拔群追擊中山勘解由水野美濃守村瀨左馬小渡一筋石橋于時本田左京一軍將敗之時四人下馬取鎧衝突敵人不_レ及拒戰而走勝成即從川村新八郎討薄田隼人正宗即從討後藤又兵衛勝成即從杉野數馬此日一番高名所討取首數百載曰録蘇之隅南西御所_レ有御感賜金子於使者大坂勢猶持平野陣于藤井寺近_レ勝成遣使于正宗曰今朝戰先陣敗今因勢摧之_レ可_レ擒矣我兵疲貴方挑出擊之可得大勝正宗曰我與真田數度接戰兵多被疵不可_レ再戰勝成再催強之正宗不聽而收兵又與本田美濃守松平下總守欲相議曰以三將備為三陣可_レ當大修理亮森豐前守使中山勘解由告而將美濃守不肯之曰已及夕陽大坂勢万余騎放火陣屋引退大坂七日朝發兵向大坂家康公以豐嶋主膳關宮權左衛門為使仰曰勝成昨日合戰摧士卒被疵今日必待麾下到住吉可_レ相待既到安部野越前少將與茶臼山相對勝成不行往吉陣茶臼山與越前勢同死兵進登茶臼山追擊真田子息美作守卒士卒入城黑門斬首數百級到天滿川鑄勝成自仙波道欲入城于時明石掃部介放鉄炮逆戰在前者不能支而敗勝成下馬執鹿筋士卒圍戰即從廣田四書小關佐次右衛門合鎧四書被突倒敵欲執首勝成斬其敵引起四書

命岸文允衛門斬其首敵競來勝成自突二人殺一人使成賴久大夫執首敵已退散自入櫻門一番立旗越前勢次立旗其後城燒滅元和三丁巳年九月十一日領大和郡山六万石元和五丁未年八月四日領備後國福山十五石特命侯伯新築城居之為西國警衛寛永三丙寅年叙從四位同十六乙卯年讓家督於勝重隱居号宗休勝重。

慶長十三年初奉台徳公同十四年任叙同十九年大阪役勤之寛永九年肥後國汝收勝重稟台命特賜駿馬往肥後國鎮衛城廓同十五年肥前嶋原吉利支丹之徒蜂起之時勝重受命從父勝成與諸將進攻城既而賊徒皆平同十六年家督同十九年叙從四位下信解院理山自證号美作守。四品政儀。

元和元乙卯五月六日後藤又兵衛年房元基次勢先進藤井寺之前より菅田之八幡宮之脇を片山之よりか、りけるを追崩し前明寺を超越菅田之社まで討詰たる勢の内。

藤十郎 元民部 備前守 日向守

寛永十六年初奉拜將軍家同十七年庚辰十二月廿九日叙從五位任備前守明曆元乙未年五月又遺跡同年十二月廿八日改日向守寛文壬子年十月廿九日死宗英大居士廿九歳。

勝慶 母松平左近大夫康政女為酒井空卯女
民部 美作守延宝三乙卯十二月廿六日任叙

此妻酒井雅樂頭忠清女 元祿十年九月卒
勝長 教馬 膳岐守 奥備前守 勝通男 妻 内田出羽守正衆女

元祿十一年五月依松之助早世被沒收福山十萬石雖然依先祖代々之忠節以勝長為勝慶之嗣
賜一萬石之米邑同十二年八月二日為御小姓同十三年十二月任叙同十四年正月十一日加倍
三千石同十六年正月九日加倍五千石都合一萬八千石領野州結城同年十二月卒。

勝政 内膳 櫻津守 奥備前守 勝直三男 母 家女 荒川与十郎 元祿十七年二月家督相統

勝通 教馬。生武州寬文六年十二月謁公任備前守寬文六七月兄家督之時五百石配分延宝五年
七月十八日中興御小姓同六年六月三日御扈從元祿年中京都町奉行于時加倍五百石。

忠清 隼人正從五位下為大番頭大坂兩陣供奉先鋒下知其祖令各有功元和二年賜三州新屋二万石
寬永九年申年七月十一日賜同國吉田城領四万五千石同十一年加倍五千石十九年壬午九月
七日賜信州松本城領七万石正保四年丁亥五月廿七日病死六十六歲。

忠直 母中川内膳正久盛女
鍋介 中務少 隼人正 寬文六丙午年十二月廿八日任中務少叙五位同八年戊申八月廿一
日父遺跡信州松本城七万石。
女子 片桐長十郎妻

女子 小笠原上野介妻

忠智 金十郎 刑部長門守養子

忠房 或忠位 肥前守 寬文九年己酉十二月廿五日任諸大夫

忠定 松平越中守定重三男

女子 加藤肥後守清正妻 清淨院 忠直 八十郎 家康公御養女

水野由緒之覺書

或本に 清康の御時尾州守山城主松平内膳信定 櫻井と也 むこ小川の水野 天文のゆくそく有と云々。松平
藏人信忠室は左衛門太夫妹與平監物貞勝母も妹也。

三州額田郡寺津城主大河内左衛門佐源元綱女号 いおまん 萬。おまん母は尾州住人宮野善七郎女也。
一本宮善忠とあり 善七養子にして清康卿に遣す。清康様よりおまんは年まし也。隱なき美人也。

清康様にわかれて後水野左衛門大夫忠政妻と成。此後又菅沼藤十郎妻に成。又其後川口文
助妻。老後慈仙と申比丘尼にて大河内源三郎政局宅駿河國府中籠がはなにて死去。葦陽院
玉桂慈仙と号。永祿三年死と云々。駿州の葦陽院是也。水野左衛門太夫忠政ある本の趣は近守此
人也しかれとも代々如此申傳。かたにて傳通院様水野藤二郎同惣兵衛 和泉守事 惣兵衛とも 此三人を産る
よし也。

傳通院様には慶長七年壬寅八月廿九日御逝去、七十五歳なり傳通院様御誕生、享祿元年に相見候清康様は天文四年横死被成候、享祿元より天文四年迄八年後に候、しかれば松平記のこたく水野忠政離別の後清康公へ嫁ける状。

中山系譜
訂正増補
補遺集
卷二下

中山

兼家

道兼

兼隆

兼房歌人

攝政

関白

西番

右少將正四位下

兼仲 左少將 應徳三

宗綱 八田下野守 奥守都宮宗田子

宗房 備後守

宗隆

宗基 藏人守藝守

其基光

忠光 伊勢守

光経 刑部大夫

光氏

光能 中山五郎左工門

在大平記

中絶

勝時 中山河部太輔 元五郎左工門 一本民部太輔 尾州矣奈部城主

天正十年六月二日於三京都三條信長公一併討死云々

勝政 伊石工門

忠光

忠勝

勝久

勝守

長田

尾州野向大房

女子

水野左衛門大夫忠政妻は宮善忠女也。

後ケンノフ記と云

水野藤次郎水野惣兵衛忠重をうめり。後

家となりて松平清康公へ嫁せられけり。廣忠公は近江衆青木筑後守女に清康公のもうけた

まひ、仙千代殿と申す。大和ろんこにはこれをあゆまり、忠政養女青木か女家康公御母とあり、大非也、水野左工門大夫正康とかく

も信也。廣忠公もうけ給ふ後善忠女を呼玉ふ。

清康公御横死之後、菅沼藤十郎妻となれり。水野下野守信元は忠政先妻の腹なり。清康公御

内室は岡崎彈正左衛門女也。此御内室御死去の後善忠女を迎給ふと云々。

廣忠公御内室は水野左衛門大夫忠政女也。御大房と号、傳通院殿。天文十一年十二月廿六日家康

公をもうく竹千代殿と申す。竹千代様三歳の御時に御前をは離別也、其後廣忠公三州田原の

白田か女に女子二人もうけ給ふ、一人は荒川甲斐守室市場殿と申す。廣忠公御室離別の時金

田と申者我等父阿部四郎左衛門 定永 金田二人以上侍分十五人御供にて送たてまつる、かりやと岡崎の知行さか

ひにて御室仰曰、送り來候兩人の者と、も下々をめしつれ早々罷歸へしとのたまはせたまふ、

兩人申上候は、殿様被仰付に候間、川屋迄是非御供可仕旨達而申上候處に、重而御意には、冗の下

野守殿信元、た、ならぬ短氣の人に、みな、小川までまいるにつけては、御殺可有、さなくは

かみをそりて追放可被成、さあらは我こそ除て行とも竹千代岡崎にあれば、以來伯父の下野殿

を竹千代かうらみ可申ぞ、みな、をたすけんためなり、兩人小川領の百姓をよひ出し、御こし

をか、せ、さて面々岡崎へかへると、林の中へ入て少休て見るに、小川より水野左近高木主水

三百騎斗にて御迎に参り、みな、下馬仕て申ける、御送りとして岡崎より侍とも來り候は、

討取可申旨野州御申候とて、初織をぬくに皆下には具足を着す、御内室早とく送りの者は歸る

よし被仰間、それより左近は歸る、今の水野太郎作か祖父也、主水は今の主水か父也、阿部か老父

と金田は、から、命いきて岡崎へ歸候由常々申と云々。此御内室の姉を、先年形原へ入典形

原より離別の時、送りの士三人野州より殺けり、誠に御内室の介別に依て、各たすかり申候也。

後に御大房と申奉る。

廣忠離別の後小川の與力阿久比庄坂部城主久松佐渡守所へよめ入被成律義なる士也。こゝにて松平玄蕃頭室松平源三郎松平内膳室因幡守隱岐守をもうけゝる。

松平記

一櫻井内膳子典一其子内膳与一弟与三郎其子安房守龙馬允也。与一死去の後に弟与二に兄の妻を被下子兩人有是御大房腹家康公同胞の妹也与二死後其弟に被下死に欠落仕間甲州乱に甲斐衆保科彈正高遠城にて妻子害し此方へ御味方仕間与二が後家を被下彈正所にて黒田疏前室阿部弥市室小出大和内儀男子二人後の彈正北條出羽を設与一所にては内膳斗也。

一櫻井内膳但祖父内膳也むこには水野下野守松平大炊介

大給松平和泉守源三郎事松平上野介也。

松平記

一美濃國遠山城に秋山座光寺楠麓外信忠御これを圍る。糧盡道具をひそかに出し近郷にて塩味噌にかゆる時尾州小川并かりやの者とも程近きによつて道具あまた替取由聞へしかは佐久間右衛門信盛内々水野野州と中あしかりしかは次てよしとよろこひ水野秋山と一味し糧を城につけ申旨信長へ密諺をかまふ。信長大いにいかり下野守方へ此段いかにと御使あり野州おとろき段々申介として家老を一人のほせけるに此者信長の使と道にて酒に酔過喧嘩して互に打果し死下野のよ言介たす佐久間父子はしきりに讒言仕によつて家康公へ申付られ同年十二月廿七日平岩七之助承て岡崎の城の近辺にてなさけなく殺害に及ぶ。

長子藤四郎三州蒔屋にて生害すとかや。久松佐渡家康公を恨みて暫義絶。下野守に女子あまた有下叔に男子屯入去年生れたりしを客人といふ女房才覚ある者にてひそかにかくし我子と名付後に家康公へ奉る。成人の後公外様の士小細戸後と云々土井甚介小左衛門と一説といふ者に養させて御取立也土井甚三郎利勝是也。野州跡をは佐久間申請所に欲心にふけりかりやの古き侍水野左近以下追出跡を己か藏入にし不作法際限なし津國の討手勝利なきをいかり信長改易せらる。天正八年の比佐久間改易の跡野州弟家康公御方に在し水野惣兵衛藤十郎忠重世を呼出し小川蒔屋一團にたまふ是ははるか

一或書に口六月抜の比山田高向光定宿所千勺内宮の祿宜の館にして七夕に星もあふかけやはうつすいす、川七月十七日に大湊まで出て尾張國知多郡と鍋とひ津にわたりして三河國かりや水野藤九郎宿所千勺朝きりは波もてゆへるまかき哉八月四日駿河の府にくたりぬ。う津山齊藤加賀守宜元泉谷といふ所をしれりけるにたよりしと云々。比は永正十四年臘月廿六日七十にて書ける。同時の津國茶川城主能勢因幡守頼則、越前朝倉太郎左衛門放景、飯尾善六郎為清、三河國牧野古田古田と云し隱者其前四五五月より天龍川をへたて、武茂于時治部大輔三州さかひ瀨松座引間といふ地に國の牢人以下七八千楯籠去年冬より此夏まで矢軍まで也八月十九日に終に敵城せめおとされ生捕千余とぞきこへし。

去年より遠江國のあらとひ出来甲斐國勝山といふ城に此國より勢をこめられし、ひ合の國人心かはりして人のかよひ絶はてつ正月廿二日还作よりあつかかへきよし行被云々。

今川修理大夫氏親養元父

一老葉集注の序に水野藤九郎近守とあり三州かりやの城主云々連歌上手となり。
一天文の比にや熱田の商家に一女あり。尾州第一の美麗たるよし、かくれなかりしかは古渡の
城主織田備後守信秀入道傳聞て召よせらるに、父母奉公を嫌て不応之。入道怒て無理に奪取
て於城中寵愛して男子を設。是信長の末の翁也。老年には熱田に蟄居して舊武におこたる
に似たり。名を越中守と号して、壯年には沓掛城に住す。備後入道卒去後小川城主水野下野
守信元彼女を呼て常滑監物妻河和孫八郎妻大崎七郎石衛門昌妻土井大炊等一腹の生ときこ
へし也。

一藤九郎討死の時。氏真感状。

駿遠兩國知行勝間田并相山内田北矢部之内被官給恩介等之事

右今度於尾州一戰之御大高沓掛虽相捨、鳴海城堅固に持詰段甚以粉骨之至也、虽然依無通用得
下知城中人数無相違引取之糸忠節無比類、刺刃屋城以善策、城主水野藤九郎其外隨介之者数多
討取、城内悉放火粉骨所不准に他也、彼本知附永不可相違候然者如前々可令所發守此旨、弥可抽
奉公狀如件

永祿三年六月八日

氏真在判

岡部五郎兵衛殿

岡部鳴海の城より駿河に歸るとて、かりやの城をうかしひけるに、少子細あつてよき士一人も

近所に不置油断の躰成を見すかし、岡部同心伊賀衆を以瀆の方より忍寄、火を放攻かゝる所に、
藤九郎さばく所を忍の者とも押入、つきふせ首を取といへとも、小勢にて城を持へきやうもな
ければ先手をよひかへし、こゝをふまえんなど、申処に、城外にゐたる水野か家老上田玄蕃即
時に攻入、城をのりかへし、主の首をとり返す、刺伊賀衆廿余人まくらをならへ討死す、依之岡部
早々に引返すと云々。今度おけはさまにて齊藤掃部頭討死加賀守元末か、其比、同國沓掛城駿府勢明退所へ
織田玄蕃入城して、其外三州岡崎へ出張して、度々足輕せり合ありとぞ。永祿五年四月濱松遠
州引關、城主飯尾豊前守飯尾善六郎為清末か、信長へ内通のよしにて、氏真の士新野左馬族大將とし
て討落飯尾并同心渥美森川内田以下討死。

一水野周防守元氏は大高大膳外事とぞ元氏曾水野左近高末主水

一水野藤助知多郡荒尾平嶋城主也、小河にて戰に武名あり、松平記等に出。

一水野藤藏、小幡景憲軍書に、慶長五庚子年九月美濃岐阜の落人同國清水に籠り居る、小屋落しに
井伊兵部衆参る時、川を隔て迫合、長田権左衛門其年廿六才にて、拔寄手の足輕の事は不及申、他
の足輕迫下知して、竹杖を取て能為打廻屋敷かまへに攻入し、かも奥の門迫敵を迫入、権左衛門
内蘆立留之介垣越に鎧手を負堅固に引取時跡より渡辺源十郎其次の水野藤藏三浦権大夫指
継といへとも、深入にて早々立退、初中後権左衛門家來留之助兵五郎上下三人ゆけ出たる働也
藤藏も人並をすくれたり。

一高野山常慶院有之消息 元興谷次寮中大通院ト号、後常慶院ニ改ム。高野山宝幢院次寮先祖附雖為宿坊、

及廿ヶ年無御音信候間然者寺家之儀依無案内蓮花院岸之寮申請に而一札進置候就其双方相
論候間則三十六道場以書狀尋申候処に山之儀從往古旧證跡次第之理運定候条次寮可為宿
坊之由御返事相得申候此上は末代不可有相違之仍後日如件。

永祿七年甲子菊秋日

水野藤四郎元茂

印

1。水野前下野守

信元 印

與谷

次寮 参

此時緒川之取次元茂方 清水左京亮

苜屋之取次信元方 齊藤助十郎信家也

今一通不及文章記

永祿八乙丑十一月日

今一通信元一判の狀有

水野藤四郎元茂判
水野下野守信元判

信家狀有其末に

信家

秋中順阿御同道候間可被成御下候其刻可申談候由候其上其貴前之下野守御理申候事之由に
候猶子細梶河彦左衛門可申入候恐々謹言

信家 印

六月十六日

右は齊藤助十郎紙面上畧なり

1。未一通信元消息あり文異事なし

訂正増補
補遺卷一
巻ニアリ

觀應二年 正平七年

觀應二年二月十二日証文口宣

應永十九年十二月廿四日口宣

文明十九年丁未四月廿二日罹病乾坤院ヲ建五月十八日死

永正六年己巳五月廿九日死小川位牌

永正年七月廿日比

天文十二年癸卯七月十三日死1

天文十三年甲辰十二月小川入海社被札如此

天文廿一年壬子三月八日証文家札ハ清水左京亮

慶長五年 横死

水野和泉守忠重 惣兵衛事

水野下野守信元

水野十郎左衛門信近

水野右衛門大夫

水野藤九郎

水野前野州太守

水野藏人貞守

水野備中守平致高

水野平七致國 左工門尉

水野平太致秋 顯トモ

年代表及水野氏系譜附編
補遺卷一ニアリ

尾州春日井郡瀬戸

貞觀元年尾州瀬戸陶家盛作瀬戸物是也順徳院朝加藤四郎右衛門始作建曆年中永平寺僧元遊

中華加藤氏從之入宋習陶家之秘歸所作者最貴重之世畧其名稱藤四郎後剃髮号春慶。

貞享三丙寅年秋より名古屋町各所、替り候介

本町三丁目 福井町と改
同四丁目十月 富田町と改
長者町四丁目 小櫻町と改
長者町下町十月五日 嶋田町と改
下正方寺町下町 皆戸町と改
北材木町 元材木町と改
上田町西之切 五条町と改
同 東之切 和泉町と改
下本町 玉屋町と改
伏見町下切三丁目 濱町と改
下伊倉町 米倉町と改
赤塚町北之切 坂上町と改
天和三亥九月

廻間町

寛文七未二月 大船町と改
堀川片町一丁目 塩町上之切と改
又貞享三月塩町と改
寛文七年
堀川片町二丁目 同町下之切と改
貞享三年堀江町と改
承應二巳年三月
御園葎町 小船町と改
貞享三年
傳馬役七間町 松本町と改
又宝永五戌子富沢沢と改
正保二乙酉年

名古屋町 益屋町と改

慶安五辰年

下小牧町 吉田町と改

万治元戌年

小平治町 飯田町と改

元禄元辰辰年

鶴車町 本重町と改

元禄十五年

八重町 笹屋町と改

万治三子年正月

大火ニ付堀切筋廣小路ニ成申候ニ付
大津町より東諸土屋敷之跡へ右之町
屋移し山田町と改

宝永五子年

松屋町 万屋町と改

松原町 末廣町と改

松本町 富沢町と改

松姫様御名文字故改リ

名古屋町由緒附別紙ニ巻冊あり

尾陽雜記 卷之四

荒子観音

常海山観音寺と号本尊聖観音泰澄の御作也。天平聖暦の草創とかや。今の堂は前田又左衛門利家再建寺西十助奥村某に下知をさせて、天正四年に造と云々。此邑に前田先祖の屋敷の跡有之と云々。

唐食籠かこにして、三重にして、ものく見事也。

立像弥陀 沢摩法眼筆にして信玄公守本尊と云々。

信玄短冊

法華宝塔品偈頌之文

若暫持者 まき／＼をかされる紐の玉ゆうを

杖即観喜 たもてはほとけよろこひたまふ

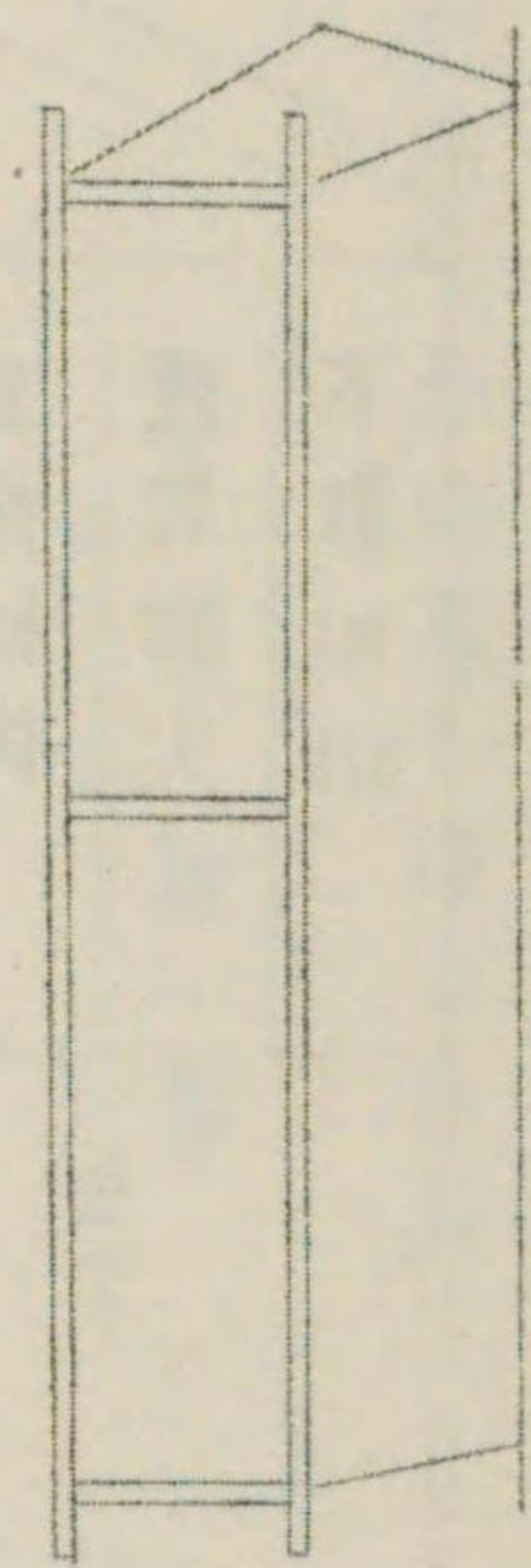
太刀。 應延^永八年六月吉日

備前長船口助廣作

長さは二尺七八寸も有へし

あふみ。一具。

はつきやうのものと水蓮鴛鴦を画かく。



ふるきものにして覆せつまひらかにしりかたし。

西蓮寺

柳面蓮寺殿貞経淳松大姉。信長女御崎三郎信康公御室と申傳。一説信長母とモ。

清須御城御園御門の近所建一寺の号西蓮寺城の近辺たるによつて元三の内は扣鐘をやめけりとぞ。今に至守其旨。開山は慶蓮院逞誉祖的と号甲州の生也。一生種姓をかたらずいかさま信玄の俗縁無疑と人々申あへりとかや。師は下総小弓大巖寺開山道誉と云々。此寺に信玄着領の具足二領有しを近き比の住の人にあたへて今はなし。西蓮院の寄附ありし佛器の

はた二なかれ信玄所持の沃摩の筆の阿弥陀の像有之。信玄の年当の貝とて金籠一あり。是破籠なるへし。同孫子の旗二つに裁て其一つ開山より傳切てはつひといふものに縫て有也。

疾如風往

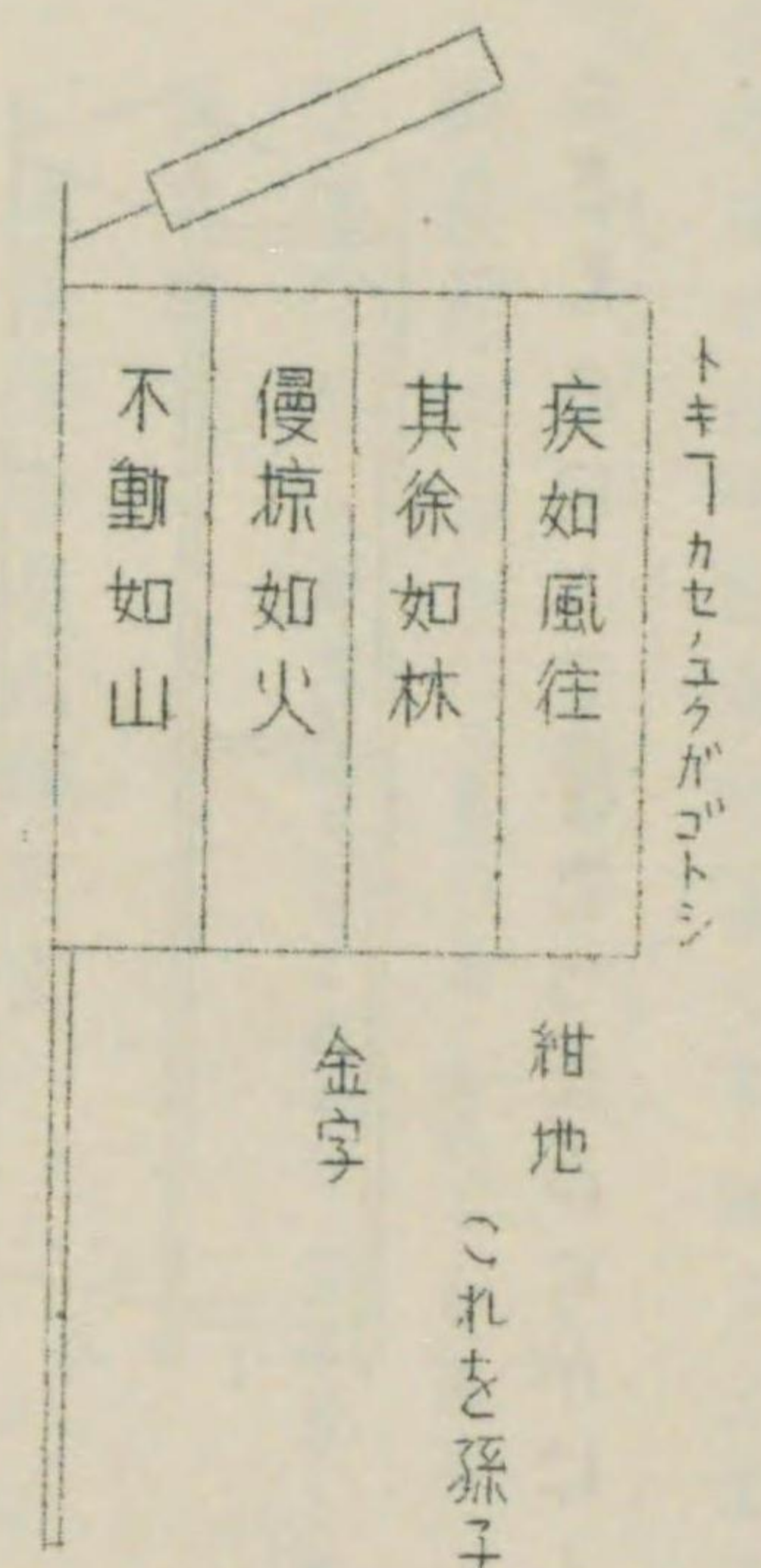
不動如山

此二行也

紺地の絹に金字也字の大き
八寸四分程も可有也

うるしにてうらおもてよりあつく金葉にて字を押たり。絹は郡内絹たるへし、あつくして地よき絹也。

信玄四月十二日忌日西蓮寺法事有。



小幡の書には其疾如風とあり。不審此内今ニ布のこれる事顯然也。

聖徳寺

東本願寺の末派也。開山の俗姓をたつぬるに小笠原氏の何某とかや親鸞上人につねにつかへて御弟子とはなれり。上人つねに持たまひしか、みありゆつりとして給るとき、みつからの御影をうつされしかは、その御かたちいまに失せず、ちいさき鏡なるか上人の立姿也。當寺の鏡の御影と申は是なり。年々十一月廿八日に開帳あり。其外重寶に松風の茶臼、龍樹菩薩の玉眼、又名号舍利等も侍るなり。

大須 観音

この大須と云こと、観音もとは美濃國大須といふ所にまし、けるを、大守之のころあたりに鷹狩をさせたまふに、鷹を連れていつち行けん見わたらす、かりそめに観音に申させたまふ所にたかきたりて御こふしに居れり。そのほか靈驗あらたなるに付て、これをなごやに引たまふとなん。しかれば、ふるき名をうしなはずして、大須とはいふなり。本尊は聖観音にておはすを、秘佛にて人さらに拜む事なし。比野山といふは、いにしへより天神の社あるゆへといへり。二王門を入れて向なる社頭なり、寺は眞福寺と号、眞言宗也。額は「一什宝さま」あり。中にも天神の自画の御影は、みきを備奉るに暫時に御かほ赤くなると申傳。

一此観音は根元勢州明野安養寺より起縁起に曰。

七 寺

長福寺と号して眞言宗也。元は勅願所なりしとかや。清州に有て古は七堂伽藍の地ときこえし。此寺名古屋に移さるとぞ。長承保延の比にや。さて本尊は阿弥陀にて行基の御作也。四天は運慶たんけいの作也。堂をつくれる材木は春日井の原に生出たる大木を切て用ひたるよし也。當寺に一切經の書写したるあり縁起も有てふりたる地なり。近く堂にある大威徳ののれる牛、清須にて奇異の事侍しとせ。一乘院寺中弘法心経有深点と云、大和十卷とも云、

大 佛

弥陀尊は春日の御作にて、上野塔地村に在けるを寛文五乙巳年三月の比、此所に引移し清凉庵をむすひ、かの佛を安置して、十日の念佛をはしめけるより、その去さかんなりき。佛のましますその跡、方かきころまで罪人を刑する処也。南の方弘法の御作の子安観音を堂を立て安置す。

惣 見 寺

織田信雄爲亡父信長建らるゝ所の一寺也。信長の牌名総見。信長公の御影、六月二日に毎年かけて拜也。延宝九酉年百年忌おもひやれ榻のはしかきもいとせの昔にかへる法の車を貞信

當山開山は宙外和尚と号。又宗藏也和尚

同園北市場興聖山松見院は、大守義直公開山和上隱居の領地に被下、興聖山の額は則大守の御筆なり。

信雄爲信長御建立の位牌あり。

イ帆字題目なり雨耶非雨、イ帆寒氣無風次第加、日午初看松竹緑、朝來一樣白梅花。イ帆字題目なり深開柴門護曉

霜霜紅只恐出吾牆、枝々勝錦十分色、葉々輸花一枝杏。

白林寺。東海山。額は天間獨立の手跡也。

從五位下布護少尹藤原姓成頼隼人正正成祖正頼より勇を以て家を起し三州出生の人なり。寛永元年十月病床に臥、明年正月十七日に卒す。仍遺命曰光山下野大権現の御廟の傍に骨を埋て築墳、大僧正天海に請て碑を立けり。しかるに赤尾陽の城南に一寺を建て、白林寺号、法号を宗心と号。碑銘杏菴書生別ニ載之 伊豆守之丞 堂上ウラニ殉死三人別ニ書之 石塔モアリ開山は蘭史和上也。有経藏。

大 林 寺。 福壽山。 濟家。 開山派

南山は夫龍座元たり、旦那は瀧川豊前守忠住イ証号大林宗悦イ祝此人の菩提所なり。忠住先尾州木全より出と云々。若年の比は木全彦二郎と申けり。十三歳はかりにて奉公ののぞみふかく、竜川左近將監一益に仕て扈從となる。しかるに数度心はせ有か中盤江城にて本丸にひきとると

きの下知等世以て人のしる所也。才あつて又柔和なりきとか也。さるによりて、益名字を
あたへけりとせきこへし。

征詮 尾州木全出木全又左工門

忠往¹ 同¹ 三郎後滝川豊前守

征成¹ 号半齊

元成 元権十郎 秀左工門

忠尚 又左工門

高岳院。浄土宗

家康公御子千君之御菩提所也。号高岳院殿。

千君相應院殿の御腹也。

此寺に奇異の石碑あり、扣は金をうつかごとく鳴也。諸人ゆきて石を投つけてこれをきく、元よりなる石にこそ。此石のめし今は一門たえはさけるにや、とふ人もなしとぞ。

性光院。浄土宗

松平下野守殿 改薩摩守 忠吉御御菩提所也 家康公御四男 秀忠公御腹

忠吉御は井伊兵部少輔直政かむこきみ也。尾州清須御在城關ヶ原御陣被逐御高名つたへ聞て書。慶長三戌戌年八月十八日秀吉薨逝のち五奉行乱をおこし、同五年庚子九月十五日關ヶ原にて御合戦あり、福島正則ほん道を西にむかふて討て出細川忠興、黒田長政、加藤嘉明、井伊直政等一勢、てきに対し先手すてに戦をはしめいとみあふ事数刻也。然所に、直政忠吉御

をともし先手にかけぬけんとする。福島公兵士可兒才藏かけふさかりて、井伊が魁兵を通さしとす。直政公のおほせによつて、存候の爲にゆくなりと云。可兒しからは御人数をのこされ、御自身御馬廻少々めしつれられ候へと申ければ、尤也とて忠吉直政隨從四五騎歩兵はかりにて、先手のはきよりつとかけぬけて、むらかりたる敵の中におめいて入、万卒にあたつて力戦す。てきも若輩を大將とや見たりけん、忠吉なのらせ給ひしゆへにや、とつてかへせは、たかひに馬よりおりたちさん、に太刀うちしてき強兵にして御うてにかす手をあはせ給へは、今はかうよと思ひこみ、無手とくませ給ふ。直政これを見て、殿よく仕たまへ直政見物すと、言葉懸けてうちよする所は、つみに敵をうちたまへは、嶋沢阿知波成田などはせつき、引おこして首を取立、あかり直政にのたまひけるは、最初に疵をかうむらすんは、是ほと手間は入ましきと被仰もとの陣にかへり給ふ。敵陣ゆふれて右往左往に散乱し。討中にも嶋津兵庫入道義弘千はかりの兵を順へ引退、東兵道をさへきり、うちとめんとするに、入道自身返合、くて戦て引、已にあやうきとき、甥の嶋津中務豊又とつてかへし、大勢を追しりせけ戦死しければ、毛利覚右衛門を始、家来あまたうたれけり。猶も入道ひつかへせは、老臣阿多盛淳入道長壽いさめて馬をかへして敵の中へ入、兵庫よとなのり力戦してうたれぬ。長壽、紀信か功をたつる間に、義弘万死を出て、伊吹の辺を通るに、河上左京同四郎兵衛、向久右衛門、押川六兵衛、久保七兵衛等打かこんで退く所に、井伊直政、忠吉御相ともに、阿部河内守、原田右衛門、遠山小兵衛、水野左馬助、同石馬允、朝岡平兵衛、加藤弥太郎、野村清次郎、鳥居一石、衛門、今井伊兵衛、酒巻伊右衛門、松井

武兵衛、水沢水右衛門、富永大学、嶋沢九右衛門、岡寺兵助、舍人源左衛門、同八左衛門、朝岡五郎左衛門、小笠原半内、同九左衛門、吉田茂助、石原九郎左衛門、吉原教馬、これらを始忠吉御を打かこみ百騎はかりにて追かけたリ。直政まつさきにすむ嶋津が勢ひたゞとありしき、鉄炮をもつて待かけたり。直政一騎かけにはせ來たるを、星になしてうつ。河上が兵士柏田源藏といふ者、大將直政をうつ。直政馬上に鎧をおとし、臂をいたみければ、その身もすてにあふみをこして落むとせし、処に敵兵一騎首をとらんとりかへる。中間に沼あり、これをまはるうちにのりなをる、落たる鎧を取あぐれば、てきもおそれて引かへす。そも汝手をおはすは、あまさしものをと齒かみをしてさひかへたる。後に直政忠吉御をとまひて公の御前に出下野守殿の高名の次弟を申上、逸物の鷹の子は、みないちもつにてと申せば、公されはとよ、逸物の鷹師かとり飼たる程にと仰られしと語り傳へけり。

慶長十二丁未年三月五日戌の刻に、江戸芝において御逝去有、御年廿九、号性光院。同六日石川主馬、稲垣將監、中川清九郎殉死。同十六日小笠原監物忠重、從松島着武州、江戸、監物は薩摩守殿自愛の小姓なりしか、被御取立悉、皆之出頭人なる所に、去年主君へ少述懐の事ありて、奥州へくたり、松島に閑居せり。父和泉守つけしらせければ、則松島を出上着、同十六日に於増上寺御葬礼の前立腹を切て、御供を仕る恨あるもの立腹を切故、與と説。そのい殊に神妙せと、見る人涙をながす。監物辞世とおほしくて

地獄をばつと、成たるわが身哉、さて行末に春風そふく

世にあるも人のかすにはあらぬとも又をともかももれぬ哉

監物小性、佐々喜内十八文同腹を切て供をせり。

辞世。櫻さく山のさくらは、櫻かな咲櫻あれは、ちる櫻あり

これは去年喧嘩して人を殺害す、其砌成敗あるへきをなすけられ、その恩によつて如此云々。同廿日左中將薩摩守殿御葬礼被執行前代、未聞之結構也。監物、將監、主馬、清九郎同ていねいなる御弔也。龕合て五墓も五世、是不吉之兆と申けるか、はたして同閏卯月八日午刻、越前中納言秀康、御三十四歳にして逝去。翌日永見右衛門、廿二殉死として、切腹介錯の士同自害。同十一日土屋左馬助、切腹して殉死を遂。是は生國甲陽武田滅亡の後、家康公被召出御小姓也。先年喧嘩して結城に行、去年秀康越前へ被召、四万石之領地被宛行、大野に令在、城子供二三人有といへとも、かつて遺言に不及、万事一團かまひなく忘却の躰にて、只主君の死を歎おもひ、これたるさま、餘義なくみへて、最後尤衆人を出て神妙也とかや。介錯の士同令自害、本多伊豆守すてに自害せんとす、家康公太御下知あつて留させ給ふ。これ万端の用人也とぞ。

若宮八幡 本町末

或説に曰相州がまくら鶴岡より勸請云々。

又同國井戸田より移せりとぞ。

千本松

いつの比より始りけん由緒はまた不知猶可考社は八幡也。

ある説云織田備後守信秀古渡城に住居し比信して詣られし八幡に而城の護神とかや。一説に

犬御堂

法淨寺といひ華光院と号。むかし此廼のあるし白比羅し飼ける犬有ありて側をはなれさりけるに或時此犬をつれて狩に出けるか犬けしからず怒さまなりしをあやまちて主に逆意有て只今かむへきけしきとおもひとりければ刀をぬきかの犬の首をうち落すに此首飛あかり梢にゐて其主をねらひける毒蛇にひしとかみつひてたゞ中をくらひ切てけり。主悔ともかひなく犬なからましかは命をとられんものと、犬のために一字の堂をたてりといひ傳侍。されともその奥をしらす。本尊は弥陀並不動明王を安置し、黒白貳つの犬の像を置り。

一女子村

古城。古渡の事は外に具載之

いづれの御時にか此國大領女子多して花粧田にとてまひらせ給ふによりかくなつけけるといへり。此外ニ女子村、四女子、五女子、七女子など、て近きあたりに今に名のみ残れり。其たしかなることは古代なればにやしれかたし。古渡といふは、往古にはこゝをわたしけるにや。

今熱田のひかたまてはほとへた、りけり。

くろかりの杜

神の森より、西に見へて八幡の社あり。森の中に辨財天の社あり、池の汀見事なる藤ある也。

神の杜

此森には神の名木相生にてしかも連理の枝なるあり。社は明神といへり。神木あれば、かくは名つくとぞ。

一説に、年々四月十七日東照宮の御祭礼に用る神は、此所より奉る事、今は此森に切絶て、余のたより切來て、扱こゝよりさいくるといへり。此森より熱田の方にならひ見わたして、鍛冶屋か森とて、松一むら見ゆる也。

此森は名古屋築城時一の鳥居の辺にて大石を割のみ玄翁など云、鉄の具きたひける假治多く寄て是を依りける跡とぞ。いなりの神社を勧請せしなるへし。

願光寺

此所からすの頭になる地形にや、又手の平になりとて、田夫手のひらとも云。

烏頭山願光寺は古き地にして、さたかにしれるものなし。多田満中より相統数代の願所也。或説、犬織冠の御建立とも云り。願光寺といふなのみへて、今はそのかたもなくあせはてたり。

古松老柏かれ残りたり、杉楠枝をあらさひなにとなくものさひし。然るを、此ころ爰に薬師を草庵に安置してけり。先年此地にむかしの堂の跡とおほしく覺ゆふれて落ちり埋れける瓦のありけるを、硯に彫用ゆとて拾事ありし。又此邑に、景清やしきといふ有。平家侍悪七兵衛景清が住し処とそいふなる。景清は熱田に居住せりとて今に景清の宮とてあり。猶屋敷のあとも残りといへり。其景清の宮も尋るに分明ならず。願光寺の鎮守の社こそ、景清が宮なれといへる説もあれと、是又いふかし。鎮守は白山権現にてこそおはせ、又一説八幡太郎義家の再興ともいへり。今の薬師の中に、薬師の古佛のみくしを作りこめて有。これむかしの本尊といへり。いかなるゆへにや、御頭はかりのこれりと云々。そのふるさたくひなしといへり。亦此地鎮西八郎爲朝の菩提所といひ傳るよし、堂モリの申す。不審なから慥に申せば、載之。

此隣古き屋敷有。信秀の比、鬼頭宗左衛門と云者在しとぞ。今も其末田夫となりてすむ也。今は屋敷を半減してうれり。此鬼頭爲朝の從者の末流と申す。

沢 観音

富春山明安寺と号す。もと此辺に沢といふ処ありしゆへ、沢とは云なり。海道より東に沢といふ所有とぞ。聖観音ありけるが、堂も退転して、観音は民家におはしけるを、年久しきことなれば、人さらに知事なし。ちかき比、靈夢によつて、観音をもとめ得る者あり、即堂を建て安置す。

延宝五年一人の商ありて、件の靈夢を受信し、一字の堂を新に建。かのもの、先の類党政秀寺の雪岩和上これなり。しかればこの由緒を以古院を引もちゐて、いま沢の観音の開山に用ゆとなり。

今沢の観音を正体として古佛の名作の観音六躰を添七観音となし安置す。

清 須 山 王 神 明

天文の比までは尾州の守護は武衛と申。

此清須に在城せり。その、ち信長に渡り此城に住せられ、次に信雄の城となり、小田原陣の比は、秀吉、小早川隆景を入おかれ、秀次の領國となりし後、忠吉御まし、けるが、水攻の難ありて、城を愛智郡名古屋に移されてのち、次第におとろへもて行せ。山王清須盛なりし時は、城下の氏神として、歸依渴仰し、社頭拜殿美をつくせり。時うつり事替り、瑞垣も苔に粧ひ、築地も草にむもるれとも、神わざは時々に行る。権現の左右に廿一社立ならへり。山王は本地薬師也。神宮寺堂にまします。是弘法の御作也。

社の後の山に、清明の古本とやらんいひて名木有。今は枯て何の木とも見へわかす侍。

六 角 堂

尾六地藏のうちとぞ

此堂は竹田の番匠とかやの造れりとぞ。本尊は地藏菩薩釜にのりておはしけるは、大和國矢田